

自立した女と男を
人間らしい生活を
差別のない社会を
育み 創り出す

新しい家庭科

We

ウイ



6
1989

特集 家庭科—何を評価するのか



風の地図 遠雷
佐藤哲生



卷頭詩

蝶

朝の庭

花咲いたゆすらうめの枝に すじぐろ蝶が眠っている

目と触角と蜜を吸う管をすっかり休めて

深い深い眠りの底に落ちてゐる

きのうの花粉をあびたまま眠っている

わきおこる彫刻のような はねの黒いすじ

若々しい眠りだ

弱い風が 花の枝をかすかにゆらしている

蝶はゆるやかな覚醒に向かう

触角とくるくる巻いた口が形をとり直したように見える

蝶はぱつちりと目をひらいた

あおい目 緑がかって なんてやわらかい目の色

うちの庭にひと晩泊まった蝶

ゆすらうめは夢のつづきのような白い花のまっ盛りだ

We

ウ イ

1989.6 月号

【特集】家庭科—何を評価するのか

●学習の主人公たち「家庭科の成績ってなんだろう」

川名夕里子・稲邑朋子・脇 雅宏・柴 麻里 4

●アンケート「家庭科教師と評価」 7

■私がしてきた家庭科の評価 ・飯野こう 18

■評価—私の試行錯誤の一断面 ・柴崎和恵 22

■家庭科の評価について—大学の側から ・吉原崇恵 26

■スウェーデンの成績表 ・ピヤネール・多美子 30

■カナダの通知簿 ・井田裕子 32

【発言】

家庭科って評価できるのでしょうか ・佐尾和子 34

家庭科って、何を評価するんですか？ ・荒井理子 36

私は評価をこう考えている—中学音楽 ・松島赫子 38

私は評価をこう考えている—高校体育(ダンス担当) ・藤武礼子 40

私は評価をこう考えている—中学技術 紅谷昭治 42

共通一次所感 ・森 健太郎 44

●投稿「管理されるお産」 62／●こだま「名札なんてなくなつて」 63

●新しい家庭科を創るために

小学校では／一坪の田んぼで学んだこと ・山野幸司 46

中学校では／草木染を教材に ・吉川裕子 51

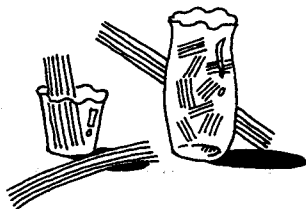
高等学校では／「食文化」—生徒と共に教材作り—(その2) ・田村より子 56

目次

風の地図／遠雷	佐藤哲生	
巻頭詩／蝶	羽生楨子	1
家族と家庭科／新指導要領と家族③	酒井はるみ	66
親子論と心理学／私の迷いと歩みのなかから	小沢牧子	68
海の輝く日／「賢治行」	佐藤通雅	70
広がるネットワーク／〈Ⅲ〉「強者の論理」再考	平井雷太	72
あっちゃ、こっちゃ、フフフ／「見る子ども」	田中正彦	75
筐／『鳥居』	村田直文	76
幼児クラブやってみる？／「母親みんなが保育者に」	佐多和子	77
KNOW HOW共学家庭科／高遠高校での共学 その2	湯沢静江	78
私の朝鮮史／正倉院と新羅	岡百合子	79
食べもの文化史／こめの食べ方①	石川尚子	80
よそおい／パンツ大好き人間インタビュー(3)	内山裕子	81
コンピューターと暮らし／その3	碧海西葵	82
石けんコンサート通信／モーニングシャワーはハゲる!? よしだあきひろ		83
波／とらえ直そう「評価」	半田たつ子	84

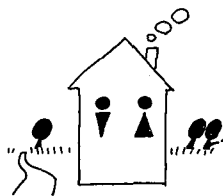
●ひと 佐藤通雅さん 65

- 私のすすめる一冊 60 ○イキイキぐるうぶ 61 ○わたくしからあなたに 86
 ○Weの読者会だより 88 ○Weの会通信 90 ○泉 91 ○十字路 92
 ○アンテナ 94 ○WE EDITOR'S NOTE 96



●学習の主人公たち

「家庭科の成績って なんだろう」



川名夕里子

わたしが家庭科を教えてもらっている先生は、作品のできればと、授業態度、作品の進み方で成績をつけています。

作品のできればで成績をつけるのは、良くないと思います。私達の中には、料理をするのが苦手な人や、生まれつき不器用で、さいほうが苦手な人もいるから、そういう人達は、

不利になってしまいます。だから、作品のできればではなく、本人が一生懸命やったかどうかで成績をつければいいのではないかと思っています。

授業態度でつけるのは、良いと思います。おしゃべりをしていて、作品のできが悪くなるのはあたりまえです。進み方が遅くて、他の人にも迷惑をかけているし、ふざけていな

ければ、しっかりできるのに、時間が足りなくなつて作品が雑になってしまいます。

でも、そういう人がいたために遅くなつてしまった人や、ていねいにやっていて遅くなつた人は、多分、良い評価がもらえていると思います。

私が家庭科で不満なことは、器用な人と不器用な人がいても、それをそのまま成績に出してしまうことです。一刻も早くそれに気づいて、直してもらいたいと思っています。

(中学二年)

稲邑 朋子

家庭科の点はいったい何によって評価されるのか？ ペーパーテストは二割ぐらいで、授業態度、作品の出来、などによって評価されているのではないかと思う。

まず被服の実技については、みんなが話をしながらやっているのので授業態度というようなものあまり評価の対象にはなっていないと思うし、それよりも、その作品の進み具合とか、出来とか、そういう作品への取り組みが一番重視されると思う。

調理の実技は一番好きな授業なのに、年に

数回しかないのがすごく残念だ。できれば講義の時間をけずって、この時間を増やしてほしいと思う。この授業は班ごとに調理したりするし、みんなとても楽しんで一生懸命にやるので、先生も評価のしようがないからあまり点には関係ないと思う。

講義の時間はみんなすごく静かで、すごく退屈な物に思われる。私はボーッとしてるか眠っているかのどっちかだ。でもまわりのみんなはすごくマジメに授業を受けているので、その中で眠ってたりするとすごく目立って、後から先生に呼びだされて、「睡眠時間が足りないの?」とかいわれて、その学期に成績が落ちたのもそれが関係あるのかなあとから考えた。みんながマジメなだけにそういう時に目をつけるとすごく減点されると思う。

ペーパーテストの問題にもいろいろなものがあった調理の要点などはまだ、「調理する時に役立つだろう」と思えるが、被服でぬいしろが何センチとか、ぬいしろはどちら側に折るとか、順序を並びかえるとかそういう問題をみると、「なんでこんなくだらないことを勉強しなくてはならないのだろう」と不思議に思う。でも、「何の役に立つのだろう」

というような考えを持つと、何もする気がなくなるので、あまり深く考えないようにしている。

ペーパーテストの問題はくだらないと思うけれど、それを評価の対象とすることには賛成だ。なぜなら、家庭科のテストは勉強しなければまったく点数がとれないけれど、きちんと勉強すれば、誰でもいい点がとれるテストだ。だからいい点をとった人はそれだけ努力したんだし、その努力を認めるべきだと思う。実技も最終的に出来上がった作品だけではなく、器用な子のほうが評価がいいけれど、作品へのとりくみも評価してあげることによって、不器用な子もやる気になれるだろう。

(高校一年)

脇 雅宏

僕は小さい頃から、母に料理やボタンつけを教えられており、そのおかげで小学校五年と中学校一年で習った家庭科の成績は良かった。けれど僕にとって本当にうれしかったのは、学期末にもう成績ではなく、その時その時にほめてくれる先生の言葉だった。残念なことに僕は技術科と体育があまり得意

でなく、それらの授業時間にめられたことがあまりない。しかし当たり前のことだがほめられてうれしいのはどの教科も同じであり、またうれしければ一層生徒が頑張るのも当然である。

中学校一年の頃、家庭科と技術科の相互乗り入れがあり、僕等が家庭科を習う機会があった。その際、包丁の使い方を見るということで全員が家からリングを一個ずつ持ってきてむいたことがあった。その時は、普段の練習のおかげでクラスで二位を取ることができた。その際、三位までの生徒が先生から小さな賞状をいただいた。はたからみればたいしたことではないのかもしれないが、僕にとってはとてもうれしいことで、その時の賞状は今でも大切に持っている。

そしてこれは小学校の頃のことだが、授業で豚汁を作ってクラス全員で試食することがあった。その時先生はすべての班の作品を試食してくれ、その全てを必ずほめてくれた。当然その中には失敗作に近い物もあったに違いないのに。しかもどの班も皆大盛りでつけるのを、残さず食べるのだから大変である。その時には、男子が家庭科を習うことに対して、不平を言っていた者も皆うれしそうであった。

二つほど例を挙げたが、結局何が言いたいのかと言えば、家庭科の評価というのは学期末の成績だけではなく、授業の際の先生の評価だというのである。よく家庭科や、芸術科目等の成績は、人それぞれの性格や努力以外の能力が出るものだから、一概に決められるものではないというが、それはそれで当然のことだと思う。成績表の結果が良ければもちろんうれしいが、それよりも授業の際の、その時その時の先生のほめ言葉の方がうれしいのではないかと僕は思うのである。

(高校二年)

柴 麻里

私は今、短期大学の家政科に籍をおいています。被服、調理学、栄養学、家族関係学、家庭経営学、育児学、住居学……と数々の教科を学習してきました。学習というより、あらゆる分野で研究を重ね、ご活躍されてきた教授や講師の方々の豊富な知識を少しでも私自身の血や肉としてしまおうと、どの授業もワクワクしながら出席しています。そうした新鮮な栄養分(色々な講義)を聞いて、知って、考えてみたいという考えのみなので、成

績などは全く気にしていません。もともと、これらの教科は非常に評定しにくいものばかりなのです。

こんな私ですが、中学校時代には苦い経験がありました。小さい頃から未熟ながら手芸やお菓子作りを楽しんできた私は、中学校に入り、週二時間の家庭科の授業で、専門の先生が教えて下さると知って心踊らせていました。そんな調子で成績のほうもまずまずでした。ところが中学の二年生も半ばのこと、唯一(?)得意とする家庭科の通知表についた数字がなんと「2」とてもなく大きな痛手をうけました。確かその学期のテストといえば、八十点や九十点とっており、夏休みの宿題であった、ししゅうしたクツションカバーは、区の展覧会に出品して賞をいただいたりしていました。欠席した覚えも全くないのになぜだろうと、大変悩みました。

しかし原因は、出席率でも提出物でもなく授業中の私語であったと思われまます。ひょうきんな友人との過ぎた私語を、ズルズルと授業中に引きずっていたのです。心のどこかで成績を意識しつつ、テスト勉強をしたり作品を作ったりして、それらの成功により、肝心の授業に対して気を抜いていたのでしょう。

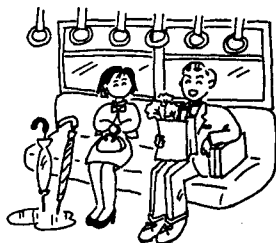
高校に入り、考えを改め直し、成績表の如何ではなく、本来好きだった趣味を学校でくわしく教えてもらっている、趣味の延長だと考えるようになってからは、なぜかずっと「5」でした。

いったい教師は、「家庭科」という授業のなかで一人一人の生徒の何を見い出して評価するのか。私自身の経験からいうと、非常に抽象的ですが、やはりいろいろな物事に対する「まじめさ」や「意欲」ではないかと思えます。ペーパーテストでも、細々した数値や名称は覚えなくとも、一応は授業で学習したことなのです。頭に入れておけばそれほど悪い点をとってしまうこともなく、手先の器用不器用にかかわらず一生懸命に作品を作り、授業でも度を過ぎた悪ふざけなどしないなどというところから、意欲というものを見い出しているのではないかと思っています。

しかし、私達の人間生活(男女共)に密接している「家庭科」という教科は、人によってそれぞれ生活価値観が全く違うはずなのに、教師という一人の人間が無理矢理に五段階や十段階に区切ってしまう、若いうちからむやみに「家庭科」の向き不向きをおしつけてはいけないような気がします。

苦渋にみちた

家庭科教師の回答



「評価」をめぐる、本誌では昨年来、さまざまな意見が交わされてきました。また、五月号で内申書を取り上げましたが、内申書裁判に長くかわつてきた方が「家庭科の評価に疑問を持ったことが、内申書裁判にかかわるきっかけだった」と言われました。家庭科の評価は、特に難しく、教師の方は頭を痛めておられることと思います。しかし「家庭科で何を評価するのか」は「家庭科は何を目標とし、何を学習させるのか」と、表裏の関係にある以上、いま家庭科を教えておられる方々の声を聞きたいと願いました。

なお、論議がずれないように「評定」と「評価」を左のように区別した上で、下記の七項目についてお尋ねしました。

○評定—学年、あるいは学期ごとの生徒の学習活動の結果を総括的に示したもの

○評価—教師の教育活動、生徒の学習活動を検討し、次の教育実践を調整するために役立てるもの

1 あなたの学校では、教科の「評定」を、通知表にどんな方法で記入していますか。

2 通知表や学籍簿に、教科の「評定」を記入することを、あなたはどうお考えですか。

3 家庭科の「評定」が、数学（算数）・英語のような他教科と比べて難しいのはなぜですか。

4 あなたは、家庭科の「評定」を、どのような方法でしていますか。

5 「評価」の教師自身、自分の教育活動を検討し、次の教育実践を調整するために役立てる働きはあまり認められていないように思えます。それはなぜでしょうか。

6 家庭科教育で「自分の生活を見つめ、それを高める力量を育てる」ことを目的にした場合、これはどういう方法で「評価」したらよいでしょうか。

7 家庭科教育で、重要であるにもかかわらず、「評価」しにくい内容はどんなことでしょうか。

一、回答率、これまでの最低

小・高校では絶対評価、

中学校では絶対評価が多い

Weの読者の中から、中学校百名、高等学校二百名を無作為抽出、

小学校は、はじめての試みとして、東京都の大規模校（家庭科専科をおいている）を対象とし、数名の読者の方をあわせて二百名、計五百名の方にアンケートをお願いしました。

回答して下さったのは、中学校二七名、高等学校四五名、小学校六名で計七八名の方です。評価は難しい上に、学年末ご多忙の時期ということもあるでしょうが、回答率は、Weのこれまでのアンケートで最低でした。

1 あなたの学校では、教科の「評定」を、通知表にどんな方法で記入していますか

回答は、下記の通りです。小・高等学校は絶対評価が少なく、絶対評価が多いのですが、中学校はその逆です。また十一や〇×をつけて、細かく刻んでいるのも、中学校に特徴的でした。

〈高等学校〉

(45名)

絶対評価 5段階―13、10段階―2

10段階で通知表に、学年末は5段階で指導要録に―6

素点・得点―6

点数で通知表に、学年末は5段階で指導要録に―2
点数で通知表に、1・2年の学年末と3年は5段階―1
その他―1

〈中学校〉

(27名)

絶対評価 5段階―4

5段階―1、10段階―3

計10

絶対評価 5段階―3

5段階―1、10段階―3

計7

〈小学校〉

(6名)

絶対評価 5段階―1、3段階―2、4段階―1

計4

〈小学校〉

(6名)

絶対評価 2段階―1、3段階―2、4段階―1

計4

絶対評価 3段階―1、5段階―1

3段階―1、5段階―1

5段階―1、10段階―1

5段階―1、10段階―1

5段階―1、10段階―1

5段階―1、10段階―1

〈小学校〉

(6名)

絶対評価 2段階―1、3段階―2、4段階―1

絶対評価 3段階―1、5段階―1

絶対評価 3段階―1、5段階―1

絶対評価 3段階―1、5段階―1

絶対評価 3段階―1、5段階―1

二、家庭科の評定を通知表・学籍簿に書くことについて、

小・中・高と進むにつれ、疑問が増す

(以下、回答者一人の時は1の記入を省く)

2 通知表や学籍簿に、教科の「評定」を記入することを、あなたはどうお考えですか

〈高等学校〉

* 苦労するが、通知表・学籍簿は必要。だから評定を本人も知り、記録に残すべき 2

* 疑問はあるが、拒否できない 2

* 生徒自身の自己認識のためにも必要

* 生徒に学ぶ意欲がないから、評定がなければ、生徒は取組もうとしない

* 疑問は持つが、個人の向上が文章で評価できるならよい

* 通知表はつけてもよい

* 学籍簿に記入することは必要

* 現在の学歴社会・教育の内容上、致し方のないこと 2

* 点数のみでよいと思っている

* 全く何もないのも疑問

* 事務的な仕事だと思ってる。評定は生徒のある部分だけを表すとらえている

* あまり疑問に思ったことなし

* やむをえないと思いつつ記入、迷いつつ記載している。評定がな

ければ、もっと魅力的な授業も可能

* 生徒の側面しか表しえないが、現実としてやむをえない 3

* 現状の体制ではやむをえないが、点数のみにとらわれる風潮を作り問題

* 当り前と思う半面、正しい評定であるか自問してしまう

* 本人の努力目標にはなるだろうが、あまり難しいのでたじろぐ

* 家庭科に評定が必要かどうか疑問

* 一応実状を記録

* わりに正直につけたのが、公文書として外へ出ることを思うとこわい

* 大変難しい仕事だと思っている。妥当性について常に疑問 2

* 無意味だと思いつつ仕方なく

* 学期末は、何時もこれさえなかったらと思う

* 点数で表わせない部分がある。成績の悪い子にたいして、この点ではやる気をうしなうだろうと悩む

〈中学校〉

* 学習に取組んだ結果を知らせる意味が必要 2

* 保護者と本人に知らせねばならない、当然のこと

* あくまでも生徒主体の評定なので、当然と思う

* あまり抵抗がないが、1のついている生徒には抵抗を感じる

* 何らかの形ではすべきこと

* 現状では仕方ない。入試・他教科と合わせざるを得ない 2

* 知らせることは必要だが、数字以外によい方法はないか

* 相対評価なので、個人の努力が生かされず苦心する

* 仕方ない。書かざるを得ない

3

* 疑問とわりきれない思いを持ち、苦痛

2

* 内申書に評定が必要だからしているが、本来は不必要

2

* 全く必要ない。弊害ばかり。内申が高校入試の二分の一を占める

2

* ことが、廃止を阻んでいる

2

* 抵抗があるが、やむをえず、いやいや記入している

2

* 相対評価で、しかも領域・技能ごとの評定でないから、家庭に知

2

らせてもわからないと思う

2

* 学籍簿に書くのは反対、通知表には文章で書きたい

2

〈小学校〉

* 教師の仕事として当然

2

* 学習の成果を知らせる意味で必要

2

* 指導した結果を見る必要があるので、いいと思う

2

* 親は知りたいだろう

2

* ほとんど意味がない

2

三、家庭科の「評定」は特に難しい。その理由も多岐にわたる

3 家庭科の「評定」が、数学（算数）・英語のような他教科と比べて難しいのはなぜですか

〈高等学校〉

* 「生きる」ことについて考える力を求めているので、答が一つでない

7

* 家庭環境の影響大、生徒の努力でどうにもならない面もある

5

* 実習の努力度を点数で出せない

4

* 家庭生活にどう生かされているかをわかり知ることができない

3

* 実習・レポートなど到達度を計ることが難しい

3

* 知識はテストで計れるが、生活力・判断力・応用力は判定できない

3

* 家庭科でつけるべき学力とは、自然科学・社会科学・技術などの総合したもので難しい

4

* 調理実習の評定が難しい

3

* 基準があいまい。教科の教育目標が人によって違う

2

* 大半の人がペーパーテストでつけていることに矛盾がある

2

* 個性・感性・器用さなど、客観的に評価するのは難しい

2

* 家庭生活に対する正しい視点がもてたかどうかなど点数にしにく

2

* 天性のセンスを評定できない。人間を評定することは不可能

2

* 評定で現し得ない人間性・考える力・実行力を認めたい

2

* ペーパーテストや作品のできればで評定するのは、胸が痛む

2

* 課題に対しての評定でよいのか疑問、作品は不手際でも、いつも

2

生活を楽しんでいる生徒もいる

2

* 評定することがナンセンス

2

* 生徒の一面面しかあらわれないが、現実ではやむをえない

2

* 実習点を加えたりして面倒だが、特に家庭科が難しいとは言えな

2

* 他教科も難しいので、特に家庭科が難しいとは言えない

2

* 難しいとは思わない

2

* 難しいとは思わない

2

* 難しいとは思わない

2

* 難しいとは思わない

2

〈中学校〉

* ペーパーテストのみの他教科とは違う。実技面をどう評定するか

* ペーパーテストで数的にはつきり出ない、生活経験の差、教材の素材・表現方法の違い、自由研究、グループ研究などがあるから 7

* 被服……作品のできばえだけでなく、努力の過程も入りたい

* 食物……調理実習でその実技を計るのが難しい 2

* 態度・意欲・内的な深まりを重視したいが、主観的になる 2

* 授業で得た知識と家庭で行っていることとのくいちがひ 2

* 生活を変える力は、即時的には分らない

* 教科書通りが正しいとは限らない

* 学力以外の部分をどのように評定するか

* 作品の評価はいいが、調理実習中などを評価するのが難しい

* 知識・技術・態度などを総合的判断する難しさ

* 個々の生徒の向上を認めてやりたいが難しい

* どのクラスも同じ条件で実技ができないのに、評定は県下一斉の方式でせざるを得ない

* 教師が毎時間、製作物に追われて、ていねいに生徒をみてやれない

* 3段階ならまだいいが、5段階は難しい

* 文章は不得意でも、実行力は旺盛ということもある

* 十年後、二十年後にどのような生活をしているのか、家庭科の「評価」といえる。頭で理解しても、生活に生かしているとは言

えない

* 以前は難しかったが、今は難しくない

〈小学校〉

* 知的なことだけの評定でないから難しい。努力しても、よい点数をあげられないこともある 2

* 共同作業や実習があるし、家庭ですでに既習のこともあるし、個人差が甚だしいから

* 技能評定は難しくないが、実践的な態度は家庭環境に左右される

* 最終的には家庭での実践だが、それを知るのは難しい

* 人間の生き方を学ぶ教科に成績評価をすること自体、矛盾している。技能面だけを見て「うまい・へた」でつけるなら直ぐにできるが

四、家庭科の「評定」には多角的な方法がとられ、苦心が

ありあり

4 あなたは、家庭科の「評定」を、どのような方法でしていますか

〈高等学校〉

* ペーパーテストを中心に、実技・実習・レポート・課題への取組みの姿勢を加味する

* 内容によって比重は多少異なるが、テスト・レポート・作品 20

c、なるべく多くの要素を入れる

* テストを中心に、レポート提出、授業中の態度

* ペーパーテストとレポート・作品・実習点が同比率

* 実技点でのみつける学期もあり、ペーパーテストの割合は少

* ホームプロジェクトなどを、テスト一回分として評定

* 実習点・ノート・授業中の態度とテスト点が5対5、または4対

6

* 被服分野では、ペーパーテスト50に実技50(上手さ・きれいさ・真面目さ・スピード)

* 客観テストとレポートが中心

* テスト・ファイル(授業中渡したプリント)・レポート

* テスト4割、実技4割、レポートなど課題2割

* テスト3割・作品のできれば4割・日頃の学習態度3割

* レポートと班学習を加味する

* 努力と伸びを重視する

〈中学校〉

* テスト・レポート・作品のできれば、ノートなどを重視

* 実技・態度・意欲・知的理解を等分にして総合する

* ペーパーテスト100、平常点100(実習・作品・授業態度)

* ペーパーテストはしない。レポート・ノート・発言・製作の進め
かた、作品のできれば(またはペーパーテストに重きをおかない)

* テスト・レポートと取組む姿勢・授業態度、作品のできればには

こだわらない

* 作品5割、ペーパーテスト5割、参加点、努力点・アイデア点などを加味

* 技能(作品・実習時の様子・計画表) 5割

* 知識(ペーパーテスト・レポート・実習後の小テスト) 4割

態度(提出期日・始業時の準備状況・授業中の態度・後片付けへの参加・反省など) 1割

* ペーパーテスト・実習・課題学習・学校生活での生活態度

* 学習に対する意欲・態度・実技・レポート中心。知識理解は30%

* 実技・態度・意欲・知識理解に忘れ物・宿題を加味する

〈小学校〉

* 客観テストを中心に作品・授業への取組み姿勢・ノート・レポートの内容を加味

* 3を中心にして(多い・少ないではない)、技能や授業への参加の仕方、発想の仕方などを加味して4、5へ。1、2はない

* 知識・技能・意欲と関心の三つの評定を出す

* レポート、作品を作る過程、仕上りが指導のねらいに合っているか、三段階で態度点を加える

五、「評価する、される関係」との

思い込みを捨てよう

5 「評価」の教師自身、自分の教育活動を検討し、次の教育実践を調整するために役だてる働きは、あまり認められていないように思います。それはなぜでしょうか

〈高等学校〉

*教える・教えられるという役割の固定化、教師は評価する立場だ
8 と思っている

*私自身は自己点検を含むと思って評価している

*自己点検を含むと考えられていないとはいえない

*教師自身は自己点検しているが、世間あまり知られていない
2 *生徒に能力差があり、学習に対する意欲に差があると思っ
3 ている（生徒のせいにする）

*評価された結果が、就職・進学の調査書に記入され、教師の目的
3 とは異なる所で重視されているため

*生徒を管理するのみで、自己点検までできていないことが多い
2

*教師には「こんなに一生懸命にしているのに」という意識がある
2 *立止まって考えているゆとりがなく、システムに乗って、ベルト
コンベアに流されているようだから

*文部省・学校の要求する教科内容の統制があり、これに合せなければなら
ないと思っ
て、内容の定着度を図る手段に評価がなっ
ている

*現在は評価が生徒をどのように伸ばし向上させたか、になっ
て、教師の尺度を問われないから

*評価する立場に立つほうが安易、自己点検や自己評価から逃げて
いる

*評価のための評価になっているから

*教師の自信過剰

*評価のしつ放し、評価を安易に考えて本来の目的を忘れている

*どの教科も平均65―75点の間にしろなどと決められている

*教師の側の評価に対する発想の固定化

*本来は自己点検すべきと思うが、教育現場はそういう状況にない

*私はそう考えている。評価が悪いのは生徒がサボったというより
教え方が悪い

*あまり深く考えない

*あまり気にしていたら評価できない

〈中学校〉

*評価する・される関係との思い込み

*その場限りの評価、評価の観点の明確化ができていない

*授業の方法論が画一的、これだけ伸びたという評価の度合いを計
2 りにくい

*形成的評価の考え方が浸透していない

*私たちがしているのは評価でなくて評定、仕方なくやっている

*同和教育・平和教育の観点で教師が生きていない

*大人の勉強はすんだと思っ
ている

*子供に力のつかない原因を他にみつけようとする傾向がある

*家庭科教師は各校1―2名で、教師同士の研修・反省ができにく
い

*教師は自分が評価されるとは考えない

*教師自身の意識の低さ

*「教えたい」と強く思うことのない教師が多い。「教える」こと

も「評価する」ことも考えもせず、ギムだと思つてやっている

* 授業―テスト―評定で長いことやっている、評価も評定も同じように考えていた

* 生徒の声や痛みを感じてゐる心が鈍っている。できれば避けて通りたいという気持ち

* 私は自己点検と考えている

* 実は生徒や周囲から絶えず評価されている

〈小 学 校〉

* 児童・生徒を学習の主体者と認めていないから

* 日々の教育活動の点検を教師としてなかなかしないから

* いつも「評定」のほうを前面に出してしまつたため

* 一斉授業・多人数・時間的に多忙、自己点検する余裕なし

* 創造性を育む余裕を持っていないから

* 教師は日々の教育活動の自己点検をしないと思われているのは間違ひ

六、家庭科の中心的なねらいは、自己評価でしかあり得ない

の回答も

6 家庭科教育で「自分の生活をみつめ、それを高める力量を育てる」ことを目的にした場合、これはどういう方法で「評価」したらよいでしょうか

〈高 等 学 校〉

* プロジェクト・レポート・参考図書の感想文、学校家庭クラブ活動等

* 授業内での変容、レポート、家庭実践、生徒の研究活動を教師が読みとる力をつける

* レポート、でも難しい。読みとるのは神様のよう

* レポートのクラス内発表を、教師と生徒が読んで（聞いて）評価する

* 調査・実習などの課題を出し、それに対する考察を書かせる

* 家庭での実習は親の評価を記入してもらい、参考にする

* 日々の生活の問題点から関心を広げ、調べ考えたことをレポートさせる

* 単元ごとに自分の家庭や身の回りをふりかえるしくみを作る

* 新聞などのスクラップ、感想を書かせることを十年以上やってきた

* 現状の問題点を押え、その改善を考える力をつけるのにレポートは適している。但し、事前のていねいな指導が必要

* とても難しい、どの方法でも一面的。それを生徒は絶対的にとらえるので、私は重みで潰されてしまふ

* 自己評価でしかありえない。生徒に自己を顧みる訓練をしているつもりだが不十分。自己変革のチャンスを多く提供するしかない

* 今の単位数、今の教師の持ち時間では不可能

〈中 学 校〉

* 問題をみつけ、ひとり調べの形でレポート

* 授業前後の比較 (レポート・ノート・アンケート)

3

* 生活体験学習に取組ませたアンケート・レポート

3

* グループ研究や生徒との話し合い、感想文などで評価する

3

* 実践の場を与える。行動をチェックする。レポートで教師が読みとる

2

* 非常に難しいが、どんなことをどんな姿勢で取組んだか

* レポートくらいかと思うが、レポートが書けない生徒は力量がな

いとはいえぬ

2

* 難しい。レポートを書かせてもそれが身についているかどうかを点検するのは本人

* 日常生活態度・考え方を評価する方法を見出さなければいけない

* 社会・家庭の現実が変化、多様化してきて困難

* 本当に生きる力を付けてやりたくても、生徒の側の受入れ態勢ができていない

* よくわからない

2

〈小学校〉

* レポート・ノートにおける調べ学習

* ひとりひとりをみつめ、色々な方法で評価する

* レポート・生活点検表を作り、自己評価させる

* 家庭での実践の様子を家の人に書いていただく

* このことを評価することがおかしい。評価されるべきは教師そのものでしかない

* 小学校では不可能、評価する必要も感じない

七、実生活への活用や生活力は

重要だが「評価」しにくい

7 家庭科教育で重要であるにかかわらず、「評価」しにくい内容
はどんなことでしょうか

〈高等学校〉

* 実生活への活用度

8

* 実習、特に調理実習

8

* 人間関係についての内容、内面的に深まったことの評価は考えにくい

6

* 生徒の家庭環境によって出発点がまちまち。到達点だけ見てもダメ

5

* 家族観・人生観など、価値観の上にあるもの。技術の差として表面化しないもの。教える教師の人間性が問われる

4

* 保育 (母性) とは何か

3

* 家庭経済

2

* 授業参加への態度

2

* グループ活動内の個人評価

2

* 家庭科で評価は必要なのだろうか。わたしはイヤだ。むしろ評価の対象から外したい

2

* 生徒の一人一人が立っている地点が違うので、力がついたかどうかの評価はムリ

* 生きることに於いて、その手段を評価することは難しい

* 日本社会の知育偏重、生活軽視が生徒になげかけられ、切離すことのできない問題がおおすぎる

* 日本社会の女性差別などに関する問題意識

* 到達目標をどこにおくか定めること

* 内容が広く、評価もその人の一生の中でされるべきことだから

* 生徒と一緒に考えた面白い領域はしにくい

* レポートでも文章力のあるなしに左右されがち

* 日常生活についての価値観・審美感

* ……についての考える態度

* 自然科学以外の分野（消費者教育・住居・家族関係・女性と職業・食糧事情・食品公害）

〈中学校〉

* 生活力、生活を改善しようとする態度

* 調理実習の実技・参加度

* 家庭科のすべての分野。全員が作品を仕上げ、全員が参加して調理実習をしても1〜10までの評定をつけねばならず、それが入試の資料となる。心の痛みで数字が記入できぬことがある

* 生活感覚、個性まで教師は理解できぬ

* 考える力、教科書以外の情報を持っているか

* 日々の実践状況

* 保育・家族関係

* 技能面

* 実習における器用さと熱心さできばえとの関係

* 生活にかかわる問題意識

2 2 2 2 2 2 4 5

* 人権・平和・いのちを大切にする心

* 自立する生き方をするための力

* 教科でやるべきことと、家庭や社会で教え、身につけるべきこととの境界がはっきりしないこと

〈小学校〉

* 実践的態度の程度、家庭生活に生かす力

* 共同でする調理実習の技能

* 生活をみつめる力

* 一人一人の態度・関心がちがいきすぎる

* 家庭科教育のすべてが評価しにくい

3 2 4

八、アンケートの回答に、

さらに意見をつけて下さったお二人

◆評価がWe誌上で取上げられているのを読み、私も感じていることがあって、考えているところにアンケートが来ました。評価というのは、本来子供の到達度を見たり、教師の教え方を反省する材料ということですが、進学や就職の時に威力を発揮する現実が本質を大きく変えているとつくづく思います。

高校が大学・会社に対して成績資料を提供しなければならぬ所に、評価を歪めている大きな原因があると思います。それと評価を点数にしなければならぬことにも、常々困難を感じて来ました。

レポートを書かせること、これを点数にする。共同研究も点数にする。点数にならないものを点数にしていくことは、繁雑さをわざわざかかえこむことになります。

またテストにしても2単位の家庭科は、9クラス分を数日のうちに採点しなければならぬために、問題も限定されてしまうということです。期末処理の数は、まさに死にもぐるいで頑張らなければ間に合わないという現実。点数をつけるということが、逆に授業内容を制約してしまうということも考えられます。自由な発想で家庭科の実践をしようと思えば、必ず評価の問題に突当たってしまうと思います。

(加藤千恵子)

◆浅井由利子さんが実践記録で評価のことを書かれているのを読んだ、評価で困っているのは、私だけではなかったのだという思いから、思いついたままを書きたいと思っていました。

私のやりたいと思う家庭科が、今のような評価のやり方になじまないのに、そこを深くつきつめて考えませんでした。

家庭科の教師になった頃から、意識はだいたい変わって来ました。

よく整理できていませんが、次のような段階があると思います。

- 1 料理・裁縫の実技教科……他に比べ低く見られがち
- 2 生活を科学的にとらえる(知識偏重)、他教科と同じに重要
- 3 自分の生活をみつめ、自分の生き方を捜す。答えは一つではない。知識偏重の他教科を越えたもの。ペーパーテストになじまない。

私は1から2を求めて、家庭科の教師になったように思います。そして今、意識は2から3へ移っているのに、私自身の評価は、ま

だ2のままで、評価がうまくできなくて、悪戦苦闘している状況です。

具体的に言いますと、他教科並みに学期2回のペーパーテストをして、その内容も知識の量で試すものにしたくないと思ったら、なかなか問題が作られなくて……採点しても楽しいのは、生徒が自由に書いたところ(授業に対する感想・意見など何を書いてよい)を読んでいる時です。

家庭一般十クラスとなると、レポート式に自由に書かせたものは、なかなか読みきれません。校内では、問題作りの遅い人……評価を出すのも遅い人……仕事がトロイ人で名前が通っていました。だから2から3へ抜け出せなくて、「先生、これ試験に出るの?」といった評価のための授業にしたいと思いつながら、ペーパーテストあり、レポートあり、ノート提出ありと生徒も教師も一番しんどい教科になっています。

(西本和代)

特集

家庭科—

何を評価するのか

私がしてきた

家庭科の評価

—飯野こう—



はじめに

We 編集部が行った評価についてのアンケートには、締切までに間に合わず残念でした。わたしは三十余年の長い間、家庭科教師としての毎日の評価と、学期ごとに子どもたちに渡さねばならぬ通信箋なるものとの矛盾を、いかに子どもたちに納得させればいいかに悩みつづけてきました。

We 編集部では、このアンケートで「評定」を、学年・あるいは学期ごとの生徒の学習活動の結果を総括的に示したものの、「評価」は教師の教育活動・生徒の学習活動を検討し、次の教育実践を調整するために役立てるもの、と定義されました。「評定」という表現に根元的にはストンと納得したわけではありませんが、この二つに定義されたことによって、いまさらながら長年のもやもやが一応切り切れたような思い

がいたします。

一、わたしの「評価」

わたしの「評価」は、アンケートの設問5にあるように、教師自身、自分の教育活動を検討し、次の教育実践を調整するために役立てる、ということと、加えて評価することによって「子ども自身の学習意欲を高める」というのがねらいでした。わたしは、かつて「赤丸先生」と呼ばれました。毎日の学習で子どもたちのノートにつけた赤丸をクラスの人数とクラス数とそしてわたしが赤丸をつけ通した歳月とをかけ合わせて、ひとつひとつの赤丸の線を引き伸ばしつなげてみたら、地球ひとまわりとまではいかないでしょうが、まあ日本の端から端まで届くかも知れません（これは少しくオーバーですが）。在職中のある時、六年生の女の子が、かたわらの

友人を指さして、「この子、飯野先生みたいになりたいんだって、それで毎日赤丸の練習をしているのよ」と言ったことが、いまでも印象に残っています。

日常の授業の評価は、ノートの赤丸はもちろんですが、作品についても完成すれば、その作品のでき栄えの如何にかかわらず、教師の評価はみな同じでした。作品はでき上がった順に家庭室の壁面に飾りました。また作品が子どもたちの身につけられるものは、三々四人ずつ一緒に、それを着用した子どもたちの写真を撮りました。写真にすると、作品を子どもたちに返したあとも、この写真を展示することによって、長く自分たちの作品を觀賞することができると、教師にとっても次年度の貴重な教育資料となりました。

展示された作品の教師の評価はみな同じでも、子どもたちは展示された作品をあらためて見ながら、「ああ俺のは少し雑だったなあ」と思ったり、「おお、かっこいいじゃないか」などと仲間に言われて、内心まんざらでもない気持ちでニヤニヤしたりしていました。わたしは、教師は評価する立場、子どもたちはされる立場という一般の思い込みをなくしたいと思っていました。大切なことは、他人の評価を全然無視するわけではありませんが、ともかく作品ひとつを取りあげてもそうですが、よろず自分自身の行動や、態度、人間や自然への思いやりなど、それなりに自分で評価できる自立した子

どもたちにしたかったのです。

二、課題の出し方と評価の方法

わたしは、新しい題材に入る前にはもちろんですが、毎週の家理科の時間の授業の前後には、必ずその題材にかかわる課題を出しました。それは具体的に誰にでもでき、そして各自の家庭生活がかかっている痛いところにふれて、子どもが傷つくことのないような十分な配慮のもとに出したつもりです。都内の学校で近頃知った話ですが、物が豊かになったと言われるのに、家庭の食事調べの課題を出すと、欠席する子が目立ってきたということです。戦後の乏しい食糧不足の時代とは、また異なつた家庭の暮らし方の貧しさを反映しているのでしょうか。教師の何気ないひと言に子どもは傷ついたり、また、ちよつとした励ましの言葉が子どもたちを勇気づけたりするものです。教師は教師だからという高い立場からの発言・行動には慎重に、そしていつも子どもたちの立場を忘れないで欲しいと痛感することしきりです。

ところで、在職中のわたしの場合は、常にそのことを考慮しながら毎時間の課題を出し続けました。

それは、例えば住まいの学習で照明を次週の学習内容に予定した場合、画用紙を十六枚切りとしたほんの小さい紙を各自に一枚ずつ渡し、次週の家庭科の時間には、「家庭の中の照明器具の中で、自分が一番気に入ったものひとつと、なぜ

それが好きかという理由を書いてくること」というものです。これは、画用紙がほんの4×5 cm角の小さいものであるということと、ひとつというものが、教師の配慮した面です。

アパート住まいで、たったひとつしかない照明でも、それが好きだと言えればいいし、小さい画用紙では絵の上手・下手もあまり関係なく気軽に描けるものです。

外国人が兎小屋と言った日本の住居ですが、戦後のようにたったひとつの照明という場合は、まあ今日では考えられませんが、ともかく照明器具を描くという課題によって、少なくとも、我が家の照明に限らず、日頃は何気なく見すごしていた他家や街の照明にも目を向けることになります。少なくとも次週の家庭科の学習までには、照明についての問題意識は深淺の差こそあれ、子ども各自の意識の中に持続しているはずです。そこでまず学習のはじめに、それぞれ持ち寄った照明器具の絵を黒板に軽く貼ります。子どもたちは貼られた照明器具の多様さに驚きます。また同時に教師は、それによって子どもたちの住環境を多少なりとも知ることができます。

次に教師は黒板に貼られた照明器具の数々を見て気がついたことや、課題であった器具について、気がついたこと、感想などの発表を求めます。必ずしも全員が挙手することはありませんので、挙手した子に発表してもらいますが、内容の重複をさけて、発表する子どもたちに協力してもらいます。

そこでいくつかの内容が発表されたわけですが、その時教師は全員を起立させ、まず「いま発表した人は席に着きなさい」と言い、次には「今日の課題の絵を描くこと、好きな理由についてもやってきた人は座りなさい」といい、さらに次は「絵だけ描いてきた人、理由だけしか書けなかった人、すなわち課題が半分だった人は座りなさい」と言います。ここまでは来ると大部分は席につきますが、まだ三、四人立っている子がいます。

そこでわたしは、その子どもに、「いま気がついたことを発表した人の誰のでもよいから、あなたの言葉で、もう一度同じ内容をひとつ繰返してみて」と立っている子、一人ひとりに発表させます。ひとりが発表するたびに、「いまの発表は言葉がはつきりして、よくわかったよ」とか、「内容を自分の言葉でよくまとめられたよ」とか、「発表の中で適切な熟語が使われたよ」と言ってほめて座らせます。また、「いまの発表の姿勢は机に寄りかかったりしないで、姿勢がピンとしていてよかった」などと一言ずつ評価しながら全員を着席させます。そして、おもむろに「いま発表された気がついたことを三つ以上（あるいは内容は四、五になる）、各自の表現でノートに書くこと、書けたらノートを先生に見せに来ること」と言います。この場合、グループ、あるいは友達同士ででき合ってもよいのです。なにしろ繰返し発表さ

れてきたことです。表現は同じでなくても大部分の子は書けます。この時、クラスでちえおくれの子などがある場合は、グループや友人が手助けをしてやります。

毎時間のこんな方法がわかってくると、子どもたちは発表する子の言葉にきき耳をたて、もっと大きい声とか、自分はどうまとめるかと苦心します。赤丸をもらいに来るのが早くなってきました。わたしは赤丸をつけると同時に、今日の課題についても赤丸をつけてしまいます。鉄は熱いうちに打てといいますが、評価もまたできるだけ敏速に、そしてできればその子の見ている前でしたいものです。

ある先生から、赤丸をつける授業時間をもつたいないと言われましたが、教師が話して教えたつもりでも、子どもがよくわかって聞いてくれない時間のほうが、無駄な時間だと思えます。教師が子どもに向かって、「わかった？ わかったでしょう」と念を押す場合は、案外子どもたちはもちろん、教師自身にも学習の本質がわかっていないのではないかと、授業を見させていただいた折など考えさせられるのです。

三、「評定」は誰のためにするのか

わたしは、Weの「評定」と「評価」との定義づけによって、教師生活積年のもやもやとした思いが割り切れたと申しました。しかし、「評定」なるものはなぜ子どもたちに必要なのかという根元的な思いは、今日に至るまで疑問です。「人の

一生は棺を蓋いて事定まる」(晋書劉毅伝)? とか。こんな古い言葉がうろおぼえに心に浮かんできます。小学生、中学生、高校生、それぞれの美しき種の芽生えも定かならぬ子ども・生徒たちに、なぜ5、4、3……とか、優良可などの評定が、他人によってなされなければならないのでしょうか、しかもクラスの中であらかじめ割合をきめて……。

わたしは在職中いつもこの成績一覧表なるものを期末に提出しなければならぬことが苦痛でした。「家庭科は1をつけない。5の割合が多すぎる」などの苦情が、担任や教務から寄せられ、いつも職員会で論争したものです。

誰のために、なんのために、今日の学校教育に「評定」が必要なのでしょう。エリートコースを目ざして、小学生いや幼稚園時代から、子どもたちは入試に備えて勉強し、成績優秀と折紙をつけられた子が、中・高・大のどこかで突然学業放棄をしたり、生活がゆがんできたり、はては精神科を訪れる結果になってしまった例を数多く知っています。今回の学習指導要領の改訂や、入試制度の改革などが、果たして子どもたちに楽しい学校教育を保証するのでしょうか。わたしは日本が、再びいつか来た道に立ちもどらぬことを切に願っています。

(いいの こう・東京総合教育センター教育相談員)

特集

家庭科—

何を評価するのか

評価

私の試行錯誤の一断面

柴崎和恵



一、学習の評価と単位取得の認定について

私が勤務している「自由の森学園」では、評価などについて次のような考え方をしています。

(1) 評価について

評価は、一定の計画・予測にもとづく授業・学習に対して、その結果を考察し、つぎの教育活動を改善したり、ひとりひとりが自ら学んだことを確認するために大切なものです。したがって、点数による序列化につながる評点は行わないけれども、正しい意味の評価は充分に行います。

評価の方法は、教科のレポート・テスト・学習のノート・表現の成果やそれぞれの作品、授業の内容の受けとめ方をあらわす感想文など、原則として作品主義をとり、その評価を文章で記述します。

(2) 単位の取得・進級・卒業について

「単位の取得」

単位の取得には本校の教育課程に定められている科目の授業に出席して、深く学ぶことが必要です。

そこで、一定の知識や技術を習得したり、自己の世界を広めたり、深めたり、新しい視野を開いたりして、その科目の学習目標にふさわしい成果が得られたことを認定されることによって、単位の取得ができます。

「進級・卒業」

自由の森学園高校を卒業するには、三年間に八十単位以上の単位を取得することが必要です。そのほか、本校では、原則として年間を通して授業日数の2/3以上出席することが、進級や卒業のためには必要な条件です。

卒業は、単位の取得のほか、各種の行事・体験学習・ホームルームやクラブの活動などの成果も考慮して、校長が認定します。

(生徒用冊子『自由の森学園の生活』より)

いま、私は高等学校二年生六クラスの人間生活科の授業を担当しています。男女共学・必修で、週二時間です。

二、生徒たちに渡した「評価表」

「評価表」というのは、『学習の記録』というのが正式名称で、私の勤務する学園で各学期末に生徒に渡します。

形式や内容は教科担当者にまかされています。教科担当者が個々の生徒について作成し、学級担任が各教科のものを綴って生徒に渡すのです。

私は昨年度、〈資料〉のような形式と内容で作成しました。

三、生徒たちに自己評価と感想を求める

学年末の最後には、まとめの授業を行います。その終りの時間をもって、生徒たち自身の自己評価と授業に対する感想などを書いてもらいます。これは、次のようなねらいにあります。

- (一) 一年間の授業をとおして、生徒たちがどのように学んだり考えたりしてきたのか、二五〇人余も担当していると通常の生活のなかで語りあい尋ねることができない。
- (二) 生徒たちが、自分が一年間の授業で学んだ内容を、ふり返り、整理できるように。
- (三) 私自身が、自分の授業をふり返り、生徒たちがどのように

〈資料〉

高等学校二年

人間生活科 前期の学習の記録

クラス

なまえ

さん

担当 柴崎 和恵

前期にやった授業の内容

- 第一章「生と愛と性」を学びあおう
- 序 生命の尊厳
- 第一節 「性」ってなんだろう？
- 第二節 「愛と性」を考えてみよう
- 第三節 結婚・離婚・家族を考える
(いずれも内容略)

後期のことの連絡 (内容略)

課題

課題の評価の記号の意味

- A きちんととりくまれている、内容も立派で、好感がもてました。
- B 資料や文献を読む・調べる・検討する・考える・ということをもつとすといと思えました。
- C きちんと取組んでほしいと思えました。
- D きちんと取組んでほしいと思えました。

- 一、「愛と性」……絵本を読んでレポートしよう
- 二、夏休みの学習課題(レポート作成)
- 三、レポート「アジアからの花嫁」問題
- 四、レポート 夫婦別姓について
- 五、第一章の復習とまとめのための課題
- 六、学習ノート(いずれも、内容略、どの項にも「評価()」と「提出していません」の欄を設ける)

出欠

あなたの出席回数

回

授業時数

一組25回・二組25回・三組25回・四組23回・五組24回・六組27回

受けとめたのかを知り、次の授業の参考にする。

④生徒が授業で学習したことをどのようにつかんだかを知るために。

(6)単位認定の資料として。単位認定を認められない生徒たちのうち、もう少しで取得基準に達するとか、事情がある生徒には、単位取得保留として特別課題に取組ませる。

この生徒たちの声の中から、幾つかを抜粋し、私の感想や意見をプリントして評価表に添え、生徒たちへのメッセージとしています。

四、単位取得の認定と生徒たちへのメッセージ

単位取得の基準を私は次のようにしています。

(一)授業への出席が三分の二以上であること

(二)単元ごとに課した課題の提出が二分の一以上であること

(三)授業中の取組み、課題の取組みの様子

生徒たちに渡す『学習の記録』に個別のメッセージを全員に添えたいが、多人数で不可能なので、私が必要と考えたり、書きたいと思う生徒や、単位取得を保留する生徒に添えています。

五、学籍簿の記入

私の勤務する学園では、学期末・学年末に渡す「学習の記

高等学校二年

人間生活科 後期の学習の記録

クラス なまえ

さん

担当 柴崎 和恵

後期にやった授業の内容

第二章「男性」と「女性」を学ぼう

第一節「神の汚れた手」(曾野 綾子 原作・ドラゴをみて考える

第一節 男女の性心理を考える

第三章 生命の誕生を考える

第一節 男女の生理と妊娠のしくみを学ぶ

第二節 避妊を学ぶ

第三節 人工妊娠中絶を考える

私が授業をうけもった上での感想と意見(略)

課題

(前期と同様なので省略)

出欠

あなたの後期の出席回数

回

授業時数

一組24回・二組23回・三組23回・四組23回・五組26回・六組23回
年間を通して三分の二以上の出席(している・していない)

単位の取得

人間生活科(保健科)二単位

可

不可

不可の理由

出席時数不足
課題取組み不十分
授業に取組んでいなかった

いずれか

録」には段階評価はありません。しかし、学籍簿には五段階評価(相対評価ではなく)で記入します。それは各教科担当者にまかされており、私は次のようにしています。

単位を認定できる生徒の、標準を3とする。

授業や課題への取組みを特にしっかりとっていた生徒、一年間で充実した変化をした生徒を5とする。

出席時数不足、課題取組み不十分、授業に取組んでいない生徒は1で単位取得不可。出席時数は三分の二以上あるが、課題提出が半分に満たず、あるいは非常に不十分な内容で、授業中ほとんど授業に取組んでいなかった生徒は2とする。

なお、学簿は、生徒から要望があれば見せることにしています。私は、生徒が自分の五段階評価について、疑問があると言え、私の評価の主旨を説明し話し合いますし、生徒の主張に納得すれば、訂正することになっています。

私は公立学校に通学する子どもの母親として、評価について考えているときには、オール3とかオール4という評価のつけかたに共感していましたし、それが必要だと考えていました。しかし、いま、私は前述したような評価をし、五段階評価もしています。それは次のように考えるからです。

(イ) 学校の授業をおして私ができる評価は、生徒の学習を評価することであって、生徒の人格や人間までは評価できない。

(ロ) 生徒自身、授業の内容とそこで自分が学んだことを客観的にふり返ることができるものを。

(ニ) 授業担当者である私が、個々の生徒に、その生徒の学びへの取組みをどのようにとらえているかを伝えることは必要。

(ハ) 授業への出席が大切であり、生徒たちに伝えている学習の内容が重要であり、また授業中の学習への取組みの姿勢が重要であると考えている。

(ヘ) 生徒ひとりひとり異なる学習表現の事実をあらわすことが必要である。

評価をどのようにとらえるか、それがどのような意味をもつか、ということは、学校がどのような教育をしているのか、学校が存在する社会がどのような社会であるのか、ということも深く関連していると思います。

が、評価にあたって重要なことは、評価をする側である教員が、ほんとうの意味で生徒と一人の人間として同じ場にいる、生徒の人格を尊重し、生徒の基本的人権を尊重している、ということではないでしょうか。そのことを基盤にしていない評価は許されないことだと思うのです。

(しばさき かずえ・自由の森学園中学・高等学校)

特集

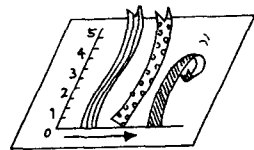
家庭科—

何を評価するのか

家庭科の評価について

大学の側から

—吉原崇恵—



まず大学における経験を通して評価をめぐる問題を考えていきたい。

一、演習における教育目標と評価

卒業認定の根拠には履修主義と習得主義とある。履修主義はある一定の年限教育課程を履修させるが、その教育目標は身につけることが望ましいものとして位置づけられ、到達すべきものとはされていない。習得主義の教育目標は、一定の知識や技能があることによって認定されるものである。

大学では習得主義を原則にしているが、教授される以上のものを自ら見いだしていく態度や能力も要求される。それらの評価について、演習の場合を例に考えたい。

演習にはいくつかの形があるが、ここではexerciseとして

教材研究の具体例を学び、内容の理解、応用、総合理解をめざす場合を挙げる。指導の途中で一年間を通して何度かレポートや作品を提出してもらおう。その豊富な評価資料で、学生の進歩や、発達を診ることができる。

そして最後に到達した学力を、どのように表現させればよいか。こちらの状況設定の問題がある。

一九八八年度は、教材を授業で展開するときに使う教具を製作する課題にした。

ある学生は、「ダイエット食を見直そう」という教材をつくり、献立ゲームの教具をつくった。食物を描いたカードに、シールがはってある。それは色別と数によって食品群とその摂取量を示している。また、紙粘土でつくったおもりが接着してある。それは、カロリーを示している。カードの組

み合わせゲームによって、カロリー摂取量と栄養バランスを満たすための学習に用いる教具である。

その開発された教具は、知識、理解、応用力、意欲によるものであることを示している。

ところで学生の自主性は無限の可能性がある。だから自主性の多少によって成果が異なってくる。この自主性を評価の対象にしているものだろうか。指導カリキュラムとの整合性がないところでは、指導不足を補い乗り越える学生もいるし、そうではない場合もあるのであって、指導と評価を一連のものとして考えるのかどうかという問題がある。

だから「……に対する意欲」などの客観的な知識体系ではないものを評価の対象にする場合には、基準が明確ではなく、ややもすると集団内での相対評価に傾きがちだと思われる。評価の対象・基準・主体・状況・評価の表現など総合的に検討したいものである。

二、卒業研究の評価の場合

ここでも、一と同じ悩みがある。①なにを基準に②なにについて③だが、いつ、どんな状況で評価するのかいろいろを試みをした。

①絶対評価と相対評価の両面から

②おもに問題意識と先行研究についての学習量とその反映と

しての独自性、計画性、実行力、論理性、表現力について

③卒業論文の縦覧と研究発表の場において

④教官スタッフ全員（二〇人）が責任を持って査読し観察する。その間、副査による査読がある。これらの期間を経て最終的な段階で主査の長期間にわたる観察結果の説明をもとに、副査とスタッフ全員で各々の指導学生に対する評価を合評する。

以上の過程はエネルギーと時間を費やしているが、多角的・総合的・公平に評価できるものと納得している。そして評価の内容は、実は指導に対する評価も含まれているのであって、次の指導に生かして行くことを自らに誓うこともある。

三、指導研究機能としての評価

児童生徒の発達を助けるための学習の動機づけや、指導法の有効性を比較研究するために、学習者の到達点を分析の対象にすることがある。

例えば、小学校の「炊飯」の単元で到達点をみるために児童に自由感想文を書いてもらった。これは、「授業についてなんでもいいから書いてください」と指示したものである。ここでは「おもしろかったことについて書きなさい」などと具体的な誘導的な指示をしないことと、全員分の資料を分析することが重要である。

そして、クラスの全員分の感想文を分析するといくつかの事項に整理された。

児童はなんら誘導されることなく、最も印象に残ったことを述べているのであるが、クラスの学習状況や傾向ばかりではなく、教材構成、指導計画、授業形態、指導法などを点検する材料を与えているのである。

このように評価は指導的機能を持つことが明らかである。

また高校においてコンピュータを使った授業(CAI)の効果を考えるために従来の授業との比較を行った。

効果の有無を判定する資料をいくつか収集した。そのなかのひとつにPREーテスト、POSTーテストの比較がある。その前提を ①成績の正規分布をするようなクラスとテストが望ましい ②平均値の差、偏差値の差、PREーテストのレベル別に変化を診る ③テスト問題は、知識理解、分析応用力を診るものとして工夫して作成する、ということにして、テストの結果を統計的手法をもって比較検討する。

しかし、成績が正規分布をすると考えることは、学業の成績を偶然的確率事象と同次元で考えることになり、問題が残る。学力に及ぼす要因は相互に独立要因とは限らず、そこが偶然的確率事象とは異なっているからである。

そこで学習者のおかれている教育環境や背景を知る資料、授業観察者の評価、VTRによる指導学習のカテゴリー分析

などがあつてはじめて、有効な指導法を考察できると思われる。

このように、学習者の到達点から指導法の研究へとアプローチする研究的機能としての評価にも、できるだけ総合的な資料が必要だといふことができよう。

四、あらためて評価を考える視点

①いいかげんな指導とおざなりな評価に陥らぬようにするためには、具体性のある目標と教育内容を設定する必要がある。

そして全ての学習者を教師の指導目標に到達させるためには、ひとりひとりの学習のつまずきを見出し、つぎにその学習者の目標とすべき学習課題はなにかについて理解を助けるような評価が必要であらう。

すなわち学習者に自己の進歩状況を知らせる機能が求められる。そして本人に「やれる」という確信を与えることができるような評価が望まれる。そのためには、本人の「発達の最近接領域」をみきわめ、潜在能力をひきだし、自己理解を助ける評価を目指したい。

これらのことは評価と指導は一連のものであることを意味している。だから、評価は指導計画や指導法の反省資料としても活用できるはずである。

② 席次や正規分布曲線を基礎にしたレベルわけ、偏差値などで示される評価では、次の教育的働きかけのめやすを得ることができない。

教師としては正規分布曲線をくずすことが理想であろう。

そして選抜のための評価ではなく、学力の診断として利用できるようなテストの工夫が様々になされる必要がある。

③ 「……に対する意欲を育てる」という方向目標はつねに無限に広がる可能性を持っている。このような客観的な知識や技能ではなく、基準にできないものを評価するとき、相対評価が出てくる。

中内敏夫は、子どもの「態度」とか「学習態度の評価」ということのオリジナルな意味を「子どもの感動や思考や行動のスタイルが好ましくないものであったとき、原因を子どもの人格や道徳心に求めるのではなく、教師が今までに教えてきた概念（知識）の質が悪いものであったのであり、学級、学校経営のルールがまずかったという方向に認識を開くことにある」と解説している。

そして「……しましょう」という学習態度の指導の前提に、知識の正確な伝達と子どもの情緒的、知的な持続的体制を問題にすることをあげている。

ところで、周知のとおり京都府教育委員会はブルームの「教育目標の分類学」にとりくみ、到達度評価の研究提案を

している。その中で「生活を発展させ、創造させる力」を学力の要素としている。創造性とか態度とかいわれている能力や心情を、できるかぎり到達目標として工夫する努力がもつともっと必要であり、そこに向けて家庭科教師の今までの努力を生かしていくことを期待したい。

参考文献

『増補学力と評価の理論』中内敏夫 国土社 一九七七・八
『看護教育評価の実際 第3版』鈴木敦省 小林清子

『教育評価』梶田毅一 医学書院 一九七九・八
『子どものための教育評価』村越邦男 有斐閣双書 一九八三・八

（よしはら たかえ・静岡大学教育学部）

青木書店 一九八一・六

（よしはら たかえ・静岡大学教育学部）

◆編集室からあなたに◆

八・九月号は、二・三月号「上すべりの国際化」を一步進めて「地球市民として生きる」をテーマにします。あなたのご発言をお待ちしています。

字数二〇〇〇字以内、×切りは六月五日です。

特集

家庭科—

何を評価するのか

スウェーデンの成績表

—ピヤネール・多美子—



娘がぶんぶん言いながら、学校から帰ってきた。「家庭科は大好きだからいっしょうけんめいやってきたのに、2なんかつけてー。先生に言おうっと」すごい見幕で言った。

スウェーデンの基礎学校（日本の小中学校にあたり、義務教育九年）では、八年生になって初めて成績表が出る。しかし、高校進学への指針となるのは九年生に出る成績表である。七年生までは、成績表は出ないが、学期末に担任と「十五分面接」があり、親子で成績状況を聞くだけにとどまる。

娘の成績表を見ると、ただ点数だけを書いてある簡単なもので、絵（図画）4、英語5、家庭知識2、日本語3、体育3、数学3、生物3、物理3、化学2、地理2、歴史2、宗教2、社会2、工作3、スウェーデン語3、視覚コミュニケーション（写真など）4となっており、公表するのははばかれるほど悪い。だが本人はこの成績表を見て満足している。

勉強もしないし、一年半前に日本から移住してきて、スウェーデン語のハンデイがあるから、点数は1が多いに決まっていると思っていたのだ。わたしは「こんな点で希望の高校は望めない」と言いたいのをぐっと我慢して、九年生でがんばりなさいと言った。他の教科はできなくても当たり前と思っただが、家庭科だけはわたしも納得がいかない。というのも七年生の時の家庭科は洋裁ばかりであったが、八年生では、一週間に一回三時間ぶつとおしで料理をしてきた。「今はリンゴの季節だから、アップルパイの作り方をならって来た」「パンは牛乳をいれて焼くと固くならないだって」と学校で作ったのをすぐ家で作ってくれる。そしてめきめき料理の腕はあがっていった。わたしが留守の時はアルバイト料はとるが、料理当番で買いた物から料理まで引き受けてくれる。本を見てかなり手のこんだ料理も作ってくれるようになって

た。「この頃の学校は問題があるけれど、家庭科だけはいいいね」と姑も目を細める。それなのに2。娘は「生徒を見る目がないのよ。わたしが先生にどうして悪い点?」と聞いたら、あなた授業中におしゃべりしていたじゃないなんて言うんだもの」

娘は絵を描くことが好きなので、高校は美術コースを望んでいる。しかし競争率は高い。それで成績の内容について、担任が面談をしてくれた時に、夫とわたしは娘の進学の可能性について聞いてみた。すると「ティティは外国の学校に行っていたということが進学のメリットになるし、絵も上手だから、希望の高校には入れるでしょう」とのことだった。成績が悪くてもこのコースは作品を提出し、入れることもあると教育庁でも言っていた。娘の進学には必ずしも成績だけが左右しないことがこれでわかった。娘は大喜びであった。とはいっても娘はもう学校はあきたから、高校はいかないで、働くなどと言いだすことがある。わたしは進学してもらいたいが、夫はその時は彼女のことを尊重しようと言っている。外に出て働くことは育つことだとも言う。

マイライフ イズ ア ドッグという映画が日本でも上映されたが、作者のR・Y・ソンソン氏にインタヴューしたことがある。彼は学校へほとんど行かないうちに船乗りになった。そして今、作家であり、映画監督であり、大学で教

え、教授より博學だという。どうしてでしょうと聞くと、本を読んで独学し、人生の体験を積んだからと言った。彼の息子も学校がいやでやめ、今二十歳をずっと越してから、勉強をし始めていると言う。勉強は自分がしたいと思った時ののが、身につくことなのだ。その点スウェーデンは教育を生涯教育とみているから、後で学校にもどって勉強することは容易である。でも高校ぐらい出ていないときちんとした仕事にもつけないことも現実である。

スウェーデンの高校は消費者、看護、被服制作、自動車工業、自然科学などの色々なコースに分かれており、大学進学を目指すコースももちろんあるが、技術を身につけ、即職場につける実質教育を重視している。ただ、例えば美容師になるのに、美容コースは生徒の人気の高いため、成績がトップでないと入れないなどの矛盾も多くある。ちなみに、高校進学には前に説明した成績表だけで、教師の評価などはつかない。だから良い点数が必要だ。そのために親が各教科の教師に会って、子どもの成績状況を聞く機会がある。

成績表に関しては、長年、全廃すべきだ、いやもっと小さい頃から出すべきだと両意見が平行しており、昨年の選挙で、保守党は「子どもたちに成績表を」と選挙スローガンをあげていた。わたしは成績表を出す出さないより、学校や教師の質の改善が優先されるべきだと思う。

(絵本作家)

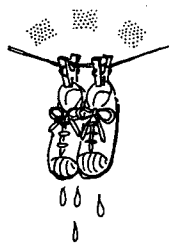
特 集

家庭科—

何を評価するのか

カナダの通知簿

— 井 田 裕 子 —



カナダに住んで二年目、小三の息子タカシがもらった通知簿には記号も数字もなく、わら半紙半分くらいの紙に、息子の様子がびっしり。『手紙』のような温かみがあった。

「口数は少ないけど、とてもいい子です」

「この一年間タカシを教えていて楽しかった」

上の子と合わせて何人かの先生のお世話になったが、「お宅のお子さんには、こんないい所もあります」という肯定的な姿勢は変わらなかった。息子のスペリングの習得が皆よりだいぶ遅れがちだった時も、「今スペリングをがんばっているところですよ」と書いてあり、私はカナダ人親子が囲む夕食のテーブルの楽しさを思い浮かべた。

初めは単にカナダ人の先生は誉め上手なのだろうと考えていたが、次第に、学校やカナダ人社会の子供を見る視点が、

我々とは違って、より柔軟で多様であると思うようになってきた。「勉強ができること」も子供の長所の一つに過ぎないのである。カナダ人の親は子供を誉められると、「とんでもない」とは絶対に言わず、一緒になって堂々と誉める。一つには、我が子を所有物や分身でなく、一人の個人として考えるからであるが、カナダ人は我々に比べて、根本的なところで、自分の子供に自信を持っているような気がした。

カナダの小学校では高学年になるまで、勉強そのものがゆったりとしたペースで行われる。先生方もカリキュラムに縛られることが少なく、一つのテーマに取り組ませて、その日が終わってしまうことも度々である。借り物でない自分自身の考えを持つということが、教育の重要な目的である。低学年には「ブックレポート」という時間があり、図書館で自分

で本を一冊選び、その本について発表させる。三年生の時、通知簿に「今学期タカシは社会科の時間に進んで模擬選挙演説に名乗り出て、『自治体の大きさ』についていくつかの良論を提示した。私はとてもうれしい」とあり、カナダの小学校の教室で行われている授業に大いに好奇心を持った。

アメリカなどでも同じだが、高学年になると簡単なレポートの書き方、資料の集め方をきちんと学ぶ。本を丸写しした箇所は赤で厳しくチェックされて返ってくる。カナダでは四年生の通知簿から絶対評価「ABCCDE」が始まるが、本人の努力を示すもう一つの評価「GSN」との二本立てで表される。先生からのコメントにも、「今学期はここが進歩しました」という記述が多く、子供の成長や努力に目が注がれていると感ずることが多かった。

息子の小学校で、一年生の子が進級できず、もう一度一年生をやることになった。よくある事で、落第した子は親子ともに案外カラッとしていて、途中で追いつき元のクラスにもどって行く。飛び級をしたり、算数の時間だけ上の学年のクラスに通う子もいる。通知簿の温かさと矛盾する薄情な制度のように見えるが、周囲も、落第した子に偏見を持たず、飛び級の子には気持ちのよい拍手を送り、不思議と陰湿な感じがしない。

ハイスクールの授業は、日本の中・高校に比べて、自由選

択科目の占める割合が多い。ある学校の中二の歴史の授業は一年間で三テーマ「ロシア革命史」「ラテンアメリカ史」「中国革命史」に絞って深い学習が行われていた。

ハイスクールでも引き続き絶対評価である。Aは「86%以上の到達度」、Bは「73%以上」、Cは「67%以上」……という一応の州の基準があり、日本のように相対評価を用いる先生もあるが、「子供たちの成績が山型の勾配に分布すると考えるのは不自然だ」と言う先生が多い。評価の内訳は先生により様々だが、学年が進むに従って、やはりペーパーテストの点が重視される。州立大学へは入試がない。ハイスクールの最終二年になると、志望する学部に関連したコースの選択が始まる。成績が良くないと希望の学部に進めない。通知簿をもらった後で、疑問があれば、親は先生に面談を申し込み、納得のいくまで内訳や説明を聞く。「子供を人質に取られている」感覚が全くないらしく、親は堂々と意見を述べる。

カナダ人は、子供の教育はむしろ母親より父親の役割だと考える人が多く、大学進学に際して、成績だけでなく生徒会活動、クラブ活動が十分に考慮されるが、その他に、授業の中あるいは夏休み中に学生がごく普通に行うボランティア活動なども重視される。カナダは確かに日本に比べると大学進学率も教育水準も低い。だが、そこで行われていることは、教育の理想のずっと近くにあるような気がする。

発

言

家庭科って評価できるのでしょいか

佐尾 和子



今年も神奈川県では、高校入試の一環として中学二年生のアチーブメント・テストが行われたが、その技術・家庭の問題をみて、考えさせられてしまった。女子は、被服と食物の領域から、男子は木工、金属加工、機械、電気の中から二領域選択である。男子・女子の性別役割分業に基づく分野分けへの疑問は、当然大問題としてあるのだが、設問については、例えば「スカートのファスナーをつける場合、その手順として図のように左後スカートの縫代をA cm 出しております。

その寸法として最も適するものは？

- ① 0.3 ② 0.6 ③ 0.8 ④ 1.0

「あるいは「一日の献立表があって、表二の「食品群別摂取量のめやす」からみて、表一の夕食の焼き魚に使うブリの切身は、どの位の量が必要ですか。① 50 ② 80 ③ 100 ④ 120 g」といったものなど、男子の設問も含め、細かな問題が多く、日常生活から遊離しているように思えてならなかった。ファスナーの縫代が○・八センチでも一センチでも、また

ブリの重さが正確に割り出されなくても、生きる上ではあまり重要なこととは思われない。それよりも今、そのブリが汚染されているのか安全なのか、その方が問題となる時代に生きていると思うってしまうのだが。そして更におかしなことは、こうした質問のたった一題が解けなかったがために、人生が変わってしまうということもあり得るという事実である。

私がかつて学んだ家庭科をふり返ってみた時、手先のことが好きだったから、布を使つての授業は、刺繍をした袋物、ブラウス、スカート、しぼりにローケツ染めなど作品が出来上っていく喜びと共に思い起こされるが、食品のカロリー計算、大さじ何杯、カップ何ccなどという数字が並ぶお料理の時間は、実は苦痛であり、ましてやテストのために覚えるなんて……。そして大人になった時、家庭科で学んだことが全く無関係とまではいえないが、およそその時の評価とは何の関係もなく、ほとんどのことが、経験により会得したことで

成り立っていることを発見するのである。

学ぶことが本来、生きる力を育むことと考えれば、他の教科にも言えることだろうが、家庭科は、まさに「生活」に根ざした人間を丸ごとかかえた教科であり、生きるという視点を貫けば、まわりのあらゆる事物と関わらなければならぬという点で、自然科学的でも、社会科学でもあると思う。

高三になる娘がファーストフードのお店でアルバイトをしている。子ども達の好む牛肉100%のハンバーグは、実はブラジル産の陽の当たらぬ場所でのみ育て(生産?)られた牛の肉を使っており、いつも素早くお客のニーズに応えられるように作りおきをしておくハンバーグやフライドポテトは、一定時間(十分位)を過ぎると、味覚がおちるとのことで、廃棄処分になるという。食べ物を残してはいけないと言われて育った娘には、どうにも許せないこととして映る。

春休みに有機農業をやっている農村のキャンプからもどってきた娘は、翌日、二つの食文化の狭間に悩みつっアルバイトに出かけて行った。娘はこのアルバイトを通じて、明らかに現代の矛盾に満ちた産業構造の中に組み込まれ、その矛盾に加担している自分を見ているのだが、だからといって私は彼女にそこで働くことをやめたら? とは言わない。この労働を通じ、働くこと、生きることに伴う矛盾を自分の身にひき受け、その上で何をなすべきかを、自分なりに探り、考え

ていくはずだ。もしこの種の学びのきっかけが、教室においてある程度得られるとすれば、それは実践と様々な分野のつながりの中で学ぶことのできる家庭科の中でだと思ふ。

しかし、そのような学びが可能でも、評価が存在する限り先にあげたテストのように単なる知識の断片を試す結果とならざるをえないのが現実だろう。ではレポート形式ならどうだろうか。『We』一九八八年十二月号浅井由利子さんの「家庭科とテスト・点数」の中で、「文章の上手下手ではなく、その内容で、どれだけ深く考えて書いているかをみるつもりです」という筆者の言葉に、生徒たちは「一生懸命考えても、うまく書けない人もいるかもしれないし、あまり考えていなくても、さらさらと、苦勞せず、上手に書ける人がいるかもしれない。深く考えているかどうかなんて、どうして判断できるんですか」と反論していた。全く同感だ。

生きることの評価が許されないと同じように、家庭科における評価も不可能であり、またしてはならないことだと思う。これは他の教科についても言えることなのだが。

満点主婦などという言葉があるが、今後生活技術のみならず男女それぞれの生き方まで含めて評価される下地作りなどが、もし行われるようなことにでもなれば、こんなに恐ろしいことはないと思っている。

発

言

家庭科って、何を評価するんですか？

荒井理子



私は中学二年のとき、家庭科で「2」をもらいました。五段階評価です。後から聞いたことですが、実は「1」という評価だったのを、クラス担任が抗議して「2」に上げてくれたのだそうです。作品のできばえにかかわらず、提出しさえすれば「3」という当時のこの学校の評価基準から考えたと「1」という破格の(?)評価は、多分私がこの先生を大嫌いで反抗的だったためではないでしょうか。

家庭科という「女の教科」を学校で教わったのは、後にも先にもそれっきり。高校・大学、そして卒業後も、全く縁のない生活を過ごして来ました。それでも、子供がうまれてからは、自己流でベビー服やスカート、夏のワンピースなどを作って着せましたし、お料理は大好きで、これだけは家族も友人も高く評価してくれます。

私は未っ子でしたから、家事の手伝いなどしたこともないのですが、いつも母にベッタリくっついていて、炊事をしてる母とかわした会話——どうして大根のカドをけずるの?—

「面とりといってね。こうすると煮くずれしないのよ」とか、「だしこんぶは、お湯が沸騰する直前にとりだすのよ」とか、「お豆を煮る時は最後にお塩をひとつまみ入れるとあまさが増すのよ」などなどが記憶に残っていて、それが大人になってから役立ったように思います。

娘は其学の私立学校で、中学・高校・大学を過ごし、今四年生です。民主主義を守ること、基本的人権と自由と自主性を大切にし、人間として「生きる力」を育てることを教育理念にしているこの学校に、女子必修としての家庭科はありません。中学校では「技術科」がありますが、完全な男女共修です。鋸・カンナ・カナヅチ・電気ドリルなどの工具を、男女ともごく自然に扱いながら、同じ素材で共通の課題を仕上げます。技術的には男女に能力差は全くないと、先生は断言されます。重いものを運ぶときは男子が手伝います。指示されたからではなく、一緒に作業する中にごく自然に生まれる助け合いなのです。

高校では二年・三年生で選択科目としての家庭科がありません。食物・被服・工芸がこれに含まれますが、もちろん男女共修です。

エプロンをかけてケークづくりや熱中したり、被服を選択する男子生徒もいます。特に被服では、お互いの体のサイズをはかりあうのですが、「男子が女子のサイズをはかるというところもあるだろうね」などと、先生方が笑いながら話していらつしやったことを覚えています。被服や食物を選択した男子を他の生徒が異端視したり、嘲笑したりすることも全くありません。

他校では多分、家庭科のなかに含まれている食品添加物・環境汚染・性などは、二年・三年の必須科目である「総合学習」で学びます。そのメインテーマは「生命と人権」です。「愛と性」では、妊娠から出産場面までを克明に追ったドキュメンタリー映画を男女一緒に見ます。男性と女性の体、性器・性衝動のちがいや、避妊方法、避妊具の使い方も共に学びます。

映画では生々しいシーンの連続に、最初は照れて下を向いていた男子生徒たちが、終わり頃には、感動して涙を浮かべていたというのを、娘から聞きました。これらの授業を通して生命の尊厳や男女平等、生む性としての女性への思いやり、性交渉はお互いに人間として高まりあうためのものなのであ

ることなどを、かれらは認識していきます。

夫も妻も対等に、お互いの立場を尊重しながら、平等に家事・育児を分担していくという教育を、娘は家庭科とは縁のない学校生活で受けました。

中学の頃からお料理を除いた家事の全てを担ってくれています。私が年の中出歩いているので、必要に迫られていることだったので。洗濯機・掃除機・ドライヤーなど日常の電気製品のちよつとした故障などは、なんなく直してしまいう娘が、機械オッチの私には神様のように見え、これも中学での技術科のおかげかと思っています。

キュウリを短時間で一ミリの厚さにたくさん切ることができなくても、家庭という単位集団で認められることで子供は自信を持ち、成長し、自立していくものと思います。

「人間として生きていくうえで必要な力」「他からも必要とされる人間」これが私としては評価の基準です。このような考え方からすれば、「家庭科」という呼び名そのものに疑問を感じるのです。生きる力をつけるための総合学習、または「人間学科」とでも呼ぶべきではないでしょうか。

以上のように、男女差別を前提に続けられてきた家庭科には否定的な私ですし、現行の家庭科についての知識もほとんど持っていないので、家庭科の評価について論ずる資格はありません。しかし、日頃の思いを書かせていただきました。

発

言

私は評価をこう考えている——中学音楽



松島 赫子

教師になった年の一学期の半ばすぎ、「評価」というのがパーセンテージで割りふられていることを知って、大いにショック。リコーダーは全員ふけるようになるまでががんばったのに、音程がはずれる子は変声のためで、変声というのは体が成長している証拠なのに、パーパーテストはよくなくても（もともとパーパーテストで音楽性ははかれない。知識を暗気する力があるかどうかかわかるだけである）授業中にこにこして歌う子なのに、静かに音楽に耳を傾けることができる子なのに、なのになのに、一クラスで平均して三人には1をつけないといけないという。新採研（初任研ほどいやらしいものではなかったが、二十一年前にもこういうのが既にあった）で、指導主事に、こんなのおかしいと言ってみたが、納得いく答はもらえなかった（あまり昔のことで、答そのものは忘れてしまった）。でも、その頃の私は今よりもっと勉強不足で、悩みつつも周囲の言う通り、する通り、割りふら

れたパーセントにあわせて相対評価をしていた。何年かたつうちに、通知表の評点を相対評価でつけなくてはならない法的根拠はないと知って1をつけるのを止めた。やがて、指導要録もそうだと知って同様に1をつけるのを止め、2もほとんどつけなくなった。そうしていい人の中に私を猛烈に非難する人がいて、「生徒や親に迎合している」とか、「内申書で（これだけは如何ともし難く相対評価をさせられている）裏切るつもりか」などと言われたり、「1をつけないのは、あなたが1をつけられた子どもをダメな子どもと決めつけている証拠だ」と言われたりしたことさえあった。しかし、何と言われようと私にはもうパーセントに子どもをはめこむ気は全くなくなっていて、そうし続けている。パーセントに割りふることそのものがおかしいのだから。文字通りにいえば音を楽しむのが音楽。その教科を楽しむものになっているかどうか、評価さるべきは教師の側ではない

のだろうか。子どもの心を解き放ち、しっかりと歌声をひき出せたかどうか、重い荷物をいっぱい背負ってくる子どもが心安まるひとときと感じてくれるような授業を展開したのかどうかと考えると、評価の対象は私ではないかという気がする。たとえば、表現力や技術を身につけさせるのが中学校の音楽の目的であるとしても（私はそうは思っていないが）、それを数字で評価できるのかどうか。音楽史上に名を残す作曲家の作品だって評価はまちまち、作曲された当時は不評をかって何年後かに大いに評価されているものもある。ブーニンを高く評価する人もいれば、けなす人もいる。子どもの声についても、多少声が弱々しくても澄みきった美しい声がいいとする人もいるし、私のように、美声でなくても力強くしっかりと声がいいと思う者もいる。要するに音楽は好きずきなのだ。もし、聞いている者がいいと思わなくても、歌っている本人が楽しんでいるのなら、それもまた、それでいいのではないかと思う。

楽しんでいる子どもに1をつけることが教育の場で許されるのだろうか。私は1をもらった子をダメな子と思ったことはないが、数字は魔物、いつのまにか一人歩きするので、1をもらった子や、その親がどういう思いをするのかは想像がつく。1をもらって励まされた子はいないと思う。通知表は教師から保護者への便りであり、その底には子どもへの愛や

励ましがなければならぬのだから、子どもをうちのめすような評価はやめたい。

評価についてこのような思いはあっても、結局私も数字で評価しているのが現実である。だから、一学期の終わりには自分の思いを子どもたちにしっかりと語る。音楽とは何か、評価とは何か、これまで書いてきたようなことを話す。入試に必要とされる内申書のこと、通知表に3をつけていても1をつけることがあるということを含めながら。子どもたちの反応は、楽しい授業だったら1でも2でも評価なんてどうでもいいと言う子から、通知表にも1や2をつけるべきと言う子まで様々である。1や2をつけるべきというのは、そういう評価を受けない子どものことばであるので、私としては受け入れないでいる。

いよいよ評点をつける時、子どもたちに「自己評価」を書いてもらう。自己評価は厳しいのが多いが、なかには「とても楽しむことができた。自分なりにがんばって、声もよく出るようになったので絶対5」などというのもある。一人ひとりの自己評価を参考にしながら評定するのだが、私の評価はあまりあてにならないこと、もし納得できない時は必ず言いにくるよにということも伝えておく。それにしても評価とは何と悩ましいものかと改めて思うこのごろである。

発

言

私は評価をこう考えている

高校体育（ダンス担当）

藤武 礼子



普段はバレーボールやバスケットボールが飛びかうスポーツの場としての体育館を、リチャード・クレイダーマンやマイケル・ジャクソン、喜多郎の音楽で「ダンス」のためのフロアーに一変させて、私の担当する「創作ダンス」の授業は、先ず踊りたくなる雰囲気づくりから始めることにしている。

十年前までは、「スポーツ好きのダンス嫌い」だった生徒達も現在はまったく逆になって、教師である私が「何をどう教えるか」で頭を悩ますことはほとんどない。

高校で初めて「ダンス」を体験する生徒が半数いるが、それでも、ごく基本の動きを示して、リズムカルな音楽を準備すれば十分に「ダンス」の授業は成立する。

高等学校における「保健体育」の評価をどう考えるかという今回のテーマに対して、最初に私自身の「ダンス」の授業を持ち出したのは、ひとことで「高校体育」といっても、領域がそれぞれの専門に分かれていて、私自身が担当していな

い分野の「評価」について抽象的に語ることは避けたいと思つたからである。

高等学校における評価は、公立中学校におけるそれとは異なり、いわゆる「到達目標」に対する「絶対評価」である。公立中学校の内申書制度にじばられた「五段階相対評定」とは異なり、全員が高い評価を得ることも当然ありうる。

「ダンス」の授業は「体育」というよりは「芸術」の分野に属するものだから、他の芸術科目がそうであるように、その評価は非常に難しい。

たとえば「授業」の内容にしても、教師の立場にいる私自身が、ひとりの生徒の豊かな表現に目をみはり、むしろ大いに刺激を受けて学ぶことが多いし、「創作ダンス」の作品づくりに至っては、私自身が彼女たちに教えることはほとんどない。すべて生徒ひとりひとりが悩み、考え、創造力を充分に発揮して創り出していく形態を取っているので、「評価」

につきものの「到達目標」を設定することも難しい。

ただ私が一時間の中で教師としてやっていることは、自身の表現を、彼女たちの表現に時々、はぶつけながら、からだによる会話で作品づくりに参加していくことだけである。

当然、私と生徒の關係は、互いに批評し合う關係となる。

音楽に関してはかなり自信があつて、その動きにはこの曲の方が合うとアドバイスをして、生徒たちは自分たちのセンスと合わないければ絶対にゆづらないし、からだによる表現においても、同じである。そうしてでき上がった作品は、彼女たちの選曲の良さを充分に示していて、作品も素晴らしい。みずみずしい表現力と創造性において、彼女たちは私をはるかに越えていることを認めざるを得ないのだ。

授業の形態が教える・教えられるという關係ではないから当然「評価」をどうするかという問題にぶつかる。

それぞれの作品は他と比べて良い、悪いという評価はできないし、点数で的確に表わすこともできない。作品に対する評価は生徒に対すると同時に私自身にも向けられる。私の表現は毎年、何百人という生徒の厳しい批判の目の中にあり、その意味では生徒から常に評価されているともいえる。

身体的な訓練と、「創作法」の研究は常に欠かせない。

つまり「ダンス」に於ける「評価」は相互評価であつて、どちらにも同じ力量が要求されるのである。

幸いなことに、私が出会った生徒たちは、私に常に緊張感を与え、授業形態の変更を迫ってきた。

たとえば、六人ぐらいのグループが適當だと思つて提起しても、二人で作品をつくりたいと強く主張して、素晴らしい作品を創ることで私の固定観念をつき崩す。

生徒の問題提起があつて、現在の私の授業は成り立っているし、今後とも変えていかざるを得ないだろう。

高校における「体育」のめざすものは、生徒の健康面での自己管理能力だから、私の担当する「ダンス」以外にも多くの運動種目がカリキュラムに含まれる。理論学習も講義形式で行われる。それらを総合した能力をできるだけ客観的にみていく努力はされていて、いわゆる「体育が苦手」という生徒でも、自分の可能な範囲で授業に参加すれば充分に認められる態勢もできている。運動能力だけで評価するわけではないし、運動が苦手な生徒でも楽しく参加できる配慮はされている。

しかし自らのからだを自らで管理していく能力は、教師がどう関われば彼らのものになるのか、その評価はどのようなかたちで可能なのかいまだに暗中模索の状態である。

発

言



私は評価をこう考えている——中学技術

紅谷昭治

「おーい舟が出るぞー」と叫ぶと生徒達が走ってきます。この子供達がよりよく生き延びるために、どんな力を、いかにして、どれだけ身につけさせればよいのだろうか。中学校技術・家庭で何ができるのだろうか。私は何をしなければなら

ないのだろうか。最初の授業で教科の目標を次の流れから理解させています。一、やってみる。考えてみる（実践する）

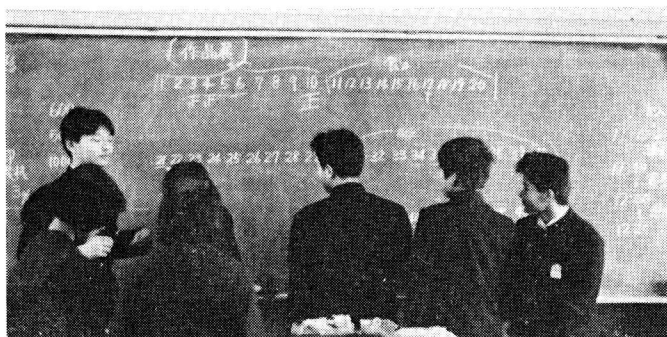
二、わかる（認識する）三、もう一度やってみる（再実践する）四、よくわかる（再認識する）。この流れの中で、創意工夫して新しいものを創り出したり考えだすことができる人間になれると思います。

この目標を理解させるために両刃のこぎりを見せ、まっすぐに切れるの、こぎりの改良を生徒達に考えさせます。そしてどこにもないのこぎりが発明されます。いつだったか忘れましたが、あなたは技術・家庭科の学習を通してどんな人間になりたいですか、という問題を出した答に「創造できる人

間」と書くところを「想像できる」と書いた生徒がいきました。私はその時バツをつけた記憶があります。

しかしよく考えてみると想像することも人間にとって大切なことだと気づきました。こんなものを作って使ったらどうなるのだろうか。原爆の例を話せば、すぐに理解します。それは想像力です。そこで目標を「創造できる人間、想像でき正しく判断できる人間」としました。生徒に教えられたわけです。授業は教師と生徒で共に作ってゆくものです。当然のことですがなかなかむづかしいのは、生徒を批判することはやさしいが、批判してもらうのは困難なためでしょう。

授業中間違った答を発表しても、まわりでいやなことを言わない約束をします。そして一人ひとりが主役であることを自覚させ、教師と生徒が一对一であることをわかせます。そこで何が本当なのか、共に考えることが大切なことであると言っています。これは場の設定です。生徒達がその時間い



きいきと過ごせるように、学習を通して教師と生徒のキャッチボールを、時には生徒と生徒のキャッチボールができるようにします。生徒どうしの教えあいや助け合いは、大切な教育になるからです。

特に製作時には一人ひとり順番にまわります。ほめたり、アドバイスをしたり手助けをし、手本を見せなければなりません。そして最後は必ず生徒自らの手で完成させねばなりません。教師はなるべく目の前で本物を見せることが大切です。見せることが信頼を高めます。頭の中でやり方がわかっていても実際にできなければなりません。できる人間になることが大切だと常に言っております。一人ひとりに接することにより未習得の部分をカバーすることができま

す。その結果、生徒と共に楽しみ、共に苦しみ、共に喜べる教育ができやすくなります。この姿を生徒達をよく見てくれています。

生徒達は、ものをつくることが大好きです。生活に必要な作品の製作を通してものの見方、考え方、基本的な技術が身につくようにしています。特に「今日もにこやか安全第一」のスローガンは、一生涯通じる事柄として発達段階に応じて三年間、くり返し考えさせています。

次に実習でつくった作品のレポート項目例をあげます。

- (一) 製作図をよく考えてかきましたか
 - (a) 製作図を通りできましたか
 - (b) 製作図通りできましたか
 - (c) どこを変更しましたか
 - (d) それはなぜですか
- (二) 道具の工夫が理解できましたか
 - (a) 道具が使いこなせるようになりましたか
 - (b) 道具が使いこなせるようになりましたか
 - (c) どんな道具があればよいと思いましたか
- (三) 機械の原理が理解できましたか
 - (a) 機械の原理が理解できましたか
 - (b) 安全に使用できますか
 - (c) 機械をどう改良したいと考えましたか
- (四) 失敗したところはどこですか
 - (a) 失敗したところはどこですか
 - (b) なぜ失敗したと思いますか

発

言

共通一次所感

共通一次試験の目指したものは一体何であったのか。この問いかけに、真の学問への道程として、建設的でより次元の高い解答を得ることは実に困難に思われる。これは実際に一次試験を体験して得た私の感想であるが、この結論へ至る根拠として、幾つかのこのテストに於ける特徴がある。

まず試験自体、あまり高度で難しい問題はなく、浅くとも広い知識が求められているということである。一見このことは極めて妥当で適切なものにも感じられるが、実は様々な欠点をも包含している。つまり、この試験によって受験生は自己の学力の平均化に努めなければならず、一般に脳が最も柔軟性に富み、卓越した発想を生む可能性が高いと言われる十代後半という時期を、ほとんど意味のないような暗記や小手のテクニクを修得することに費やさねばならないので、ええって個人の可能性を摘み取ってしまう恐れがある。

そしてこの試験のために準備した事柄が、大学進学後の学

びの基礎となるべきであるのに、決してそうでないということは矛盾である。学生の各分野における適正及び資質を検討するための試験ならば、理科志望の人間に、何百年前の何月何日にどこそこで百姓一揆が起きたとか、あるいは文化志望の人間に、 $y||x$ のグラフに $x||5 \cdot y||5$ の点から何本の接線が引けるか、といった問題を解かせ、その合計得点で学生を振り分けるのはなぜか。こういう問題を解けたからと言って、その人の人間性が広がり、豊かな人格を得られるとも信じさせようというのか。

また、この試験では深い洞察力や思考力及び創造性を必要としないことが多いために、学生の持つ、本来学問に最も必要なプラスアルファの才能を全く無視する形となってしまう、卓越した才能がありながらバランスの悪い学力を持った学生の前途を理不尽に阻んでいると言及できるかも知れない。

更に、知識さえあれば解答できる問いが多いため、勉強を

森健太郎



重ねておきさえすれば高得点が期待でき、潜在的に優れた能力を持つ者と単に得点の技術を持つ者との本質的な差が、点数としては全然現れないことが大いにあり得る。

見方を変えれば、この試験の特徴は、学生の長所に点を与えていくのではなく、欠点を減点していく方法を採っていることにあり、これによっていかに優れた発想を持っていたも、不得手な分野を持つ学生ははじかれていくことになる。また、求められる知識や思考法も、先方の指定してきたものの範囲に限定され、そこでは自由な発想の活躍する余地が存在しないため、学生の知識や思考法を画一化するのに共通一次試験が一役買っているとも言えるだろう。

そして、この試験の存在そのものが、学生ひいては世間一般に、新たなそして全く無意味な価値観を与える可能性がある。事実、この試験の実施によって、各大学の可視的レベルでの序列化が生じ、受験生は一次試験で何点取ったから何々大学を受験できる、若しくは受験すべきである、というような低次元の判断基準を生み、各大学の特色により、学生が主体的に自分の望む学部を目指すという基本的で理に適った状態が失われてしまっている。

この場合、各大学が確固たる自治能力を有していない点にも責任の一端があるだろう。共通一次により生じた序列化から逃れる為に毎年のように受験システムを変革する以前に、な

ぜ各大学が自らの特色を打ち出して、学生にとって魅力溢れる大学の完成への労力を惜しむのか。エゴを剥き出しに他大学を出し抜くような状況を脱し最高学府の理性及び英知を以って誇り高い学問の府の門戸を開くことはできないものか。

これまでに述べた全てのことから、共通一次試験を発端とする受験システムによって人間性の小型化が促進されていると言えるだろう。つまり、産業社会に貢献し服従することと異論を唱えさせないための、国家規模での人間の平均化と思えぬこともないからである。

しかし、真の学問、教育とは何か。学問によって人は内面に新しい真理を吸収し、それが自身を改革し、新しい人格を持った者となるべきである。また、そこには人間の本質的解放による真の自由が存在せねばならない。不自由が存在していれば真理の獲得が不可能となるためである。一見多岐にわたる知識を要求する共通一次は、この視点からは、実際には学生に思考させず、型にはめ込んで不自由を与えているために無意味どころか有害なものであると言えよう。大学入試の審議委員会に近頃の大規模な贈賄事件の主謀格が幅を利かせていたことから、国家の学生に対する誠意など存在していない事が窺い知れるが、真に学問を修めなければ、国外にでも可能性を求められるのはまだ幸運と言えるかも知れない。

(大学生)

一坪の田んぼで学んだこと

●熊本県家庭科サークル

山野 幸司

一、百姓志願

一九八八年十二月三日(土)、文化祭、ステージ発表の日です。六年五組の出し物は「稲作り」です。いつもふざけ半分の子どもたちも、ステージ上では緊張しています。その顔に、これまでの取り組みが、走馬燈のように浮かんできます。

一九七七年初冬、私は、急性肝炎で入院し、入院しながら結婚しました。家庭を持ったものの退院後も健康がすぐれず、悶々とした日々を送っていました。このころ、出会ったのが竹熊宣孝先生です。「土と健康」、食べ物の大切さと同時に、農業の重要さがわかってきました。理解したからには、実践しないと我慢なりません。農地を借りて、畑作りを始めました。研究会などに参加すればするほど、子

どもたちにも体験さ

せたくて、さっそく

近くの荒れ地を借り

て、一・二年生と一

緒に、二十日大根を

育てたり、校内に一

坪の畑を作ったり

……。まさに土いじ

りをして楽しまし

た。教師というより百姓になったような気持ちで、学校へ行くことが楽しくてなりませんでした。

二、町の中の緑の学校

一九八三年、城西小学校へ転勤となりました。熊本市内の



西、熊本城の西側にあり、江戸時代の有力者の別荘も残っています。児童数約千二百名で、市内では二番目に大きな学校です。環境としては、熊本市の中でも特に緑が多く、野鳥の姿を目にし、鳴き声もよく耳にする位、自然に恵まれています。ところが、子どもたちと自然とのかかわりは薄く、季節による自然の変化にも無関心なのです。通学路の途中には、草苺、すみれなど季節の美しい草が顔を見せてくれます。校区の平地には、少し田んぼや畑もあり、そこには稲や作物が植えられています。また井芹川も流れ、山あり、谷ありの校区です。山手の方ではホタルを見ることもできます。春には、筍を採ることもできます。金峰山という熊本市民の憩いの地へのコースに位置し、絶好の環境にあります。

通学路は、田や畑を通るコース、山手の坂道を通るコースに分かれ、どのコースを通っても自然に触れることができます。しかし、このような自然の移り変わり、自然の息吹き、生命の躍動……など、子どもたちの日記に綴られることは、めったにありません。この子たちに田や畑で遊んだ経験、働いた経験を聞いてみるとはかばかしい返事は返ってきません。地区でというよりも、祖父母の家での経験が返ってきます。

三、子どもたちとの畑作り

学校の西側の段々畑は、近所の方々の菜園です。子どもたちは、この段々畑の竹やぶの中に、段ボール箱、タイヤ、木切れなどを持ち込み、基地を作って遊びます。その結果、わる気はないのですが、畑を踏み荒らしてしまっています。そこで、赴任した直後でしたが、校庭の西側の空地を借りることにしました。近所の人に地主さんを尋ね、畑作りに着手したのです。借地料は、学校が払ってくれるということで一安心です。

五年生を担当することになりました。学級開きの時に畑作りをすること、畑作りに取り組むことを学級づくりの一つの柱にすると話しました。ゆとりの時間、理科の時間、家庭科の時間、放課後と、時間をやりくりしながら、竹やぶを開墾し、畑にしていきました。班によつては、朝の七時に畑に集まり、始業前に作業したり、休みの日は、弁当を持参で耕したりと、みるみる畑の形が整ってきました。竹の根つ子の比べっこをしながら、スコップを使って掘り起こしていきました。学校にある道具といえ、スコップで、これでは、畑らしくなつてゆきません。そこで、子どもたちがいない時に、私が自宅から持ってきた鍬で畑らしく形を修正しました。

はじめ、慣れない作業に不満を言う子や、他の勉強が遅れるとか、「先生は、百姓のごたる」とか、余り乗り気でない子どももいました。しかし、畑の形ができていくと、先の

見通しが見えてきたのか、さつまいものうねを作りあげていきました。六月末、さつまいもの苗をどうにか手に入れた、遅くなりましたが、植え付けました。植え方も、立てるようにしたり、全部埋め込んだり、様々です。草取り、追肥、つら返し、水やりなど、畑の管理は不十分でしたが、秋には、雑草の中から四十名分のさつまいもが収穫できました。

いもの後は、また耕やし、小麦の種子を蒔きました。時期が悪かったことと、雀の害で、あまり収穫できませんでした。このような作業を通す中で、自分の家に菜園を作ったり、休みの日に田舎に行つて、農作業の手伝いをする子も出て来るようになりました。また「稲も育ててみたい」などという言葉も聞かれました。しかし、稲作りや他の作物を育てる条件がなかなか整わず、毎年さつまいもだけを続けていました。

四、田んぼ作り

一九八六年の卒業生は、卒業記念として、校舎の南側に水道を引き、学級園を造つてくれました。その横に、たまたま一坪の空地がありました。水をどうにか引けるという条件が整いましたので、次の子どもたちは、さつまいもの他に、稲作りに取り組むことにしました。

五年生では農業学習、六年では歴史の中で稲作文化の学

習、家庭科では調理実習をします。そこで、さつそく田んぼ作りをする子どもたちに提案し、どのように稲作りに取り組んでいくのか、何度か話し合いました。一方、農家や苗屋さんを尋ね、種子や苗を入手しておきました。

田んぼは、田起こしの前に、水が引けるように整地しなければなりません。そこで、一坪ぐらいの土地に、全員で交替で、五〇cmほど土地を掘り下げ、大きな穴を作りました。掘っていくと、石がゴロゴロ出てきます。ていねいに石を取り除きました。子ども一人ではかかえられないほどの大きな石も、いくつかりました。何人かで押して外に取り出しました。なかなか作業ははかどらず、放課後も、数名の男の子と一緒に、汗を流したこともしばしばでした。学校嫌いで欠席がちの子も、田んぼ作りだと、先頭に立つて穴掘りを頑張りました。掘れば掘るほど、石がゴロゴロ出てきます。約五〇cmぐらい掘ったところで、穴掘りをやめ、その上に黒のビニールを敷き、土を入れ、校内の腐葉土を混ぜて田んぼができあがりました。

田んぼができ上がったら、次は水路の検討です。水が来なければ水田になりません。作業は、班毎に分担を決めて、少しずつ作業をすすめていきます。問題なのは水路と排水路です。何度も造り直しながら、やっと田んぼができ上がりました。作業はつらく、根気がいりました。だれもが尻込みし、

なかなか作業が進みませんでした。しかし、一番目立たない子が、学級の中心となって、作業を進めてくれました。水を溜め、はだして田んぼに入り、土を混ぜ、しろかきをします。子どもたちは、土がぬるぬるして気持ちがいいと大喜びです。どろがはねて、顔や洋服に付いたと言つては、はしやぎます。

いよいよ田植えです。並んで班ごとに田植えをします。なかなか稲が立たず、水に浮いてしまします。二〜三本ずつでできるだけ疎に植えていきました。一つ一つの作業に約一時間ぐらいの時間を当てながら、少しずつ作業を進め、足りない所のみ、私が後で補つておきました。

苗は、農家からもらってきました。田んぼの隅に苗床も作り、苗を育ててみたのですが、成育が悪く使いものにならなかったのです。周辺の農家と同じ時期に、田植えも終え、作業も同じように進めたのですが、農家の稲に比べると、発育不良でした。水入れは、日直が交替で朝夕行い、夏休み中は、プールに来た者が入れるようにしました。みんなの心が、稲を育てるということを通して、一つになつてきたように思います。

そして、秋いよいよ稲刈りです。五年生の時は、刈り取った稲をそのままにして雀の害にあつて、がっくりきたのです。中途半端で収穫の喜びにまで至らなかったことを反

省し、今年は、稲の生産だけでなく、調理までする計画を立て、また新たな気持ちで稲作りに取り組むことにしました。今度は、雀に稲を荒らされないように、田んぼの周りにひもを張ったりして、稲刈りの日を迎えました。作業は、前年の失敗がありますので、すべてが慎重にすすめられました。稲^は架を田んぼに作り、一週間、陽に干しました。

五、もみすり

いよいよ、調理です。一時間目は、稲のまま食べられないかと試してみました。フライパンを使って、焼いて食べるという方法です。他に調理の方法はないか研究することにした。やはり脱穀し、もみすりをしないとおいしく食べられないということに話がまとまりはじめ、どのような方法で脱穀し、もみすりをすればよいか考えてみました。子どもたちは稲の穂先を手や箸ではさんでもみだけをすぐき取って脱穀する方法を考えつきました。千歯こきの原理です。学校にあった千歯こきも使ってみました。稲の量が少ないためにあまり役立ちません。もみすりは、すり鉢を使ったり、棒でたたいたり、石や棒でこすったり、道具を様々に工夫してやりました。まさに、原始時代の人々の体験を子どもたち自身で見つけ出してゆきます。

玄米ともみがらとに分ける作業には手こずりました。試行錯誤の末自然の風や下敷やうちわで風をおこし、分けてゆき

ました。粉にして食べたいという班も出てきました。もみのまま石臼でひいた結果、もみながらも一緒に粉となり、「食わんれんごつなつた」とべそをかいていました。玄米を石臼でひいた所は、一応きれいな粉になり、玄米せんべいを作りあげました。

調理は、ブロックでかまどを造り、薪を燃料としました。玄米を白米にすることもできず、吸水も不充分で、玄米をかまでたいたり、木の葉に包んでゆでたり、鉄板の上に玄米を乗せて焼いたり、なんとか調理しようとして一所懸命です。食べてみると小石がたくさん混じっています。まともなごはんにはほど遠かったものの、それでも子どもたちの顔は笑みほころんでいました。

数日後、NHKテレビ「大いなるアジアの恵み、米」を見たり、資料を読んで稲作と調理の学習のまとめをしました。

六、今、思うこと

最後にこの取り組みを作文にまとめ、「稲作りとぼくらの旅」という文集にし、文化祭でも全員参加で発表しました。二年間にわたって、稲作りに取り組むなかで、子どもたちは、体を通して色々なことを学び得たと思います。しかし、その時々、子どもたちの想いを作文に綴らせておけば、もっと深い学習に、高めることができたと思うのです。また一つ一つの取り組みが、学習として思想を高めた

り、心を磨いたり、技を獲得したりという点で、いささか不十分だったと思います。改めて、子どもたちは稲作りによって、どんなことを学び得たのか、どんなことを学び得るのか問い直しています。

しかし、私自身、教えることによって、多くのことを学び取ることができました。稲作りの技術と調理の工夫、その歴史の変遷など、稲が大陸からどのように伝播し、それをどんな道具を使って調理をしたのか、食文化の発展と継承がよくわかりました。子どもたちは、自らの知恵で、試行錯誤しながら、同じような工夫をしました。そして、昔の人が、道具を発見したように子どもたちも同じような道具を発見したのです。ほんとうにもしろい授業とは、学問の本質をきわめるようなことではないでしょうか。すぐれた内容をわかりやすく単純化し、授業という形で学ぶのではないかと思えます。今こそ、質の高い、ほんとうのものを教材として、子どもたちと共に学び続けていきたいものだと思います。

今年も、稲作りの季節がめぐってきました。また新たな気持ちで、稲作りに取り組んでみようと思っています。どの学年であろうと、その学年にふさわしい学習ができるように思えます。稲作文化をきちんと学ぶことによって、人間として、今何を大切にして生きていったらいいのか、見えてくるのではないのでしょうか。

草木染を教材に

●松阪市立殿町中学校

吉川 裕子

男女共学が叫ばれ、“小・中・高の一貫性”がいろいろな研究会の議論の柱になってから久しいように思います。

その必要性は誰もが認めるところなのに、なかなか実践例は発表されません。私も理屈では分かっているけど、小中高の先生方と話し合う機会があるわけではなく、具体的に何をどうすればいいのか見当が付きませんでした。

今から四年前、私が小学校に勤務していた時、その手がかりを中学校の先生方に与えてもらいました。松阪木綿を綿から布へと教材化した松教研小学校部会のレポートが全国教研に出た後、中学校の先生方が、「小学校で“織”を教えたなら、中学校では“草木染”を取り上げてはどうか。

どちらも松阪木綿という共通点があり、郷土を教材にできるではないか」と提案されました。その後、中学校家庭科

部会において草木染の教材研究が始まったのです。

翌年の県教研では、中学校の研究の様子が発表されました。松阪女子高校の福江先生の指導のもとに、たくさんの方が見本が作られ、媒染剤のことや堅牢度のこと詳しく述べられました。その時、私は司会をしていたのですが、私にとって染色は全く未知の世界でもあったため、その報告がどうして自分の授業と結びつかず、今後中学校の先生方はどのように教材化されるのか疑問でした。報告者である先生も、草木染を取り上げてみたものの、いったい何を教えたらいいのかという点について、助言者である村田泰彦先生に質問されました。確か村田先生は、「模様を出したりする技巧的なことではなく、糸や布に色をつけるという“染め”そのもの

について教えない」と言われたように思います。私はその時、その言葉の意味がよく理解できませんでした。ですから翌年中学校への転勤が決まった時は、染色教材を扱うことだけが気がかりでした。正直言って「どうか染色を教える学年は当たりませんか」と思っていました。

しかし、中学校へ転勤した以上、染色の教材研究は避けられません。まず、家庭クラブの中で実践（実験）してみました。最初は不安でしたが、案ずるより産むがやすしとはこのことで、実際に染めてみると、難しさよりも染めの世界のすばらしさに引き込まれてしまいました。

染色は時間がかかるので、一学期のうちに染める物を準備し、夏休みに染めることにしました。木綿のハンカチは絞りと板じめにしました。他に染めやすそうな物として、木綿の刺子糸を十かせ、並太の毛糸を二キロ、和紙（障子紙）を二巻き用意しました。

さあ、待ちに待った夏休みです。まず、玉ねぎの皮とよもぎをそれぞれ約一時間煮出し、その液をざるでこして染液を作りました。その液にハンカチを浸しました。しかし一時間過ぎても布はがっかりするくらい淡い色にしか染まりません。一晩おいてみました。今度は少し濃くなったのですが、染めむらが出ました。やはり染色には市販の布よ

り、染色用の布を使った方がいいということが後になって分かりました。

毛糸はくずと栗で染めてみました。くずは土手や空地にどっさり生えています。茎も葉といっしょに煮出しました。栗は葉だけを煮出しました。くずは酢酸クロムを媒染剤に使用してからし色に、栗は木酢酸鉄を使いチャコールグレーに染めることができました。これらの毛糸は市販の物とは一味も二味も違う想像以上の色に染まり、初めて「草木染をした」という実感がわきました。

和紙は後で便せん封筒セットを作る予定で、B5の大きさに切り、一枚ずつ刷毛で染めました。染料はよもぎ、せいたかあわだち草、インド茜、くちなし、玉ねぎの皮です。紙を染めるのは何でもないことなのですが、百枚も染めると並べる所がありません。調理台にもびっしり並べましたが足りません。そこで、被服室からアイロンを持ってきて乾かすことにしました。まず一枚ずつ更紙にはさんで水気を取り、アイロンを当てました。これには予想外の時間がかかりましたが、一巻二百九十八円の障子紙が、素敵な草木染の便せん封筒セットに変身してくれました。

この年は実験的に何でも染めてみました。合成染料で染めた刺子糸では、コースターとドイリーを編み、レースとバレ

ーシューズを染めてかわいい子供用の靴を作りました。また、清涼飲料水でも毛糸を染めてみました。これは短時間でよく染まりました。特に「ギッス」は、アツという間に液の色が毛糸に吸収され、透明になりました。他に、布を絵の具で染めてコサージュを作った生徒もいます。私もくずと栗で染めた毛糸でセーターを一枚ずつ編みました。

これらの作品は、秋の文化祭に「染めてみました」というテーマで展示しました。作品の横にはすべて染料の実物を添えることで、草木染をより身近に感じてもらえるようにしました。この展示は、生徒よりも親や職員に好評で、「茜の根を初めて見た」「よもぎはよもぎもちみたいにもっと濃く染まると思ってた」「雑草も染料になるのですね」「この便せんセットは売れそう」というような声が聞かれました。クラブとしてはテーマに添った展示ができた、私も満足でしたが、これを授業に取り入れるのは難しいと思いました。

三学期、草木染で染色の授業をしました。が、従来の手芸としての染色から、村田先生の言われた染色への切り換えがうまくできず、結局、図案のデザインと紋りに時間をかけたハンカチの絞り染めになってしまいました。染料は玉ねぎの皮にしました。染め方は何も難しくはなかったのですが、一番困ったのは、二時間の授業の中で生徒の活動す

る場がないことです。染色釜に水と玉ねぎの皮を入れ、火にかけたら一時間何もすることがありません。染液ができて布を浸したらまたすることがありません。生徒は二時間ザワザワとほとんどしゃべりっぱなしでした。いくら作品のできがよくても、これでは授業と言えません。それで次年度への課題は「生徒一人一人が活動できる染色の授業」ということになりました。

二年目の家庭クラブは「染めてみましたP.A.R.T.II」として、草木染のみにしました。昨年好評だった便せんセットは染料を代え、どっさり染めました。これは後で封筒作りの作業が大変でした。毛糸は極太を三キロ染め、濃淡で円座を編みました。昨年比べ、能率よく染めることができたため、友禅染に挑戦するだけの余裕もありました。しかし、またその年も、クラブの中で授業に生かせそうな教材を見つけることはできませんでした。ここで私たちは、完全に行きづまっていたしまいました。

いろいろと試行錯誤している時、ハツとしました。私たちが小学校から中学校へ引き継いだものは何だったかということです。それは松阪木綿の織と染を教材にして、小学校から中学校へ共通の流れを作ることだったはず。松阪木綿の染料は藍です。私たちは今まで何度も御糸織物KKへ

藍染めの見学に行っているのですが、藍染だけは難しくて学校ではできないと決めつけていました。ところがその年、京都の田中直染料店で藍染めセットが販売されました。早速取り寄せ、染めてみました。“これはいける”と思いました。草木染なのに煮出す時間がいらないうし、染色時間は二、三分ですみます。泥水のような藍液から布を出し、空気にあてると、布の色がみるみる変わります。青緑から藍色に変わる様子はとても神秘的です。生徒からも「ウーッ、きれい！」と歓声が上がりました。やはり教師として、時々はその感激できる場を作ってやりたいものです。

藍染めの利点は、次々と作業が続くことです。手持ちぶさたの生徒やサボッている生徒もなく、一年目の課題はどうにか解決できました。

三年目の家庭クラブは“またまた染めてみました”をテーマに、新しく野菜染めに挑戦してみました。野菜染めは三重大学の木村教授から教わりました。三重大学附属中学校での絹のハンカチを野菜で染める授業はNHKテレビでも放送されましたが、私は“絹”を使うことは今まで思いつきませんでした。木綿よりも絹の方が美しく染まるのは事実ですが、どうしても値段が気になりました。せめてクラブの生徒の分だけでも入手できればと思いました。何とか一枚も染めようとするややはり値段がかさみます。

ところで、昨年夏、私は日本風俗史学会の研修で、シルクロードへ出かける機会を得ました。上海、ウルムチ、カシユガル、ホータン、アクス、敦煌、蘭州、西安へと、織物の町を訪ねる旅行です。ウルムチのウイグル自治区博物館には何日もかけて見学したいような手工芸品がありました。南山牧場でも入ってもらった遊牧民族のパオの中は、刺しゅうや織物、じゅうたんの色があざやかでした。手織りのじゅうたん工場では、細かい柄と、早い作業に驚かされました。カシユガルのバザールで売られていたたくさんの美しい布、どっさり買って帰りたい衝動にかられ、その中で法隆寺の太子間道にそっくりな布を見つけた時は飛びつくようにして買いました。

そして、この旅で忘れられない町はホータンです。絹都と呼ばれるこの町には、大きなシルク工場がありました。繭の選別から始まって、糸操り、糸巻き、整経等の工程は、きつと日本でも同じだろうと思われませんが、女工さんたちの表情が明るいのに驚きました。偏見かもしれませんが、日本の製糸工場には暗いイメージがあります。ところがこちらでは、みんな色とりどりの絹の洋服を着て、イヤリングにネックレスという姿で作業です。ここで私は、出発前から気にしていた絹の白い布を十メートル手に入れることができました。値

段は一メートル十二元（二元〓三十七円）です。絹糸も五かせわけてもらいました。次に緋の手織りをしている工房を訪ねました。庭に入ってすぐ私の目に映ったのは、大きな鍋で煮た繭から、おばあさんが糸をとっている姿です。

この光景が、二週間の旅の中で一番強く、私の脳裏に焼きついています。前号で理想の被服室について書きましたが、その中で繭から糸をとる場面は、このホータンでの一シーンをそのまま移してみたわけなのです。

こうして手に入れた十メートルの絹の布は、一人一メートル（ハンカチ四枚分）ずつ分け、ぶどう、しそ、紫キャベツ、くちなし、よもぎで染めてみました。同時に木綿のハンカチも染めました。やはり木村教授の言われたとおりです。全然染まり方が違い、絹は美しくあざやかに染まりました。

毛糸はぶどう、茜、栗のいがで染めて、また円座を編みました。ぶどうは農家で十キロくらいもらってきて、たぶりの染液を作って染めたのに、生成程度の色にしか染まりませんでした。これにはがっかりさせられました。

このように家庭クラブでは、三年連続でいろいろな染料を使って染めてみましたが、この中で授業に生かせるものがどれだけあったのかと思うと、ちよっと情けなくなりました。でも、毎年毎年新しい発見があり、決して無駄ではな

かったと思います。

結局授業で扱う染色は、時間的にも、生徒の活動面から見ても、藍染めに落ち着きそうです。昨年度、初めて男女共学で染色を扱いました。授業の流れとしては、まだまだ手直しが必要ですが、繊維から製品ができるまでの工程の一つとして染色を位置づけることができました。

生徒の反応は、「ひもや板で模様を出すのが面白かった」「ひもをほどこす時、わくわくした」「自分だけの模様が出てうれしい」と、この程度ですが、試行錯誤した染色の中で、この一歩は大きな前進だと思います。

本年度は、全学年共学にしました。また新しい教材探しに四苦八苦すると思います。被服で共学を進めてみえる先生方、どうかこれからもよろしく御指導の程お願い申し上げます。

今号をもちまして私のつたない報告を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

●高等学校では

「食文化」

生徒と共に教材作り——(その2)

●山形県立新庄南高等学校

田村より子

日頃「教科書を教える」のではなく、「教科書で教える」ことを心掛けてはいるものの、教科書や自作プリントから離れて、専ら生徒の「やる気」だけにかけようとする授業は、ちょっとした冒険です。

「生徒がついてこなければ失敗だし、得るものもなく、単なる時間の浪費に終わったらどうでしょう。それよりも、教科書と補足プリントでやれば無難なんだが……。生徒たちは面倒くさがるだろうな、A子やB子はきつとブーブー文句を言うだろうな、あの強烈な抗議とまた一戦を交えるのは辛いな……」

と、心は波間に漂う小舟のように大きく小さく揺れてしまします。


「最上地方の食文化の特徴と、そのルーツを調べよう」で始まった班研究は、我が家や隣り近所のお年寄りから話を聞いてくることにとどまらず、新庄市の老人福祉センター訪問や古文書調べにまで発展し、当初の不安を一掃するほどの反応が返ってきました。もちろん、初めは文句を言う生徒もいましたが、二班ずつ同じテーマを担当させたことが功を奏したのか、その二班が互いに競い合う形で自主活動を始めたのです。

(テーマ)

- (一) 古代の食生活
- (二) 飢饉食
- (三) ケの食事(日常食)
- (四) ハレの食事(行事食)

こんな訳で、二週間後報告された内容は各班とも予想以上に広範囲で、かなり専門的な資料も収集されておりました。

最上の生活ごみと行事食

月	日	行事名	行事食	備考(言い伝え)
一月	一日 三日	正月	おぼえ餅 とぞ(おみそ) おせち料理(正月料理)	正月……古く平安時代、「五節供」として宮中で行われた重要な行事が、次第に民間に伝わり、地方および家庭により変化する形と交差しながら、長く伝わる行事となった。五節供は、奇数月の月日の重なる日に行われる。なかでも年の始めの正月は、一年中で最も大切な行事が集中している。
			祝肴 納豆汁 餅蒔 とろろ八杯 塩麴	おぼえ餅……丸形は人の心を形とったものである。神棚の神の宿る場所として、カマド、台所、田、農具、便所などにも小さめのおぼえ餅を供えて、鏡開き(一月十五日)まで供える。
				とぞ……本来は「唐蘇散」という漢方薬である。平安時代の中国のひらめしと入れれた宮中行事が、広く民間に伝わったもの。元日に飲んで一年の邪気を払い、健康延命を願うという。
	四日 七日	若木迎え 七草	七草がゆ(わらわ餅)	こんぶと餅をワケにはさんで持てこき、山の木にさげて来る。その時若木を持てこきとて、おぼえ餅を春の七草とは「せり、なす、ごぼう、はこばら、佛の座、すずな(ごぼう)、すずしろ(大根)」であるが、雪深、最上では、大根、蕪の葉、ひいらぎ、なす、せり、たらこ、芽、山芋、ごぼう等七種類の餅を集めて作る。七草を切る時、「ナンタラ タラ タラ タラタタキ、イア、ノ鳥カ、ボウボウ、鳥カ、マランサキ、タラタタキ」と言いながら切る。(市内)「唐ドリノ鳥、渡ラタタ、タラタタキ、センタ、マングラ、タラタタキ」(庭月)
十一日		肥背負い (野ネメ) (鏡開き)		朝早く起き、肥を背負い田んぼに正月礼へ行く。帰ると新米をぶら、なめをなつたり、いんぼを煮たりして、
十三日 十四日		田子さし 田子		枝の登人なみす木に田子をして、梅穂が重れ、置作を願う行事である。また、みす木は火つけを願ったものである。 枝にさげるもの(はりこせんべい、七福神のせんべい、さんちやく、蕪、タバコの葉、薺の葉)
十五日		小正月 雪中田植(おみそ) おさいとう(紫丁)	餅 (十四日の夜つくす)	雪の上にヨシと豆カウとワラを植え、置作を祈願した。
二十一日		ヤンマイイワリ		神前にワラやシバを高く積み上げて燃やす。この火で焼いた餅を食べると虫歯腹痛しないといわれる。 ワラ人形を作り、唐年子(人形)に持たせ、赤飯を召込んでおぼえ餅に人形を持てこき行事
二十九日			ひし餅	厄年の人がいぬ家では 厄年の年の末を流すために、餅をついて祝う。  二つ重ねる

九日	耳あけ(大黒)	豆い)と豆料理 (黒豆はす。アジ豆。 つぼし豆を入りに炒り物)	大黒様と股大根を供え、一升はすに豆い)とお金を入れ、動かしながら「大黒大黒、きかす大黒、 耳あけで豆あがれ」と言う。股大根は子孫繁栄を意味するので、豆つくしを食べ、良事が あると健康延命、家内安全を願った行事。
十二日	山ノ神の お年越し	豆腐汁	男の子(ノオが大井)達が「山ノ神ノカンズノ、テノゴングデ三杯、三杯スズノナ六杯」とはやがた 木造りの山ノ神様を持ち、袋をさげて、米や着銭を集めながら一軒一軒回って歩く。大井の 親達が豆腐汁を煮てやり、みんなで食べながら祝った。
十二日 二十三日 (二十四)	地蔵様の お年越し	地蔵様のおとし餅 (赤飯)	部落中のアネヤ/やせの子供達がアガエキモノを着て、酒と重箱を持ち寄り、その年の宿 に集まって祝った。
二十三日 (二十四)	冬至	冬至がほち	長冬に備えて、体の温まる小豆南瓜を食べ、風邪をひかぬよう、中風にかからぬよう、願って 健康維持に努めた。 冬期間、不足しがちな緑黄色野菜(ビタミンA)をカボチャに求めた。又小豆にはビタミンBが多 いので、てんぷらの代餅を助ける効果がある。カボチャを煮ると糖化してビチャビチャして、味が おちやす。が、小豆を入れる事により、ボクボクと旨味がある。
二十九日	正月の準備	餅つき	神様の年越しが一般落する、ようやく村人達は自分達の年越しの準備にとりかかる。 納豆を煮てすすはらいをし、餅をついてとり餅、食、餅は、その年のふち角(毎年ちかう) にさげておき、六月一日の菰が下めの日に食べる。どの家も正月のごちそうを腰によりと かけて作る。
三十一日	年越し	年越しそば そばがえむ	運そばを食べ延命長寿を願った。 そばは昔から救荒作物として作られ、庶民にもてはやされた。年越しに「きりす」そば切りや そばがえむを作って白米の不足を補ったと言う。

曲川では、鱈 (福鱈) こんぶ (ぶろこんぶ)
 鱈 (ますます福繁昌) 豆 (くまめでゆかく) という風縁起を
 かついた品々をそめる。その他、さんばうごほうと名づけたごほう炊きが祝いのことには
 必ずつけることになっている。

しかし、あまり手を広げすぎて焦点がぼけてしまった班もあったため、急きよ方針を変え、班長会を開いて内容の精選をさせました。その結果、一年目は一番まとめやすい④のハレの食に的を当て、「最上の生活ごよみと行事食」についてまとめることに決まりました。

授業では、本から重要な所を抜粋する作業をさせたので、その他の調べ物は放課後になります。部活動で忙しい生徒を除いて、町の歴史家に話を聞きに行く人、市の図書館や歴史センターで資料を集める人と、調べ方にちよつと知恵を貸すと、次々と自分たちで進めていく様子に感心させられます。

一方、私も負けてはいられないと、独自の調査を開始しました。生徒たちが集めてくるであろう資料を、どうまとめていくのかの方針を立てておく必要があるからです。パイクで村々を回ってお年寄りの話を聞いたり、文献を調べたりしましたが、「かで飯だて食うことできねがら、燕漬けで育った」と語る老婆の話や、ある村の契約講の献立の中に記されている、「かさ飯」には心打たれるものがありました。かさのように山盛りにした白飯が、何よりの御馳走であった当時の乏しさが、乏しいが故に待ちわびたハレの日の食事に投影されて、人々の食にかける思いがしみじみと伝わってきました。

飽食の時代と言われ、食への感謝や食卓から季節感が失われつつある昨今、土地でとれたものを、その土地に合った食べ方で作り上げてきた伝統食を、もう一度見直す必要を改めて感じさせられました(前掲表参照)。

一覧表を手にした生徒達から次のような感想ができました。
 ・食べものをこれ程までに大切にしていたなんて……
 ・お餅に大根おろしとか、冬至かぼちゃで風邪をひかない丈夫な体を作る栄養補給もしていたのね……
 ・季節季節の食べ物を大切にする所は見習いたいわね……
 ・行事食に、なぜ豆料理が多いかがようやくわかったわ……
 ・いつでも、何でも食べられることが豊かさだと思っていたけど、食べ物の不足していた昔の方が今よりずっと豊かだなど思えてくるのは不思議だわ。
 ・誰に教えてもらった訳でもないのに、昔の人の知恵ですごくいいわね。栄養学でも習ったみたい……

(実 験)	(実 習)
・根菜のつぼみと豆菜のつぼみ ・もち米とうるち米の炊き分け ・ワカメのつぼみ ・豆腐作り	・山菜・雑物のつぼみ ・アブラジ・おぼろし ・ワカメ・つぼみ ・豆腐作り
・おぼろしと豆菜のつぼみ ・野菜のつぼみ(おぼろし・豆菜)	・おぼろしと豆菜のつぼみ ・おぼろしと豆菜のつぼみ
・おぼろしと豆菜のつぼみ ・おぼろしと豆菜のつぼみ	・おぼろしと豆菜のつぼみ ・おぼろしと豆菜のつぼみ

次の年は前年の資料を使つての学習の後、「最上の山菜ときのこ」、その次は飢饉食」、そしてその次は「雪国の保存食」と先輩が作った資料に積み上げていくという授業を進めてきております。四季の

移り変わりを食卓に乗せてきた最上の食文化を、実験実習にも生かしていこうと表のような実習を行っています。

こうした食生活の学習を通して、地域の生活が少しずつ見えてくると、最上の農村社会に横たわる農業問題と、農家の若妻たちの労働の問題や固定化された性別分業の問題に深く関わっていることにも気付いていきます。食文化からまた家族の問題に逆もどりして、話が発展してしまうことが多く、脱線が高じて私の独演会になってしまふことに

▲私のすすめる一冊▼

『昭和にんげん史』

朝日新聞社編 (定価 一〇〇〇円)

橋本 幸子 (We兵庫の会)

長かった昭和の時代が、一月七日でようやく終わりました。昭和という時代をふり返ってみますと、暗い戦争という谷間を挟んで、戦前は世界恐慌と社会不安、戦後は飢えと虚虚の中でただただ耐えて、敗戦から立ち上がらなければなりません。やがて高度経済成長時代に移り、技術革新で今日の経済大国になるわけですが、その軌跡は実に波乱と起伏のはげしいものであります。

『昭和にんげん史』の中の人間群像は、すべて無名に近い庶民であって、激動の時代に生

まれあわせて苦闘しつつ、時代を支え、今日の繁栄をもたらせた勇氣ある人達です。

大正末期に生まれ、昭和の時代を生きて戦争を体験し、戦後の窮乏生活の中で夫に死別、形身の二児を育てて、ようやく責任を果たした私は、この本の中の人物に自分の来し方を重ね合わせて、涙なくしては読めませんでした。

喜びと悲しみ、苦しみと悩み、憤りなどが織りなす庶民一人一人の人生を、その心情や暮らした内側からみて、昭和という時代を考えようとしています。

15編に納められた人々の屈折し挫折し、立ち直り歓喜するといったさまざまな生き方を通し、昭和という時代の実像を浮き彫りにしているのです。

第1編は原爆記者が自由に取材し報道できるようにになって、広島原爆投下後、ジュノー

もなりかねないので、そこはおしつけにならないようにと深く反省したりします。このように、一つの歯車が回るような歯車とかみ合って次々と回り出すごとく、ひとりりで学んでいく生徒たちの様子を眺めながら、私もその歯車の一つになっていることに苦笑してしまいます。そして、学び合うことの大切さも、しみじみ感じ入りました。今、私は、その重い腰を上げて、地域に学びの場を求め、そして私の主張を聞いてもらうべく活動を僅かずつ始めております。

1 博士の生存を確認する仕事ですが、戦時中の新聞は誤報の連続でした。第2編では、戦争末亡人が自立するためにデザインの研究をはじめ、努力の甲斐あって今日の地位を築いた小池千代の物語。洋裁ブームで一度その道に入った私には覚えがあります。第3編は、寒冷高地の稗田で米作り日本一を目指す農民の暮らしですが、初めの妻も次の妻も過労で死に、減反時代を迎えて百姓はいったの時代で弱者であると述懐しています。こんな調子で15編にまると述べたいです。どの編にも昭和を生きた庶民の血と汗がにじんでいます。筆者は、昭和を生きたこれ等の人々を温かくみつめつつ、たたえているのです。

いよいよ実施する消費税に反対する運動やリクルート疑獄を追及する市民運動の高まりの中で昭和のにんげん史の暗い面を二度と繰り返すことのないようにと切に思っています。

大学家庭科研究会

〈保科 達子〉

大学家庭科教育研究会（略称・大家研）は、'71年11月に第一回研究会を開き発足した。会の名称は、大学において家庭科に関わる学科目を担当している有志の内面的要求によって発足した経緯を反映しているが、大学での理論研究の空転を避け、教育現場における実践への埋没を克服して、共有財産としての研究成果を求めることから、構成は小・中・高の家庭科教師も多数メンバーとしている。

研究会発足の意図は、「閉塞的な研究状況を内部から打開して行くために、家庭科教育研究の理論的・質的水準をあげ、その過程で家庭科教師自身の主体を変革する」というもので、まず、(一)家庭科の教科理論 (二)家庭科教育の歴史的理 (三)家庭科教授内容の基本問題などから研究に取り組み、今日に至っている。研究過程で派生する新たな課題や、家庭科をめぐる教育情勢の変化に対応し、「家教連」や「産教連」などの自主研究の成果にも学びつつ、教科理論の確立とその具体的展開としての教科内容の再編成・授業研究を追求し続けている。研究成果は、定例研究会の報告を主内容とする「会報」、および、会員の研究論文・研究ノートなどをまとめて発行する「年報」によって会員に還元される。

連絡先 〒155 東京都世田谷区北沢1-30-16 保科達子方

大学家庭科教育研究会事務局 ☎03-467-3868

自己紹介

ピースチヨコワーキンググループ

〈村田 則子〉

四年前、ニュージーランド（NZ）の平和運動家が来日し、非核政策を掲げる自国の平和運動について講演、米国の経済制裁に対抗し、NZ製品の購買運動を呼びかけた。

その後、私はNZ土産のキウイフルーツ入りチョコレートを目にして、「これ！」っと閃いた。が、日本未輸入品だったので、直輸入するしかない。それからが大変。輸入業務には全く素人の友人三人と集まり、連日連夜話し合った。苦勞のかいあって、数ヵ月後かの有名なキャドベリー社支社から、数ある販売権獲得依頼の中、素人集団の我々に輸入許可の手紙が届く。それから複雑な手続きを経て、食品検査も合格し、遂に'86年7月、第一便が入港。大新聞の全国版に出たこともあって、注文が殺到。以後はすべて航空便で輸入。

各地の草の根平和集会等で販売し、利益はそれぞれ販売したグループの活動資金に。現在までに約千五百万円の売上げがあり、六百万円近くが活動資金として使われた。その一部はNZに送られ、非核政策維持の意見広告費用の一部に。それぞれ仕事をしながらのボランティアで、四年も続けられるとは誰も思わなかったが、支持してくれる人たちがいる限り、できるだけ続けたいと思う。

連絡先 〒230 横浜市鶴見区東寿寺3-7-37 村田則子

☎045-571-1180（夜間）

「管理されるお産」

森谷佳子

このほど三人目の子を出産した。二人目までは自宅近くのM医院で生んだが、今回はN産婦人科にかかったことで、お産のあり方についていろいろ考えさせられた。

というのは、M医院は地域の町医者のな医院で、先生は世間話もしながら家庭的なふんいきの診察で、こちらの希望にそった柔軟な対応をしてくれた。分娩の際も、M先生はたえず患者に声をかけてくれるので、子どもの状態やお産の進行の具合が産婦にもよくわかり、医者と産婦が息を合わせて娩出をスムーズにすることができた。

ところがN産婦人科では、陣痛がはじまって病院に着いてから十五分ほど診察室で待たされ、その後診察台上って内診を受け、やっと病室に案内されたと思ったら分娩室に呼び出された。痛むおなかをかかえてやっとの思いで分娩台にのぼると、流腸をされてま

た病室へもどされた。しばらくするとまた分娩室に呼ばれて内診され、まだ子宮口が開いてないから、とまた病室へもどされた。これらの処置はわざわざ分娩台上らせなくても病室でじゅうぶんでいいことなのに、医療者の便宜だけが考えられて、患者への配慮が全くみられない。私の場合、陣痛が非常にきつくて、分娩台の上り降りだけで体力を相当に消耗してしまう。

陣痛もいよいよたけなわになった頃、助産婦がやってきて、痛みの頂点なのにもかかわらず、分娩台へ移るよう性急に言う。夫が見かねて「ちょっと待って下さいよ」と口をはさむが、「早くして下さい」と容赦ない。分娩台の上でも助産婦は居丈高な命令口調だ。こちらの体のタイミングと合わせてくれないから、いたずらに体力を消耗し、息切れするばかりである。ついに赤ん坊が危いというので、

酸素吸入して鉗子を使うことになった。

お産というのは、介助者と産婦の信頼関係がいかに大切であるかということを改めて知らされた。介助者が産婦の苦痛を思いやることができるかどうか、産婦が彼らを信頼できるかどうかがお産の成否を決めるといっても過言ではないだろう。むしろお産だけでなく、あらゆる医療において、そういう面があるに違いない。

もう一つ考えさせられたのは、妊婦にとってはいかに高い、あの分娩台（内診台も同様の）のことである。お産を管理するものの象徴ともいえるべきあの台、踏み台を使わなければ上れないあの高さは、もちろん処置しやすいためのものである。あの両足をひろげてのせる形もそうである。あの台に上る時、女性には羞恥心というひどく人間的なものを捨て去らねばならないことを知る。子どもを産む動物にすぎないのだという非人間的な役割を自己に強要する。そんな意味さえ持つあの台の、また何とお粗末な作りであることか。

台にのぼるためには、足を開いて器具の上に乗せながら腰を浮かせて所定の位置に体を置くという、まことにぶざまな不自然な動作をしなくてはならないのだ。あの台を考案し

た人はそのことを考えただろうか。あるいはあの台を作り続けている人は、そのことを考えたことがあるだろうか。その人々にもう少し、それを使う者への思いやりがあったなら、歯医者者の椅子のように電動式で昇降させることができるようにするとか、台の上に横たわった後に足を固定させることができるようにするとか、もう少し何とかなりそうなののである。あの台が出現してからどれほどたつのか、母の証言によると少なくとも四十年前にはあのようなものがあつたのだ。それからほとんど改良されていないのではないか。女性蔑視と言いたくなる。

さて、お産の管理は分娩だけにとどまらない。以前ある総合病院の産科病棟を見たが、そこでは新生児は退院まで新生児室で管理されていた。授乳の時間が来ると、放送で母親たちは呼び出され、新生児室とガラス窓で仕切られた授乳室に集合する。彼女たちはすべてお仕着せの寝巻を着て、手に番号の書かれたリボンを巻いている。一人ずつ番号を呼ばれて、同じ番号札のついた赤ちゃんを窓口から手渡される。赤ちゃんはいい気持ちで寝ていようが、むずかっているようが、おかまいなしに起こされるわけである。母親たちは長椅

子にズバリと並んですわり、それぞれのおっぱいを出して赤ん坊に与えるのである。

何ということだろう。赤ん坊どころか母親までが飼育されている。自分のかけがえのない子ども、他の誰も責任をもてない自分の子どもとの最初の出会いがこうした他人任せの、非人間的なものであらねばならないとは。母親はここで病院という権威の下、管理の偉大さに屈してしまうのである。管理は、そして、学校での管理、社会での管理と続いてゆく。

私の夫は、自宅で出産することを勧めたが、危険を伴うこと、産後の処置で家族に負担がかかることなど考えて私はそうしなかった。

しかしお産が近づくにつれて、お産のためにわざわざ病院に行くのを煩わしく思うようになり、陣痛が始まったら静かに準備し、産むべき時が来たら自分のベッドに横たわれればいいのだったら、どんなに気持ちいいだろうかと思った。かつてはほとんどがそうであつた助産婦が出張してくるやり方は、きわめて自然で人間的であつたことを、いまさらながら思うのである。

安全と引き換えに、私たちはずい分大きなものを失ってしまったのではないだろうか。人間が人間を管理する、その中で人間的なものが失われてゆくという現代社会のあり方で、お産も例外ではなかったのである。

○○○○○○○○こだま●●●●●●●●●●

「名札なんてなくなつたって」

金森土岐

「名札」について書いている人がいたので私も少し書いてみようかなと思ひ、ペンを取りました。

私は現在高校二年生です。通っている高校

は、埼玉県飯能市にある自由の森学園。まだ開校四年目ですが、その名の通り、全てにおいて自由です。制服はもちろん、名札、校則、校歌、校旗、定期試験、成績表……。そうい

ったものはひとつとして存在しておらず、生徒会もあります。それぞれがそれぞれなりに、マイ・ペースで歩んでいるのです。責任という、自由には必ずつきまとう重み、あるいは、それが本当に自由であるという証。私たちの毎日は充実し、解放的ではありませんが、その重みに、時には泣きたくなり、負けそうになり、放棄したくなりながら、みんなが個人として、人間として生きているのです。

うちの学校には名札というものが、またそれらしきものは一切ありません。しかしそれで困った事は、この二年間、一度としてありませんでした。それは、みんなが「自己主張」というものをしっかりしているということ。言い換えれば、みんな個性的であり、魅力的であるということです。うちの学校ではこういう会話がよく聞かれます。

「XXくんってどういう子なの？」

「ほら、あの金髪でさあ、黒のロングコート着て、目つき悪くて、もうヤンキーって感じの……」

パンクの子、ヤンキーしてる子（ちなみに私はここに存在しているようです）、髪的茶っこい子、金髪にしている子、赤い服をよく着てる子、ミニスカートしかはかない子、バイク

に乗ってる子、車に乗ってる子、保健室にたまって子、いつもギター抱えてる子……などなど。充分インパクトが強く、それぞれ自分の顔が、自分自身が「名札」なのです。教師だって同じです。本当に生徒とふれ合う意志があれば、本当に生徒の中身、本質を見つめたい。出逢いたいと思っているなら、ひとりひとり全く違う人間なのだから、絶対覚えられたいと思います。名前なんて必要としな

いつきあいをする人もいるだろうし、名前を大切にする人もいる。でもね、こうも思うのです。現在の中学・高校じゃあ、名札がなければふりなかなあつて。あまりにも自分を殺し、押さえ続け、もう自分というものを忘れてしまっている。それは、名札があることによって、あえて自己PRする必要もなく、教師ににらまれるからそうする気もおこらない。だからかもしれないけど……。

管理する側にとって名札というのは、便利で、楽で、効果的なものであると思います。前述したような、「生徒の本質を見る」ことをしない場合は、ですけど。逆にもし、それをしようとするならば、名札はじゃまかもしれません。なぜなら、人間のつきあいというのは、名前ではじまるものではないのですか

ら。

私と同じ寮のけっこう親しくしている同い年の友達は、中学二年、つまり一期生として入学してきました。その子が中一の一年間通っていた東京の公立中学では、生徒を全て番号で呼んでいたそうです。制服につける名札にも、体操服のゼッケンにも、番号と名前の両方が記入されていたということです。成績も良いとはいえなかった彼女は、毎月行われる学力テストの前日、必ず呼ばれて、「明日は休めば？」と言われていました（悔やしいから友達とよく白紙で提出したそうです）。少しパーマっ気があつてロングヘア（それでも三つ編みしていたそうです）だった横髪は、ある放課後、女の教師によってばっさり切られました。

私の通っていた公立中学は、ここまでひどくなかったものの、けっこう好きにやっていた私は毎日のようにどなられていました。

「何や、その靴下は！」

「ストッキングの色が黒すぎる！」

「スカートが短い！」

「前髪が長い！」

「かなもり！ 名札は！」

何が短い、何が長い。よくまあ、これだけ

言えるわと、内心あきれながらもささやかな私の反抗は卒業するまで続きました。しかし靴下もストッキングも、私は別に規則違反をしていたわけではありませんでした。先生と呼ばれる人たちは、その目の気分で規則を作ったり失くしたりして、なることになってストレス解消するのです。そして、気に入られていない生徒は、その被害をしょっちゅう受けるのです。それでも名札の事を言われ

た時は、さすがの私も一瞬ふき出しそうになりました。だって、その教師は私の名前を知っていたのです。いえ、その人に限らずほとんどの教師は私の名前を知っていました。名前を覚えられている生徒がつける名札には、どういう意味があるのでしょうか。

「意味とかそういう問題じゃない。校則で決まっているからつけるんだ」

「海の輝く日」の佐藤通雅さん。仙台から所用で上京の折、こちらの無理なお願いに時間を

をさいて下さった。緑のジャンパー、黒のリ

ュックが目印と言われて、改札口で待っていると、ほっそりした、どこか「少年」の面影

の残る人が現われる。一瞬ボカんとしてると、あちらから「佐藤

です」。

御自分で編んだ、枯れ葉色の濃

淡の横縞のセーターと帽子。リュ

ックから、そと取り出した路のとうは、こ

の号の「賢治行」のお土産です。

岩手の生まれ、宮沢賢治のふるさとの空気が漂う。そうだ、東京は、同じ色合いの人ばかりになっているのだと、フツと思う。

〈海の輝く日〉 の 佐藤通雅 さん



仙台の高校で国語を教える。このごろ若い男の子たちを見ていて、意識の急激な変化を感じると。「あたり前の感覚」を取り戻してみたいという欲求。作られた「男」から逃げ

出したい思い。リブの運動と教育問題は「笑い」のない分野。当事者同士は真剣だが、下手に外から口出しできない。女の側の抑圧を語るときには、裏返しの状況にある男の側の

します。"お前たちのための規則だ"とよく言われますが、規則なんて教師(管理する者)のためのものだということぐらい、誰でも知っています。生徒を序列化し、支配し、差別する。個人個人の人格など認めない。自分の意志など持たせず、無表情で従順な"ロボット"を造り上げていく。たまに生まれる失敗作「反抗者」を排除しながら……。その出発点が「名札」ではないかと思うのです。

問題をも視野に入れておかないと、と。

二十三年前、教師になった年の冬、個人編集誌「路上」を創刊。年三回発行し、今に至る。歌人で既に歌集を五冊。児童文学の創作、評論も。評論集『生徒―教師の場所』(学芸書林)は出色。

書くことと、教育現場に居ることのバランスをとるのは難しいが、書くことで、現場にとどまる元気が出る。高校をやめ書くことに専念すれば、いいものが書けるとも思わない、と。編み物と路のとうと、醒めた目の硬質の評論と、凄いとしか言えないような感性の前衛的な短歌と、そのどれもが、微妙にちがった貌を持ちながら、ハーモニーをもつ。

(稲邑)

家族と家庭科

酒井はるみ

新指導要領と家族③

今回は、いよいよ家庭科のなかの家族について検討してみよう。

まず新指導要領を現行指導要領と比較してみる。小学校では内容をほぼ踏襲している。中学校は家庭の機能、家族の生活、家族関係などは当然全く新しいのだが、家庭生活の意義のみは一九五六年に一度あった。高校では現行の家庭の機能、家族の生活、家族関係に高齢者問題が新たに加わり、青年期の生き方と結婚（生活技術と生活一般のみ、一九四九年に初出後消えた）、親の役割と家庭教育（生技と生一のみ、初出）など内容が増えた。これらの内容には家庭、家庭生活が多用されているが、家庭科独特の用法として尊重したいと思う。

ここにみられる特徴の一つは小・中・高等学校にまたがって重複が多いことである。これには、学年がちがえば扱い方は違うので問題はないとか、段階的に難しくなっているという回答が用意される。しかし、たとえば家庭（家族）の機能について小学校社会（一年）と小学校家庭、さらに高校家庭科で、用語こそちがえ、内容はほとんど変わらないから、この回答は妥当とは言えない。家庭の機能は内容が簡単なので繰り返し学ぶ必要はないのである。

重複と深く関連して、とりあげる内容の範囲が限られていることも特徴である。家族関係学の本をひもとくと、性別役割分業、家族制度、家族病理、家族援助など多様な内容があり、学校教育でも扱えるはずだが、守りは固い。重複と範囲が狭い現状は「空白だらけの家族領域」だといえる。

この空白をいく分でも埋めてくれそうなのが、「青年期の生き方と結婚」と「親の役割と家庭教育」である。前者では、性の問題や配偶者選択をとりこむ可能性は大きいし、結婚について学ぶこともできそうだ。後者を採り入れたことはさらに意欲的といえるだろう。急速に変化する社会に対応できず、家族は内に問題をかかえこんでいる。過保護や父親不在が家庭での子どもの健全な生育をはばむ要因となったり、親の共働きに対応した新しい子育てのあり方を模索する必要

もでてきた。

文部省は数年来『現代の家庭教育—乳幼児期編—』『現代の家庭教育—小学校低・中学年期編—』などを刊行してこの問題に熱意を示した。家庭科への導入も、家庭科教育内部からの要請というより、男女共通履習で家族を扱う家庭科にうつてつけと考えたためにちがいない。それだけに道徳教育に流れる危惧があり、冷静に点検する一方で私たちが内容をつくってゆく必要があるだろう。

たしかに、家族・家庭領域は不十分で空白だらけだが、それでも他教科と比べると、最も多くの内容を取りあげている点で、家族を教える教科として大きな位置を占めていることがわかったのである。

ところで家庭科はどういう視点で家族をとらえようとしているのだろうか。道徳が敬愛という徳性で家族（といっても祖父母、父母）をとらえようとし、社会科は社会組織の一つとして家族を見、家族理念は憲法二四条をふまえたというように、各々はつきりした視点や立場を示している。家庭科では家庭生活のなかでの家族、なかならず家族関係に注目するものとみることができる。

しかし、考えてみると、これは視点ではなく、家族領域でとりあげる範囲を意味しているだけなのではないか。現在の

教科書をみると、家族に関する概念や実態を理解する内容が比較的多いが、客観的な事実を知ることが家庭科の立場だと考えているようではない。家庭経営の立場（家庭一般）から性役割や離婚などと取り組むこともできるはずだが、そう展開しそうにはない。

著名な社会学者ジェシー・バーナードは、アメリカで家族の概念規定について合意されたものではなく、国勢調査では家族を世帯でとらえ、法曹では法的絆で、社会科学では血縁関係でとらえ、家政学では、家族結合を「資源、決定の責任、価値や目標などを共有し、時間を越えてお互いにかかわり合う」情緒的結合だとし、家族とは人が家に帰ってくるようなところという情緒的なつながりを重視する定義をしていると述べている（一九七九年）。

この例にみられるように、家庭科において家族をとらえる視点あるいは立場を明確にすることはできる。後述するように、わが国においてもはつきりした立場で家族をとらえた時期もあったのである。

家族（家庭）の領域を意味あるものとして活性化させるために、はつきりした視点を見つけることを私たちの課題としたいものだ。

親子論と心理学

私の迷いと

歩みのなかから



小沢 牧子

(カット・井田裕子)

「罪状」をふり返る

素手でくらしている親子という存在を、心理学は抑圧してきたのではないかと書いてきた。それが見えるのは、私自身が、かつて心理学の専門家とよばれる位置で、親や子への抑圧に加担していた時期があるからこそだ。その「罪状」は、白状しておかなくてはならない。

大学での専攻課程と、研究機関での数年間の研修期間をすごしたのち、公立の教育相談機関で心理相談の仕事に就いたのは、二十代後半のことである。心理テストや、親子への継続的な面接がおもな仕事であった。知能テスト、性格テスト、

「問題」とされる子どもの遊戯治療^{プレイセラピー}、親のカウンセリング……。自分の身体のだこかに、仕事への疑念や生き方への居心地の悪さを自覚しながらも、その問題意識をきちんと直視する勇氣の持てなかった数年を恥じている。

面接室のなかで、相手からつきつけられたいくつかの抗議をいまでも忘れることはできない。「先生は、息子の喘息が私の育て方と関係があるという眼で、母親のわたしをどこかで見ていらっしやいますね」と悲しそうに言った若いお母さん。治療室の中で、「先生は、わたしを侮辱する!」と叫んだ少女。「こんな心理テスト、ほんとうはやりたくないんですよ」と苦笑しながら私の無礼を許してくれた大学生。一九六〇年代も終わりの頃、「登校拒否」とよばれる子どもたち(当初は「学校恐怖症」と名づけられていた)が、ぼつぼつとあらわれはじめていた。そして相談室の外側では、大学を中心に「学問とは、専門性とは何なのか」という激しい問い直しが始まっていた。日本臨床心理学会もまた、この問い直しの作業に必然として向きあいはじめていた。

ひとりの親としての視点に立つて

私自身の歩みはとても遅かった。私は「ゆっくり気づき、おかれてきた者」である。専門性をもって親子を封じこめる側から、封じこめられる当の親子の側にごく自然に位置を移

してゆけたのは、ほかでもなく、自分がふたりの子を持ち、親として「お母さんの責任」、「専門家のいうことばに間違いない」というたぐいの言葉に、子どもの行く学校のなかでさらされていったことによる。学校のなかの諸問題に向きあい、ひとりの親としてたまたかう列に加わり、地域の仲間たちにあふれるように出会いつづけていくなかで、ああ、ようやくほんとうのことが見えてくる、という安心感と誇り、そしてよろこびを味わったことを思いおこす。

自分にとっての必然という確信をいまひとつ持ちきれないまま外側から眺めてきた日本臨床心理学会の、心理学とその実践を問う直す仕事にいつのまにか自然な思いで加わり、『心理治療を問う』、『早期発見・治療』はなぜ問題か』（いずれも現代書館、『知能神話』（JICC出版）などの本を編む作業にも参加した。そのようなじぎざぐした足どりのあとにいま、「親子論」や「母性」と心理学の関連をとらえ返すというテーマにもやっとたどりついている。

抑圧を蒙る側の視点に立つことはすなわち、自分を解放してゆくすがすがしさでもあった。フロイトやユング、ボウルビーやハローウの心理学に身をあずけるのではなく、多くの仲間たちとのつながりを足場に、生活者としての見方や感じ方をこそ大切にしたいと願いながら、いまに至っている。

現在の混とんを抱え切る力

大学という場で若い人びとといっしょに考えあつていく場を与えられて、十数年がすぎた。毎年、「心理学幻想」をめぐって学生たちと議論をする。自分とは何か、という奥深いテーマにまっすぐ向きあおうとする若々しい力は、時代を越えて変わらないと信じているし、ひとりの年上の人間として彼らの模索につきあい、育ち合いたいと思っている。

心理学という専門性への信仰は根づよい。私は何か、という問いへの答を、心理学や心理テストにきめてもらいたいという願望の根づかさ。「無意識」への関心。そして、心を測られる側でなく測る側、つまり弱者ではなく強者の側に回りたいという危なっかしさにもいっしょに向きあっていく。

個人がバラバラにされ、競争させられる社会にあつて、「心の問題」もまた、個人の責任に還元されようとする。安全に生きてゆく為の指針や、それを実現する技法を人びとが心理学に求めるとき、心理学が社会の競争原理を支える思想によって成立しているのだという原点だけは、見すえておかななくてはならないだろう。親子関係や生育史を洗いだし、「無意識」にさかのぼって自分を過去に見出すよりは、いまここで、人間を横につむぎ出し、現在の流動性に耐えながら、状況を変える望みに賭けていこうよ、と私は若い人たちに呼びかけている。

海の輝く日

「賢治行」



佐藤通雅

(カットも)

三月末の年度末休業を利用して、宮沢賢治のふるさとを歩いてきました。といえはいかにもかつこよく聞こえますが、要するに岩手の自分の実家に帰って、そこからあちらこちらと足をのびただけのことです。私の戸籍上の生地は遠野ですが、教師をしていた父の転勤にともなうて黒沢尻（現北上市）、前沢を転々とし、さいごは水沢におちつきました。賢治のふるさと花巻と近接している地帯です。

さてそこで、小さい頃から賢治のことはよく聞かされました。否、賢治以前に又三郎とか座敷童子は身近な存在でした。風のすさぶ日、いうことを聞かずぐずったりしていると、「ほら又三郎来てさらっていくぞ」などと叱られたものです。賢治の作品もそういう延長上に、ごく自然に受け入れられました。

た。しかし地方を同じにすることは、必ずしも幸福な出会いとはならないものです。中学生・高校生ぐらいいなると足元の世界よりは彼方の世界へと思いを馳せます。しかも田舎よりは都会を求めますから、自分の置かれている偏狭な場を全否定したくなります。そういう時期、賢治はひどく泥くさく、まるで自分の恥部があばかれるような感じさえしました。できるだけ避けたい、目をつぶっていたい——そういう作家でしかなかったのです。

私が本気になって読むようになったのは、教師になって地方に定住する決意をしてからでした。都会に出なければ一旗上げられないというのが当時の風潮でしたから、私もできたら脱出したいと思っていました。しかしさまざまな事情はそれを許さず、すべての可能性を捨てるような気持で定住することになりました。その頃から心境に変化が生じたのです。泥くさくてもいい、恥部でもいい、日のもとにさらしてじっくり対面してみようじゃないか。——以来『宮沢賢治全集』『校本宮沢賢治全集』『新修宮沢賢治全集』（いずれも筑摩書房）の三つの全集をくり返し読んできました。その間に書きためた評論は『宮沢賢治の文学世界』（泰流社）として刊行しました。が、賢治の世界の核にちっとも届いていないなあという敗北感が残っただけでした。なぜなら、地方を足がかりとしつつ、無限の彼方へと飛翔するのが彼の文学世界だから。

からです。しかもその文学はふつうイメージするようなものではなく、多くのジャンルの集合体としてあります。その片鱗さえも、つかみそこねている……。

私は二十代の前半に新美南吉にとり組み、これも一冊にまとめました。その後に賢治に対面しました。児童文学では北の賢治・南の南吉といって、すぐれた童話作家の双壁と見なすことが多いのですが、正直なところ、南吉はてのひらの上へのつかえる作家です。それに対して賢治はまるで規模がちがいます。南吉には謎がない、賢治にはアタックしても、解明できない謎があるといいかえてもいいでしょう。

それならば賢治は観念の世界だけを志向したのかといえ、そうではありません。何とか地上と絆を持つとうといえた。農学校の先生になったことも、農業指導に走りまわったことも、東北砕石工場技師として働いたこともその証明でしょう。しかしいつでもうまくいきませんでした。賢治を偉人として描く人は、必ずそれら活動をクロージアップし、あたかも大きな成果をもたらしたかのごとく語りますが、実際とは反しています。しかし彼の文学の成立を考えると、地上との絆を持つとうとした意志は、非常に大きな何かであったと考えます。そこを抜きにして、秀作「水仙月の四日」を語ることができないでしょう。大きな何かとは何か——長い間それを反芻してきました。この頃、何とか糸口をつかめそう

だなという気になってきました。そろそろ書き出そうか、その前にもう一度賢治のふるさとをめぐってみよう——。これが今回の賢治行です。

三月末、日ざしはあまねく射していましたが、風はビリビリ肌を刺します。羅須地人協会、ここにはもう数えきれないほど来ています。季節はずれで誰もいないのがさいわいでした。石のベンチに身を横たえてパンをかじりました。記念館・花巻農学校も時間をかけて見ました。翌日は種山高原へと車を走らせました。雪はまだ道の両側にあり、ふきのとうが芽を出しています。黄色に枯れた牧草地には牛の影もあります。なだらかに重なりあう山肌、そのはるか西方に白銀の奥羽山脈が連り、どこかで小鳥が淡く鳴いています。

種山ヶ原の雲の中で刈った草は

どごさが置いだが忘れだ 雨あふる

大声で歌いました。返答はありません。高原にいたのは自分一人ですから。でも、とりあえず満足して山を下りました。帰りは賢治が地質調査のため入り込んだ山村の一つ一つを見てまわりました。当時は徒歩で、何日間かを費やしました。しかし今の自分は文明の利器を使って半日に凝縮してしまうのです。何かヘンだなんて感じは残ります。

ともあれささやかな賢治行は終わりました。さていよいよペンをとろうかと資料を机に積んでいるところです。

「強者の論理」再考

昨年の春の公開ゼミナールのグループ討論で、We編集部の西内さんが私の考え方を「強者の論理」だと言ったことがきっかけになって、西内さんとの手紙論争(We88/10月号、88/12月号、89/1月号掲載)が始まりました。

私にとっては「強者とは何か」を考えるいい機会となったのですが、この論争を最後にしめくくる意味で、西内さんから直接話をうかがう場を設けたのです。

「まだやっているの? しつこいわね」との声が聞こえてきそうですが、手紙で書けなかったこと、聞けなかったことを話し合えば聞けると思ったのでした。

平井..手紙論争は西内さんにとってどうでしたか?

西内..そうですね、傷ついたし悩んでいました、すごく。

平井..なぜ、そんなに悩んだんですか?

西内..私の「強者の論理」発言は、春ゼミをうけた、夏増刊号の座談会で稲邑さんの話の中に出てくるのですが、校正をしながら、何度削ろうと思ったかしれないんです。でも、

NETWORKNETWORKNE

広がる ネットワーク 〔III〕 平井 雷太

NETWORKNETWORK

私が強者の論理と言ったのは確かですし、私の言ったことが思ったようには伝わっていません。でも、自分が一度口に出したことを線を引いて消すっていうことにすごくためらいがあって……。言ったことは事実だから、消しちやいけないと思って、そのまま出したんですよ。

平井..でも、編集ってそういうことじゃないですよ。

西内..そうですね。あの夏増刊号が出た後で、ずーっとためていた思いを編集部で言ったら、「どうしてそれを早く言わなかったの」って怒られたんですけどね。

平井..そうですね。あのことで傷ついたのは、西内さんよりも僕の方ですからね。

西内..そうですね。

平井..そういう背景をストレートに言ったら、あれは論争にならなかったですね。

西内..うーん、そうですね。その「強者の論理」と言った時の状況というのをまだお話ししてなかったと思いますけど、知ってます?

平井…全然知りませんよ。当日のグループ討論にも出ていませんから、雑誌に載った範囲で論争していたわけですから。

西内…いまさら言うのも失礼だし、恥ずかしいのですが、やはりそのことを言わないと平井さんと誤解し合ったままになってしまいうので言わせてください。

あの「強者の論理」という言葉を私が言ったのは、平井さんに対してというより私が参加していたグループの話し合いに対して、思わず出た発言だったんです。私がいたグループで司会をしていたのは川崎絢子さんだったんですが、司会者その他の何人かの人たちが学校には何も期待できないという話をされたんです。でも、「私は子どもを学校に行かせたい」と思っているし、本人も行きたがっている」というような発言をしたら、「子どもをまだ学校に行かせていないから分からないのよ」というような事を言われてカチンときちやつたんです。『なんだ私には発言する資格がないのか』みたいに思っ
て、発言をシャットアウトされたように感じたんですね。

平井…それがまさに強者の論理だと思えますね。

西内…でも、今は川崎さんたちが何を言いたかったのかおぼろげながら分かりかけているのですが、その時はもう頭にきてたから、「そういうふうに言うのは強者の論理でしょ」とか言って、その延長で「学校に期待しないなんて言える平井さんの考えも強者の論理です」って思わず言ってしまったし

た。このことを本当はいちばん最初に書くべきだったんですが、平井さんとの論争はその状況についてよりも、平井さんが言った何について私がその言葉を発したのかという中身についての論争になり、それはそれで考えさせられたのですが、なんか肝腎なことをごまかしたような書き方にしかならず、実際困ってました。

平井…「学校に行かせたことがない人に何が分かるの」って言ったことに対して、なぜそういう言い方をするのか、と切り返せばよかったと思いますね。そういうふうな形で人の発言をシャットアウトすることはどういうことなのか。相手が言った内容ではなくて、シャットアウトしたこと自体を問題にすれば、そこで論争ができたと思いますよ。

その場が、そういうことが遠慮なく言える雰囲気になっていれば、それが広がるネットワークになっていくような気がしているんですが……。

そのためにはどうしたらいいのか。本音で話そうなんて言っているからだめ。本音で話そうっていうのは、自分からは本音を話さずに、あなたが本音で言えば、私も言うよってことですからね。だから、これは言うべきか言わざるべきかと考えて話をしているうちはダメなんだと思いますよ。

西内…考えて話しているうちはダメ？

平井…「考える」っていうことはおもわくを気にしての話

でしょ。まわりの目を気にして、そんなことし始めたなら何も言えなくなってしまう。

だから僕は、西内さんへの返事はほとんど考えないで書きました。するとストリートに全部出る。西内さんは考えて返事を書いていた。だから、しんどかったと思うのね。西内さんが考えずにすぐ返事を出したら、ラクだったろうと思ひますよ。そうすると、この論争はもともとと面白く発展したと思う。今、西内さんが口で言っているような、川崎さんたちの話を書いたかもしれない。彼女たちがそれを読んで「それは西内さん誤解だよ」と言うかもしれない。

どういう反応が来るか、書いてみないとわからないわけだね。言ったことで悪く思われたって、言わないで誤解したままよりはずっといいわけ。川崎さんたちのことを西内さんがあの論争の中で書いていたら、書いたことによって、彼女たちとの関係が変わったかもしれない、新たな出会いがあったかもしれない、もっとつながりが深まったかもしれないわけですからね。

西内…そうですね。

平井…シャットアウトされたと感じたまま西内さんが発言をやめると、西内さんにとっては「あの人たちはどうせああいう人なんだ」という固定観念を持つ結果になってしまう。断絶の始まりです。こんな思いは後々まで尾を引くことにな

るんです。じゃあ、こんな結果になったのは誰が悪いのかと言ったら、「子どもをまだ学校に行かせたこともない親だから、そんなことを言う」と言った川崎さんたちじゃないわけ。西内さんの発言をシャットアウトしようと思って言っているわけではないですからね。でも、西内さんはシャットアウトされたと感じた。だから、そう感じたことを言えば良かったんですよ。自らをシャットアウトしてしまった西内さんが問題だったんだと思いますよ。だから、関係っていうのは全部自分で切るんですよ。相手に切られてるように感じたとしても、自分がそう感じているだけで相手が切ろうと思っているかどうかはわからないですからね。

西内…うーん、そうかもしれない。

平井…出発点は全部自分なんじゃないですか。こう言ったらどう思うかなんて憶測せずに、思ったまま感じたままを考えずに自然に語っていれば、人との出会いとか関係は自然にできていくんじゃないかと思うんです。その前にあの人はこんな人と決めつけてしまうことが先入観となって、人と人の間に壁として立ちはだかってしまう。話した言葉や書いた言葉そのものにとらわれて、人が見えなくなる。だから、言葉だけを見て、それを言った人を良い人悪い人、敵か味方かに分けてしまうんでしょうね。論争をすることで溝が深まるのは、互いに出会う気がなかったからだと思いますよ。

(3) 「見る子ども」

一九六〇年九月、四人の十二歳の男の子が子どもの死体を探しに二日間の冒険に出る。ステイブン・キングの「スタンド・バイ・ミー」って小説。バーンは不良の兄貴にこけにされている。デディは暴力父親に片方の耳を潰されている。クリスは父親も兄貴も札付きのワルで、だから本人もそうだと世間から見られている。ゴードイの両親は長男をこよなく愛している。おまけで生まれたゴードイは両親の視野の中にない。しかもこの夏に兄貴は死んだ。両親は失った息子への思いに浸り、それ以前よりもっとゴードイが目に入らない。両親の悲しみも理解出来るゴードイはそれに堪えている。そして、物語を書くことで自分を支えている。つまり、ゴードイとは、「見えない子ども」なのね。

冒険の途上、クリスはゴードイに言う。お前は俺達と違う。いつまでも義理で付き合うな。お前まで駄目になってしまう。お前は作家になれ、と。これは大変おもしろい。つまり、「見えない子ども」がどう自分を生きて行くかと考えると、解決

あっちゃ、こっちゃ、フッフ

田中正彦

方法としては、「見える子ども」になると言うのがある。しかし、だとすると、「見える子ども」になろうと努力してもなれなかった子どもは救われない。選択肢は多い方がいい。

クリスはゴードイにこう告げているのだ。「見えない子ども」は「見る子ども」になれ、と。相手から見て貰えないのなら、見てもらう努力以外に、相手を見ると言う生き方もあるじゃないかと（結果、ゴードイは作家になり、この「スタンド・バイ・ミー」を語っている）。そして、クリスはもつとすてきなことを言う。四人は死体を発見したがいかに来て来た兄貴達に横取りされそうになる。父親から盗んで来たピストルをクリスは兄貴達に向ける。しかし彼（男）らはガキをなめているし、またクリスだって本当はビビッている。その時クリスはゴードイに言うのだ。「スタンド・バイ・ミー」と。

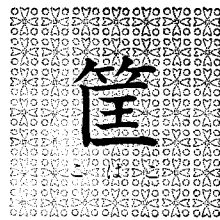
「見る子ども」になれ。けれど冷徹に観察するのではなく、「スタンド・バイ・ミー」であってくれ。

この作品はキングが長編の合間に息抜きに書いたものだけど、心にズキッと触れる。読んでね。

古代エジプトの「死者の書」では、浄土思想の源流とも思われる世界が描かれる。オシリスの審判で冥界入りを許された者は、あらゆる変身願望をかなえられる。多様な願望のなかでは、タカやツバメなどの鳥になりたいという願望が目立つ。なかでも、オシリスにつかえる不死鳥ベンヌに変身したいという願望が圧倒的に多い。かくて冥界は、人面鳥身の無数のベンヌでにぎわうことになる。ベンヌの幻想は天使の翼となり飛天となり、広がるにつれてアイヌの削り、かけやシマフクロウ信仰ともなった。

鳥に託されているのは自由への願望だ。万葉の憶良にも「飛びたちかねつ鳥にしあらねば」という嘆きがあり、「鳥のように自由に」という歌が現代も親しまれている。鳥は自由の天国の使者となり、はばたく鳥や見張る鳥の造形が生みだされる。鳥は人間の動静を見張り、その祈りにせよ悪事にせよ、もろさず天帝に報告する。だから、鳥のいる所では身を慎まなくてはならない。鳥は王冠やみこしなどにも飾られて、このいましめを訴える。カトリック教会の尖塔の鳥は、風見のためではなく、闇を破り真先に光を受ける者としての

『鳥居』



韓国の鳥杆



タイの鳥杆門

■ 村田直文

権威を示している。

靈長類は巢作りをしない。人間も当初は自然の洞穴や岩影を利用したが、やがて独自の世界を築くようになった。こうして、人間が作りはじめた住居には、平和で不可侵の聖域として、特別の思いいれがこもることになった。地鎮祭や棟上式の習俗は全世界にある。争いごとの禁断は寺社の境内だけではない。ヨーロッパでは個人の住宅がアジール権をもち、役人立入りを拒絶した。アジア各地の鳥杆門や沖繩の民家にも残るシーサー等々も、一般人民の住居や集落が、悪意や権力の不介入の場とされた歴史を物語る。鳥杆は日本各地にも出土があり、小便禁止の板塀にまで描かれた鳥居の造形も、この伝統をうけつぐものだった。

明治の「文化大革命」による民族文化の破壊はすさまじいものだ。国家神道は排他的宗派となつて鳥居を神社専用とした。現行天皇家関係諸行事には宗派神道のつくりものが多い。それは特殊な一族だけを聖化するが、古来の伝統では、尊厳なものは各地域にあった。私は、生活の場にこめられてきた古人の思いに共感する。この共感は、天皇制の虚構とはあいられないものだ。

幼児クイズ だてびる?

「母親みんなが保育者」

佐多和子

メンバーが集まり、場所が確保されたら、保育体制はどうしましょうか。

誰か専門家を頼むことも考えられます。でも、十人以下の人数では、人件費が一人当たりどのくらいの負担になるかと思うとそれだけで先の希望がなくなります。それに、誰かに保育してもらったら……誰かが自分の子を教育してくれるとなると、つい人頼みになってしまいそうです。自分の子どもを人に預け、育ててもらうような気になって、自分の子どもを自分で教育していく責任が薄くなりそうです。

子どものためにみんなで考えるグループなのですから、保育もみんなで行きましょう。自分の子どもだけでなく、よその子どもと一緒に保育できる機会なんて、そう滅多にあるものではありません。自分の子どもと散歩に出かけるように、子ども達と歩き、遊べたら楽しいではありませんか。

とは言うものの、普通のおばさんにとって、子どもに怪我をさせずに楽しく遊べるかどうかはとっても不安なことでは

た。でも私達は保育の専門家でもなんでもないので。母親一人一人がすべてのことをやろうとせず、自分でできるところを出しあったら、みんなでなんとか補い合えるのではないかしら。八人の母親がいたら、一人の専門家よりも、もっと豊かに子どもをみられるかも知れません。

幼稚園の先生や保育園の保母さんの真似はできないから、同じようなことをやるのもやめましょう。自分の得意なこと、好きなことで子ども達とつき合っていけばいいのではないのでしょうか。絵を描くのが好きな人、走ってみたい人、きれいな声で歌う人、絵本が好きな人、山歩きの気持ち良さが忘れられない人、子どもに美味しいお菓子を作っている人、いろんな人がいるものです。各々が好きなことを子どもが楽しめるように工夫してみませんか。そして、自分の子どもを注意するように、ほかの子どもにも注意ができれば、母親は誰でも保育者になれるのではないかしら。

ほら、こうしてみんなで何度も考えたら、ちょっとびり勇気が湧いてきました。やってみましょうか。

(カット・加藤友子)



高遠高校での共学 その2

この時に「食物」を選択した生徒は、全部で三十数名、そのうち男子が七、八名いたのだろうか。二年生の時に「食物」を選択させてほしいと嘆願してきた連中である。自ら志望しただけあって、教室では常に一番前の席を横一列に陣どり、教卓を見あげるようにしていた。男女ともに家庭科教育を、と主張してきた私にとっても、実際に授業をするのははじめてである。不安がないと言えは嘘になる。しかし翌年は必修の授業もはじまることだし、「やるっきやない」と我が身にゴーサインを出してスタートをした。ところがはじめてみれば、女子だけの授業と何の変りもない。今では当り前のことだが、その当時はまだ特別な授業のような意識が自分のどこかに内在していたようである。教室の中は、女子だけの時と違う活気と動きがしばしば現われて、男子がいる授業の面白さに次第にのめりこんでいった。同時にそれが次年度への自信にもつながっていった。その時の印象に残っている授業のいくつかを、次に紹介してみよう。

一九七二年五月十五日のことである。この日を今も明確に覚えているのは、沖縄が日本へ復帰した日で、その沖縄を題材にした授業が展開できたからだ。高教組の指示で、この日はそれぞれの授業で沖縄について語ることになっていた。小学生の頃の戦争体験は、私の基本的な教育観の一つになっているし、戦争体験のない世代に語りつぐ責任もあると常々考えていたので、沖縄の戦史を、当の「食物」で一わたり話をした。話しが終わるやいなや、教卓のすぐ向い側にいる男子が、「沖縄では何食ってるのかなあ」とつぶやいた。少しオーバーに表現するなら、この一言で私は脳天をぶち抜かれる思いがしたのである。本土復帰記念に沖縄のことを話すのはいいとして、「食物」の授業なら沖縄の食物の話をテーマにすることはできたはず。「沖縄だって日本の一部だから、米や魚を食べているだろうけれど、暑いところだから、食品や調理の仕方の違いがあるかもね」「この次の時間までにみんなで沖縄の食べものについて調べてこよう」というのが精一杯だった。もしもこの時に、かのつぶやきがなかったら、私自身の教材観を修正する機会を一つ失っていたことになる。生徒の声に導かれる思いだった。

湯沢 静江

正倉院と新羅

「正倉院」は、日本人の誰もが知っている宝物殿といつてよいだろう。そこには、聖武天皇遺愛の品々をはじめ、数々の宝物が納まっている。螺鈿の楽器や鏡、ガラス器や銀製の工芸品等々。その一つ一つの美しさは、現代の私たちにとってもお、目を見はるばかりのものである。

この正倉院の宝物には、日本製のものもあるが、唐からもたらされたものが多い。西域、あるいはペルシアの品々もあることから「シルクロードの終着駅・正倉院」というイメージが広くいきわたっている。私も何度か、正倉院の宝物を見る機会があったが、エキゾチックな獅子やラクダの模様、カットグラスなどを見ていると、シルクロードを行く隊商がひとりでのしのび、またこれらの品々を、海を越えて日本にもたらした日本の遣唐使のことが思われてならなかった。

しかし、このようなイメージには大きな欠落があることを最近になって知った。その欠落とは、新羅の存在である。

新羅は当時、朝鮮半島に最初の統一国家をつくりあげていた。奈良時代の日本は、対外的優位を主張して、新羅を蕃国扱いにしようとして反撥され、両国の国交は八世紀末にとだえた。だが、私的な貿易活動は続いていたのだった。

当時の交通事情では、日本から直接唐にわたる海路には危険が多すぎた。国交の断絶はあっても、日本にとって新羅は、外国品輸入の大切なルートだったのである。

一九三三年、正倉院の反古紙の中から、新羅時代の村の帳簿が見つかった。それより前すでに、屏風の下ばりの反古紙の中に、当時の日本の貴族が、新羅から輸入品を購入するため提出した申請書のあるのが明らかになっている。

東野治之氏の著書『正倉院』（岩波新書）によれば、正倉院の品々かなりの部分が、新羅経由のものと考えられるという。その中には、絨毯とか佐波利製品（銅製の椀や皿、さじ等）のように、新羅製と思われるものも少なくないのである。

シルクロードから唐をへて日本へ。そういった単線の結びつきだけでなく、古代の東アジアは、新羅や渤海、さらに東南アジアからインドまで含めた広く深い視野で見る必要があるだろう。そのようなとらえ直しをしない限り、アジアの中の日本の歴史を正しくつかむことも、これからのあり様を問うこともできないのではなからうか。これがいまの私の思いである。

私の朝鮮史

岡百合子

食

べもの

文

化史

石川 尚子

吉野ヶ里遺跡が一躍脚光をあびて、耶馬台国は九州か大和かとの論争をワクワクしながら読んでいた私にとって、がぜん卑弥呼の世界が現実味を帯びてきたように思える。とくに食生活はどうであったか興味は尽きることがない。

ともあれ、米の生産が始まった弥生時代には、どのような調理法が用いられていたのだろうか。下図は、樋口清之氏の「こめと日本人」からの引用で、この時代の身分上層部の食卓を再現したものである。①の蒸飯と②の餅が、ここでは米を材料とした料理で、あとは素朴な採集食品である。蒸飯は米を「こしき」という一種のせいろう（上下二つの土器）で蒸してあり、いわゆる強飯^{こわい}、現在のおこわである。餅は一度蒸した飯をかたく握りつぶして円形にし、中に果物などをはさんだもので、持ち運びに便利で保存性も高くなる。

このほか、登呂遺跡などからは、玄米のまま火であぶった焼米が見つかっており、土器を用いて煮る調理法もあった。

まだこの時代に文献は存在しないので、遺跡に敷かれたもので推理するしかないが、平安時代あたりになると数多くの文献が残されている。それらを見ると、米の食べ方がかなり

こめの食べ方

①

（弥生から平安まで）

変化し、多様性を増してきているので、例をあげてみよう。

○飯……弥生同様、蒸す方法
水分の多い汁粥^{じゅうかく}、水分の少ない固粥^{かたかく}がある。固粥は姫飯^{ひめい}とも

いい現在のめ

しにあたる。○

糲^{ほしい}……飯を干

す方法 ○鈕飯^{にうはん}

……アワ・ヒエ

・マメ・野菜な

どを混ぜる方

法 ○湯飯・水

飯……湯づけ、

水づけ ○屯飯^{とんはん}

……握り飯 ○

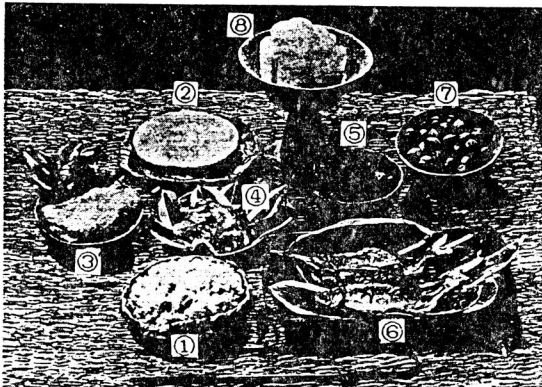
味噌水……雑炊

○油飯……飯を

油で炒める方

法

弥生時代（卑弥呼の頃）の高級食卓



①蒸飯 ②餅 ③焼肉(猪) ④煮蛤 ⑤海草 ⑥干し鮎
⑦くるみ ⑧煮山芋 800~1000キロカロリー

よそおい

文と絵 内山裕子

「今までの育児書って、何カ月では〇ヶ月、どういうことができます式で読むと不安になるでしょ。これは見た人が安心できるの」。育児ビデオ『赤ちゃんのいる暮らし』（原作・監修・毛利子来）をプロデュースしたのが宇田川伊津子さん（34）。パンツ歴34年。東京生まれ伊豆下田育ち。小さい頃は洋服店をしていた叔母の手作り服。おしやれに目覚めたのは中学に入ってから。いわゆるアイビールックのはしり、今までなかった十代向けのフアッション、お店、雑誌が始めた頃、とにかく流行の先どりが好きだった。初めてGパンをはいたのもこの頃。進学校の高校は共学で男子が多い。制服だけど靴下の折り方や白い靴で自己主張、生徒は朝シャンならぬ朝ブローの毎日。自信があって生き生きした女の子が多かったけど、聡明な女の子であることと男の子から見た可愛いイメージとは一致しない事に気づき始める。同じ頃ベトナム戦争反対運動が盛んで、下田にも米軍第7艦隊が寄港、ごく普通の高校生が制服でデモに参加した。特に政治活動は



禁止してない学校だったが、話しあいをもたない教師の存在に優等生的考えを変えていく。Tシャツ、黒のベルボトム、Gパンをはく。汚なく着ることが流行であり主張でもあった。流行の先どりを通していた宇田川さんだが、ボロルックがはやってからそれはやめた。面白いナと思ったけど若くないからと。今はシンプルに、つかず、離れずのシルエット、スツキリ爽やかがモットー。女っぽい服、化粧は苦手。毛皮・ダイヤ・ブランド小物にも縁がない。高校の頃から好きだった黒・紺・白に最近是新境地の赤・ピンクが加わる。二人の息子（10歳・5歳）もモノトーンでど思ったけど赤や黄が似合う。でも愛用のピンクのパジャマはからかわれるからイヤと保育園では着ない。若い人を見てみるとすごくおしやれだけど、おしやれ＝聡明じゃないなと思う。流行追いかけるのに大変みたい。地域で友人と始めた母親グループ「子づれ塾」も10年目、そこでの活動、生協での食品や原発の勉強が今仕事に生かされている。反核映画「アトミック・カフェ」「ダーク・サークル」反核アニメ「100ばんめのサル」の貸出し事務局もてがけている宇田川さん、今までの流行の服はガレージセールでさよならした。「おしやれにこれ以上エネルギーをかけない方が賢くなれそう」なかなかトレンドイ！

コンピューターと暮らし

今年の桜は天候のせいで随分と早く終わってしまった。花が二分咲きの三月二十四日、末の娘が大学を卒業してとうとう三人のこども達の学校生活が終わりを告げ、仕事を持ちながらの子育て二十八年を思い起こすとやはり多少は感慨が湧く。三人はそれぞれにできが良かったり、悪かったり、中位だったりと同じ親が育てても結果はさまざまだったが、共通に言えることはその成績をたえずコンピューターに打ち込まれ、はかられた世代ということだ。親は経験したことのない偏差値による判定を受け、進学という節目でほとんど冒険をすることを許されなかった彼らに比べると、私達の世代は随分と恵まれていたと思う。

義務教育は公立でというのが我が家の方針であったから三人とも地元の小学校・中学校を卒業しているが忘れもしない長男の高校進学の時だった。普段の成績からすれば勿論望むべくもない或る私立校（実は父親の出身校で、昔なら東京の中流家庭でそこに進むのはさして難しいことではなかった）を半分冗談で志望校にあげ、模擬テストを受けた。やがてテストの結果が返されてきたが、そこにはコンピューターの判定によるまことにドライな御託宣が印刷されていて、親子ともども苦笑する以外になかったのであった。

「アナタノセイセキデ コノガツコウヲウケタヒトハアリマセン」。何とも明快な答えである。

塾にもやらず、受験戦争の圏外にいて、まあ自分にあつた都立高校に入れば結構という親の考え方だったから、長男も「畜生め、コンピューターの野郎はつきり言いやがって」と笑っていたが、もつと深刻な状態にある家庭だったらさぞや衝撃的だったろう。それに中学の通知表では電信柱とアヒル（つまり1と2）ばかりが並んでいた次男の場合は多分コンピューターですら返事に困ったのではないかと思う。「アナタノセイセキデ ウケラレルガツコウハアリマセン」。さしずめこう答えたのではなからうか。私達親の世代は自分の人生体験のなかでコンピューターに進路指導を受けたことはない。当然落ちたにしてもお父さんの学校受けてみようかな程度の気楽さで受験にも挑戦したろうし、実際にはたまたま僥倖で受かってしまうことだつてあつたと思う。いわゆる進路指導を商売とする塾や出版社が何の思い入れもなく機械に打ち出させている情報や回答がもう少し人間的であつたなら、そして教育者の信念を映しているなら、あるいはユーモアをちりばめる余裕でもよい、そうすれば時には生身の教師よりもすぐれた相談相手にもなれることだろう。



モーニング
シャンプーは
ハゲる!?

よしだあきひろ

(イラスト 十倉ゆかり)

連絡先: 〒665 兵庫県宝塚市亀井町5-8

石けんコンサート通信 <3>

君の気持ちはよくわかるから
僕には何も言えないけれど

甘ずっぱい香り キラキラ光って

なびく髪 とってもまぶしい君だけだ

僕はもともとと愛をこめて

君におくろふ 風のささやきを

緑のおいを 光のかがやきを

そんな言葉をおくろう

(詩 吉田明弘 曲 瀬良博文)

この歌をつくったキツカケになったのは、「モーニングシャンプーはハゲる」という雑誌の記事をみたことによつてでした。長野県上田市の生活クラブ生協でコンサートをしたとき、生協のお母さんがこの記事の話をしてくれたのです。朝のシャンプーというのは中高生たちの間で流行っている習慣のようで、合成の界面活性剤(合成洗剤)の入ったシャンプーで一日何度も洗髪すると髪の毛がボロボロになってしまうよ、ということでした。ほらフルーツの香りとか、ふんわりツヤツヤとか、あれはみんな合成洗剤のシャンプーなのです。中高生に話をしてもなかなか信じてもらえないのよ、とお母さんは嘆いておりました。

この事を聞いて、僕はなるほどなるほど。確かにそんなよくないシャンプーは使わない方がいいと思うのだけど、若い子たちの気持ちはよくわかるな。だって思春期まっただなかの彼、彼女たち。異性を意識して、ある人のことが気になって、自分のことが気になって。そんなちよつとドキドキした気分はよくわかるもの。自分をちよつとでもステキに見せたい気持ちはよくわかるもの。シャンプーの香りやなびく髪。そんな事で自分が決まるはずがないとわかっていても、使ってしまう気持ちはよく理解できるもの。でもそんなにキミが気にしなくても、自然のままのキミがとってもステキに見えるし、そんなキミが好き。そのままのキミでいいんだよ。そんなせいっぱいの愛を、気持ちは贈りたくて、この歌をつくりました。

もし僕が家庭科の先生だったら(実はなりたいと思っているのです)、むずかしいことを言わずにさりげなく、教室の片隅でこの歌を歌うの。子どもたちが取り囲んで、そこへ暖かい陽ざし。そんなキラキラした授業をやってみたいな。

波

とらえ直そう「評価」

半田たつ子

西堀栄三郎氏が亡くなった。もちろん私は一面識もない方だ。でも、第一次南極越冬隊長としての数数のエピソードを、胸を熱くして読んできた。訃を伝える新聞記事に、生の言葉があった。

「人間も含み、森羅万象みな大自然や。それを知るのが科学で、知り過ぎることはない。そこで得た知識をどう使うかが技術で、技術者には、人倫がなければあかん」。

内申書から評価のことを、編集室で話し合っていた時、「私が高校生の時は、中間・定期二つの試験の平均点が、そのまま通知表についたのでむしろすつきりして、納得できた」と語った人がいた。だからといって体育・音楽・美術…等も、ペーパーテストの点をそのままつけばいいとは言えない。家庭科では、生き、暮らす上で持っていたい知識はペーパーテストで計れるけれど、知ってい

るだけでは何の力にもならない面と、生れつきや家庭環境によって、個人の努力ではどうにもならない領域とがある。家庭科の評価を考えている時だったので、西堀氏の言葉を味わい深く読んだ。

二月頃、朝日新聞の「学園ひろば」に、中三のとき、体育の評価で辛い、悲しい思いをした生徒の文が載った。技術的にはかなわないうから、授業態度でカバーしようと、涙ぐましいがんばりを通したのに、ペーパーテストだつて普通に取れていたのに、「1」をつけられ、「あんな先生、人間じゃない!」と思った、という。

「匿名希望」の16歳の高校生は、授業態度も加味されると信じていた。「でないと、私みたいな生徒は救われない。悲しかったけれど先生の感情的な評価があることを、疑わざるを得なかった」と書いていた。

この号のアンケートには、家庭科の先生の苦渋がにじんでいた。すべての方が、他教科ではないような面倒な方法で、多角的な評価を工夫している。一方、学習の主人公たち―生徒の方も、家庭科は試験だけでも、作品のできればでもなく、授業中の態度や取組む姿勢も評価の対象になる、と受けとめているようだ。先生への信頼があれば、「私はブリキッチョだけど、一生懸命やろう。先生はそれを認めて下さるから」となるだろうが、間違えば、「家庭科の先生には、廊下ですれ違う時、ニコツとしたほうがトクよ」となりかない。

アンケートでは「家庭科教育で『自分の生活をつめ、それを高める力量を育てる』ことを目的にした場合、これはどういう方法で『評価』したらよいでしょうか」の難問にも、ほとんどの方が一生懸命答えて下さったが、「それは評価不可能、するべきでない」との答えもあってむしろすがすがしかった。この場合、評価を数字で表すことを前提にしていると思うのだけれど、完べきな評価方法を考え出すのでなく、教師が評価の限界を知っているという意味で、大事な視点だと思った。評価を巡って、本誌でも意見が交わされて

きた。これを整理する意味で「評価」と「評定」を分けて考え、アンケートをとった。あなただけ評価する人、わたし評価される人、ではなくて、評価は「教師自らが、自分の教育活動を検討し、次の教育実践を調整するために役立てるもの」でもあることを確認したかったからである。この面を忘れ、教師イコール評価する人と思ひ込み、「慣れ」も加わって評価される側の痛みが鈍感になった時、そこから泥沼にはまり込む。

教育改革のモデル校といわれる筑波大付属小学校の不祥事は、通知表を廃止するだけでは、別の問題が生まれることを語っている。

(本号94頁参照)

私の下のお嬢も、通知表のない私立小・中学校で学んだ。学校の理想に共感するものの、通知表廃止に代わるでだてが工夫されていない場合の欠陥を、私も感じてきた。この号に、柴崎さんが書いて下さった、自由の森学園の方針と、御自身の評価のやり方は、ヒントになりそう。通知表に代わるものとして、各教科担任が思い思いの方法で作製した生徒へのメッセージを、クラス担任が一人一人綴じて、生徒に渡すというのは面白い。学籍簿は五段階評価で記入するけれど、希望があれば

生徒に見せ、疑問があれば教師が説明し、生徒の主張が納得できるなら、訂正も辞さないとは。……見事だ。

体育(ダンス)の評価をどのようにしているか書かれた藤武さんは、朝日新聞に載った、高校生の体育の評価に関する発言を読んできて、ずっと胸につかえていたと、お便りを下さった。教師には評価することについて、この痛みがなければならぬと思う。痛みが薄れるのは、「慣れ」なのだろうか？

教師になって初めて担任を体験した時、春休み毎日出勤して、学籍簿をつけた。「なぜ、こんなものが必要なのですか」と尋ねると、先輩の先生が笑いながら「結婚の話が持ち上がった時、よく見せて欲しいと来る人があるのよ」と言った。プライバシーとか、人権とかにあまり目覚めてはいなかったけれど、いやな気持ちで、記入の速度が一層鈍った。やがて「慣れ」と、面倒な学年末の仕事としか感じなくなったのは、恐ろしいことだった。受験を控えた中学校の教師が内申書を武器として振舞い、高校の進路指導懇談会とは入学可能大学の御託宜しくない現実が、不思議でなくなっているのも「慣れ」かもしれない。

内申書裁判の一審判決が出た後、多くの教師から「原告保坂君の『学校秩序』破壊の事実を内申書に書いてそれがいけないと言うことにされたら教師はつとまらない」という趣旨の投書が新聞社に寄せられたとか。啞然とした私は、このことを書きとめている。

八年前まで勤めていた出版社の原稿用紙に書いたその文は、「うすっぺらで自己の真の責務を忘れ、本来の誇りを失った教師」と「教育を牛耳ろうとする権力側の姿勢」と「利己的に学校教育を考えることを恥じない親たち」を断罪し、自分を問うていない。だから、引出しの奥に眠らせていたのだろう。

先生方、学校内のみにより通る慣例や風習を、まっさらなハートと頭でとらえ直してみよう。当たり前の感覚では不思議なことが、大手を振ってのさばっていないだろうか？ 評価は、最優先でとらえ直さなければならぬ問題だ。評価しやすい授業を考えると本末転倒。家庭科の授業への思いを一杯豊かに。数字の評価には限界があることを認めて、「あなたの学習を私はこう受けとめている」ということを、どう生徒に伝えるかに知恵を絞りたい。

が四回目だが、過去三回とも入試制度が異なっていた。かつては、今他府県がそうであるように、公立も私立も一校受験だった。やがて私立が複数受験となり、公立の一部に推薦制が導入され、そして今回の公立複数受験、全公立校に推薦制、全員面接、となっていた。制度が変わるごとに、公・私を問わず高校の序列化が顕著になってきた。臨教審の「個性を尊重した教育」の一つの具現化がこれである。「教育先進県」愛知の制度が全国で実施されていれば、支配層にとつての泰平の世はこれからも無難に続いていくことだろう。目を閉じれば昨日までの騒音がよみがえる。あの顔、この顔、どれ一つとして同じ顔はなく、同じ性格はなく、同じ家庭環境はなかった。たかだか一年間(あるいは二年間)で、しかも倍加した事務に追われ続けた多忙な日々の中で、刻々と成長しつつある彼ら一人一人の心をどれだけ理解できたであろう。そんな問いを発するゆとりさえなくし、気づいた時には冷たい数字で評価し、有無を言わず進路を決めさせ、「仰げば尊し」を歌わせて送り出していた。益々強化される「管理・選別体制」に、気持はあらがおうとしながらも結局は体制維持、補完の手助けをしている。

「センセー、時の流れに負けるなよ」とオレたちに言うけども、センセーも、な!」と、だれもない教室で四十の声々が反響した。
(春日井・辻岡康夫)

—「春学組」No.19より転載—
◆関千枝子さんの『この国は恐ろしい国』を読み、テレビで「母さんが死んだ」を見、We四月号が届きました。関さんの本は、ぜひ多くの人に読んでもらいたいです。

生活保護を受けにくい福祉事務所の対応、日本の政治の欠陥、一つ一つ思いあたります。そして子供に限らず、大人の男性・女性も生きていく力が薄れ、家族をはじめとして、人と人とのつながりを保とうとする思いが拒絶される現代生活を、改めて認識しました。

子供は保護されるべき存在であるとの考えが、日本では大人が子供を大事にしすぎ、親のスネを犠牲にした若者の消費景気であるおっている……そうですね。それをあたり前とする社会が、子供に生きぬく力を失わせ、自分の家の状況を見ることができなくさせるのでしょうね。私にはさらにつけ加えたいことがあります。日本の生活保護は、家制度の補完のための制度でしかないということです。

煩わしい福祉事務所との対応を経、親類縁者に扶養義務の有無を問われた上、人間としての権利として生活保護を受け生活している人々も、子供が18歳を過ぎれば、親の面倒を見るのはあたり前。親に障害があれば、学生でも勤め人でも介護を自分たちでやれ、なぜなら、国にも自治体にも余分な予算はない。周囲の人々も国にとって効率のよい社会人であればならぬから、となるのです。

親兄弟から自立して生活してきたけれど、子供を産み育てるのも人間として当然の権利としてきたけれど、子供が成人すれば人間の尊厳をかなぐり捨てて子供の稼ぎで暮らせ、というのでしょうか。(東京・大仏レア)

◆小沢さんの連載をととても楽しみにしています。第一回目に「親子論に位置する心理学のすがたやその社会的機能を批判的にとらえるというテーマで」とありました。それはそれでとても楽しみなのですが、一方で、心理学という学問のもつ可能性、役割、そういうものもあるんじゃないかと、私は思うのですが、小沢さんはその点についてどういう風にお考えでいらつしやるのでしょうか。でもこれは、連載のテーマにそぐわないことなのかもしれないのですが。(東京・大沢和子)

Weの 読者会だより



〈We 大阪の会〉

◆二月二十六日(月)。中央青年センターにて。

参加者九名。「中絶―北と南の女たち」のVTRを見て話し合った。VTRはカナダの女性スタッフが作成し、女性の視点で各国の中絶の現状を報告している。中絶は罪。そして責められるのはいつも女だけ。だからヤミ中絶に失敗し死に至っても、その死の不当性を訴える者や共感する者がほとんどいないというのが現実であるということ。次々に映し出される国々の中絶のあり方を通してみてくると、女の生き方を女自身が選べていないのだということ。比較的安全な「ヤミ中絶」を受けるための、わずかな金が払えなくて死んでいくという女の命の軽さ、見終わった後の気持の重さ。やりきれなさ。

このVTRを提供してくれたのは浅井さ

ん。実際に自分の高校で生徒達と一緒に見、考え、話し合ったそうである。「中絶の恐ろしさを強調するために見せたのではない。中絶はダメというような教育、避妊教育ではない。もっと男女の関係を問うところから始めたいと思った。生徒達から、男子も一緒に授業を受けるべきだと言われた」。

男と女のいい関係がなければ、いい性関係も持てない。目の前の男ときちんという関係が持てるよう一人ひとりと闘っていかなければならない。その闘いの作戦は？

次回は、タンザニアから帰国された人の話を聞くか、アジアの女達の仕事を視察してきた人の話を聞き、考える予定。今年は「国際化」をテーマにしていきたい、と話し合いました。五月二十一日(月)、中央青年センターにて。

(北川好美)

〈We 田無の会〉

◆四月二日、久し振りに会を開きました。二月十日に発表された新学習指導要領案に危機感を持ったからです。でも残念なことに、準備している間に「案」がはずれ、三月十五日には文部省の「告示」が出ました。追い討ちをかけるように、二十八日には「実施先取り、

日の丸・君が代強制は来春から」という西岡文相の談話が新聞に掲載されました。

一体いつから学校教育が大臣の一言で変えられるようになったのでしょうか。新指導要領の中身について言いたいことは山程ありますが、それ以上に腹立たしいのは決め方です。私は二十一世紀の日本の繁栄のために今日まで子どもを育ててきたではありません。生命をいとおしみ、その子らしく生きていくことを祈ってきました。国家に優先して個人があるという当たり前のことがこまでないがしろにされていくのに膺寒くなりました。親として、おとなとして今自分に力をつけたい、そのための学習会でした。

花の盛りの日曜日にもかかわらず、十数人集まってくれました。勇気をもってPTAの広報紙に新指導要領、日の丸・君が代について書いた人の話を聞きました。広報紙に載せるために、「載せたことに対しての責任はいくらでもとります。でも載せなかったことへの責任は取れません」と反対を押し切った人がいたそうです。恥ずかしくなりました。二月二十四日、自主運営の無認可幼稚園に下の子を入れていたにもかかわらず、まさしく唯々諾々として休園を決めてしまったのですか

ら。

小学校の入学式の前日、新一年生の親として、赴任したばかりの校長に会いに行きました。こどもがどのような教育を受けるかを決めるのは親であること、親の責任として入学

〈89年We夏季フォーラムへのお誘い (No 2)〉

二日目(八月五日(土))の午後は、「水」についてのシンポジウムと討論を予定しています。『柳川堀割物語』をうみ出した広松伝氏に基調の講演をお願いしています。

「川の荒廃は、水郷柳川でさえ例外ではありませんでした。(略)昭和五二年には街の大半の堀割や水路が埋め立てられることになっていました。私は当時、市でその担当を命じられましたが、埋め立てとは逆に浄化再生に取り組んだのです」(『ミミズと河童のよみがえり』河合ブックレット13より)。また広松氏は行政マンの姿勢のあり方について「プランニングに机は要らない。必要なのは足と目と土地の人と対話する耳と口、そして何よりも土地の人の気持ちになりきる心である」とも述べています。

私たちが自然と共生していくには、それぞ

式に日の丸を揚げるのはやめてほしいと伝えました。翌日、しっかり屋上に日の丸がひるがえていました。私もおそれることなく、例えばPTAの場に投げかけていけるようになりたいと切実に思います。

れの場合どんな課題にとりくんでいけばいいのかが、明らかにするのではないかと期待しています。

〈立山ちづ子〉

〈「結婚改姓を考える」ことから〉

◆熊本のフォーラムでは、自然とのかかわりで豊かさを紡ぐことをテーマにされているようですが、去年実行委員として参加した大阪能勢では、都会での人間関係の豊かさを探ったものでした。その成果が少しでもあったのかどうか、フォーラムに参加してくれた「結婚改姓を考える会」の若いメンバーとも、その後交流ができ、5月の〈We兵庫の会〉例会では、彼らと呼んで女と男のいい関係とは？などを話し合っていく予定です。

僕自身、戸籍制度への疑問から「考える会」に参加したのですが、別姓が法的に認められれば良いという考え方から、戸籍そのものの否定まで様々な運動の広がりがありま

学習会を継続していきながら、市民集会の準備を進めていくつもりです。私の力量をはるかに超えた問題なのはよくわかっています。でも目をそらさずにやっつけていこうと思います

(姫野順子)

す。けれども若い人たちに特に強いのは、自立した女と男が相対する中で、結婚に伴う同姓強要は、既製の婚姻制度―家族制度の中へ人々を押し込め、そしてそれは旧来の男性中心の考えかたの中へ女性を押し込める以外のなにものでもない、と、人権抑圧・差別構造の典型的な例であると考えていることです。

家事のできる男性に出会ったから女と男のいい関係がつけられるわけでもありません。「結婚改姓を考える会」との関わりから、熊本へなにか繋げられるものがあればと思っています。

〈中村英之〉

〈編集部から〉

熊本で着々とフォーラムの準備がすすみ、関西では、昨年の熱気を熊本につなぐようと、がんばっておられます。他の地区の方も、どうぞ実行委員に名乗りをあげ、企画を持ち込んで下さるよう、お願いします。

!! Weの会通信 !!

連絡先 石川由紀

東京都世田谷区上野毛4-19-12

☎03-701-8578

FAX 03-704-2254

本欄編集担当 平井雷太

東京都文京区本駒込6-15-1

河西ビル5F すーすーくらぐだ

☎03-941-4659

FAX 03-941-5427

★あなたもつくり手に

We 夏季フオーラムのことしは熊本、遠い 나라と実は思った。自分も地方の育ちでないが、本当に、いけない。

少し、話を古くしてしまつて、申し訳ありませんが、その熊本へ突然行きました。1月15日、16日、九州家庭科教育研究連の大会と家庭科研究サークルの交流会、Weの夏季フオーラム熊本実行委員会(第二回)が開かれることになっていて、そこに招かれて出席の予定だった半田たつ子さんが体調思わしくなく、急拠、あなたWeの会の夏合宿の係でよ。もしかししてヒマ?という、長いいきさつで、「前二つの用件で招かれた方の代理ではなく、(当然デシヨ)さいごの用件の係です。そしてヒマです」と羽田からボーイング767に乗

って、降りたら足の下が熊本だったのですが、桑畑美沙子さんにすっかりお世話になり、沢山の熊本の女たちに会いました。

70人の熱気、これはいろいろな意味で凄いものがある、とまず感じました。1日目の交流懇親会と、2日目は中学校の分科会で研究発表を聞きました。若い先生三人の実践報告というかたちで、日頃のフレッシュな取り組みの様子が話され、私には大変面白く、思わずPTAしてしまいました。

被服、家族とか、それなりの領域を分けて話されるさまざまなことも、PTAする側からは一連の生活上のあれこれにすぎません。

ひとつの教科について、かなり専門的な研究会でありながら、子を持つ親の気持とつながって深めたり検討したりできる家庭科の可能性……これがそういう感じなんだな、と思つたことです。こういう席への同席は、社会教育の世界しか経験のない私です。勿論こも、学校教育に係わる人たちの参加する社会教育の場面ということなのですが。地域にしっかりと結びついていることに驚き、そこでの自分の問題にしっかりと向きあっていることに驚き、しかも彼女たち温かく柔かく、堂々としていられることにお驚き、わたしの身体のあち

こちに眼が明いたような気がしました。

少しばかりですが、聞き及んでいた熊本県政、そこでの教育行政のあられもなさや、ホテルのロビーで読んだ新聞のローカル版、関係出版物の様子、気配から、想像すると、Weのねがうこと、目ざすこと等にとつて、決してよくない環境と思われるのに、そこに培われた共修家庭科のみにりに敬意、これを分かちあうことができるのだろうかこの夏……そういう楽しみ一杯です。

実行委員会は16人の参加。大テーマは山形、大阪を受けついで「ゆたかさを紡ぐパートⅢ」ですが、はじめは水俣、中は熊本の歴史や女性という分科会六つ七つ、終わりは全国からの顔ぶれをそろえた「水を考えるシンポジウム」です。これは楽しみ。『家庭科新時代』にも水をめぐる教育実践を家庭科で展開した例がのつていたのでしよう。

すでにプログラムは、かなり盛り沢山ですが、持ち込み分科会も当然可能です。年ごとに厚みを増している子ども活動は、どのように仕上げられるでしょうか。各地からモノの持ち込みによる応援も、「ひとコマだけでも頑張ろうか」というヒト手の参加も、面白いと思います。

(若竹キミイ)

泉

この頁は、あなたと私の情報交換の場。小さなスペースですが、ご利用ください

◆自信と誇りを取り戻す場に

「キミ子方式」アートスクール開校。

高校へ行かない人のための、人生をもっと楽しみたい人のためのアートスクールです。

主宰 松本 キミ子

期間 '89年五月二十九日～'90年三月二十日(於 キミコ・プラン・ドウ)

人数 少人数制七～十人

授業 週三日 月・火・金曜日午前中

資格 十五歳以上(面接あります)

費用 入会金 六万円。寄付金 一口

四万円。授業料 二十八万円

申込先 キミコ・プラン・ドウ(〒153 東京

京都市目黒区駒場4-7-8 リバティハウ

ス2F ☎03-467-3857)

◆冊子「ヤマセミ君の原発なんか知らないよ」

自然の豊かな山の溪流にすみ、自然破壊や

農薬などの汚染に敏感なヤマセミに、原発を

止めたという思いを託して作られたパンフ

レットです。チェルノブイリ・スリーマイル

島の事故による汚染の実体、原子力発電のし

くみなどを、わかりやすいイラスト入りで、

解説してあります。

。B5判 三十二頁 頒価・三百五十円

。発行 原発と教育研究会

。申込先 反原発ヤマセミの会(〒189 東京

都東村山市栄町1-39-34 後藤方

☎0433-92-1257 振替 東京8-8835)

◆柳川の堀割から水を考える

第五回水郷水都全国会議

'84年琵琶湖で、世界湖沼環境会議が開かれ

ました。以後、参加した住民団体によって、

湖沼等を守るための情報交換を行う集いが、

定期的に開かれています。

日時 五月二十七日(土)～二十八日(日)

場所 柳川市 柳川市民会館

。テーマ 「水循環の回復と地域の活性化」

☆第一日目

I 基調報告 広松 伝 「一人一人の力でき

れいな水へ」

II 記念講演 野田 佳江 「大野の地下水を

守る実践のあゆみ」

III 特別報告 ①中海・宍道湖淡水化問題のそ

の後 ②地下水汚染をめぐる問題 ③石井

式水循環システム

その他に、川下りと柳川観光、交流会など

☆第二日目

I 第一分科会 「水と生活」

II 第二分科会 「先人の知恵に学ぶ水利用シ

ステム」

III 第三分科会 「水系の保全」

IV 第四分科会 「水の再生」

V 第五分科会 「水環境と住民参加」

VI 特別分科会 「河童文化の復活」

。参加費 千円、交流会費 四千元

。宿泊費 四千元～七千五百円

。連絡先 第五回水郷水都全国会議実行委員

会事務局(〒832 柳川市本町117-2 柳川青

年会議所内 ☎0947-3-0215) 夜間、日曜

祭日は〒832 柳川市本城町46-14 ☎0947-

3-3405(広松)

◆タイ出嫁ぎ女性に支援を

急増しているタイ出嫁ぎ女性の人権擁護、プ

ロジェクトに募金を、お願いします。

。問合せ ☎03-412-2775(松井)

十字路

〔北海道〕「脱原発法」への運動本格化（朝日3/7）

「脱原発法制定」を求める運動が、本格的にスタートした。同法制定は去年四月、二万人が参加した東京集会で提起され、各地の市民団体での論議を経て、十二月に、署名の集約先となる「脱原発法全国ネットワーク」（高木仁三郎事務局長）が発足した。市民団体や労組は各地で署名連絡会をつくり、活動を始めている。同法案の骨子は①建設中、計画中の原子力発電所と核燃料サイクル施設は、直ちに廃止する②運転中の原子力発電所、核燃料サイクル施設は、一定の経過措置の期間後すべて廃止する③放射性廃棄物は、地下や海底に捨てず、国民の目の届くところで、発生の責任で管理する。また新たなエネルギー構想について近く発表される。

〔青森〕模擬爆弾を誤投下（朝日3/25）

米空軍三沢基地所属のF16戦闘機が三月十六日に同県六ヶ所村の上空で訓練飛行中、模擬爆弾を誤って投下し、県内用牛開発公社酪

農振興センター職員住宅の庭先に落下していたことが、二十四日明らかになった。けが人などはなかったが、二百メートル離れた家畜舎などで約二十人の職員が作業中だった。同基地には'87年七月にF16戦闘機五十機の配備が完了し、これまで二機が墜落している。事故は米軍、防衛施設庁などからもこれまで一切公表されなかった。現場から約六キロ北では核燃料サイクル施設の建設が進められており、事故の連絡・広報態勢や、今後の訓練態勢が問われそうだ。（以上 高橋芳恵）

〔新潟〕「交換留学」調印へ（新潟日報4/6）

新潟産業大学（柏崎市・金田一郎学長）は中国黒竜江省のハルビン師範大学と、教授・学生の交換留学計画を進めていたが、金田学長が四月二十八日から黒竜江省を訪問し交換留学の調印を行うことが決まった。'89年度は教授・学生とも数人ずつで、中国留学生は日本の経済学、機構を勉強する。日本の留学生は本格的な中国語の習得や経済システムなど

を学ぶ予定。また経済に関する文書・論文などの研究資料の交換も予定されている。柏崎産業大学では、中国を含め「環日本海経済圏」の実情を知ることが大学発足以来の最大のテーマとしている。（山口久子）

〔東京〕中野区議会が教育委員候補者に不同意（朝日3/25）

全国で唯一、教育委員の準公選制を採用している東京都中野区の神山好市区長は三月二十五日、「教育委員候補者選び区民投票」の結果に基づいて三人の教育委員候補者を、開会中の三月定例区議会に提案した。区議会は二人については同意したもの、一人については制度に反対している自民に加えて公明党が反対に回ったため不同意となった。八年前に始まった教育委員の準公選は今回で三回目だが、教育委員候補者が議会の同意を得られなかったのは初めて。選任されたのは、脚本家の須藤出穂さんと元小学校長の伊藤芳雄さん。不同意となったのは弁護士の小笠原彰子さん。（山口喜世子）

〔奈良〕家庭科に初の男子3人（朝日3/18）

宇陀郡菟田野町駒帰、県立大宇陀高校菟田

野分校（藤村榮雄校長、昼間定時制）の家庭科で三月十七日、同郡内の男子三人が、女子三人とともに合格した。県内で家庭科のある高校は五校あるが、県教委は「家庭科に男子は初めて」といつている。藤村校長は「初の男子生徒を迎えるが、三人は家庭科を目指して入学してくる。特にカリキュラムの変更はないが、可能な限り行き届いた教育をしたい」と話している。

（乾 庸子）

〈香川〉町づくりへ積極提言——たかまつ女性会議（四国3/21）

女性の視点から住みよい町づくりを考えてきた「第Ⅱ期たかまつ女性会議」は、三月二十日最終の全体会議を開き、報告書「つくりだすまち——たかまつ」をまとめ、市長に提出した。同会は女性の市政参加を目的に、86年度にスタート。第Ⅱ期は昨年六月に発足、子ども・若者・老人・壮年（市民）の四部会に分かれ、「快適空間づくり」をテーマに現地調査やアンケートを実施、生活に根差した意見提案を集約してきた。壮年部会では、先月一般市民の参加で開催した「まちづくりトーク」を基に「まちづくり委員会」（仮称）の設置を提案している。

（岡内須美子）

〈福岡〉高石パーティ券で県教育長「虚偽」発言（西日本4/14、15）

リクルート事件で東京地検特捜部に収賄の疑いで逮捕された前文部事務次官高石邦男のパーティ券購入について、福岡県教委の竹井宏教育長が同県議会などで「教育庁全体でまとめて買った事実はない」と虚偽の答弁を続けていた問題で、社会党県本部は、県議会などで責任を追及することを決めた。また、福教組と高教組は「教育に関係する者がウソをつくことは許されない。県立高校の点字受験を拒否したことともに県教委の密室性を示した」と批判。抗議行動に取り組む。

（安部宣人）

〈長崎〉公立高の職業系推薦入学制度——見直し迫られる（朝日3/7）

県教委は平成元年度の公立高校入試から、職業に関するすべての学科で推薦入学制度を導入した。これまでは一部の学科に限られていたが、今回は職業系学科の総定員（六千七百

九十五人）の二割弱に当たる千二百八十三人の合格が内定。県教委は「初年度で若干の戸惑いはあったが、成功だった」と評価する。だが、県教組は、「中学時代の学業成績重視という、学力偏重の姿勢は変わっていない」と批判し、制度そのものの中止を求めている。一方、現場には、推薦基準があいまい、日程が早すぎる、といった声もある。

（河野瑞枝）

〈沖縄〉バスガイド35歳定年訴訟—沖バス全面譲歩で和解（沖縄タイムス3/24）

和解に向けた交渉が進められていた沖縄バスガイド三十五歳定年訴訟は三月二十四日、原告・城間幸子さん（36）の主張がほぼ全面的に通った形で会社側との和解が成立。城間さんはこの日裁判を取り下げ、来月一日からガイドとして職場復帰することが決まった。

昨年二月、会社の定める三十五歳定年は男女雇用機会均等法に違反し、無効であると那覇地裁に地位保全の仮処分を申請して以来、女性を中心に支援の輪が広がるなど大きな反響を呼んだ。今後、職場における男女差別の問題に大きな影響を与えるものとみられる。

（大嶺麗子）

アンテナ・アンテナ・アンテナ・アンテナ・アンテナ・

教師の多くは校則に違反した生徒への罰を有効と考え、体罰についても四割の教師が「やむを得ない」としている。校則見直しの動きは起きているが、教師と生徒の考え方のギャップは、まだまだ大きい。(4.8日付読売)

★高校生の海外修学旅行が急増

昨年3月、上海で高知学芸高の修学旅行での列車事故がおきているが、修学旅行は海外に、という高校が'85年には90校だったのが'88年には172校と3年で倍増した。目的地は近隣諸国、地域が圧倒的。増加の理由について修学旅行協会は、政府の海外旅行者1千万人計画の影響や、円高で、費用も国内とあまり変わらないことや受け入れる側もメリットがあり観光当局が積極的に誘致しているという。(3.27日付読売)

★筑波大付小で“金銭不祥事”

東京都文京区の筑波大付属小学校で、教師たちが児童の親から100万円以上の借金をしたり、レストランの代金を払わせたりしていた計11人の教師が停職や減給処分を受けていたことが明るみに出た。同小は付属中学への進学をめぐるで父母が不安をもっていることや、教師が他の公立小へ異動しない人事の停滞が原因とみて①これまで渡していなかった通知表を、4年生以上には渡す②近郊の都県教委と教員の人事交流を促進する——などの抜本的な改革に取り組むことにしている。(4.11日付読売)

★「大將一少尉」復活を検討

防衛庁の陸上、航空両幕僚監部が、'91年からの次期防衛力整備計画の期間中に、自衛官の階級呼称を変更すべく検討中だが、三尉以上の幹部については、旧軍の「大將」から「少尉」までをそっくり復活させようという構想で、士気高揚策と両幕僚監部は説明している。(3.26日付朝日)

★ソ連原潜が火災、沈没

ノルウェー沖で起きたソ連の攻撃型原潜

の沈没事故について、ソ連国営タス通信は死者が42人に上り、2基の核弾頭つき魚雷を搭載していたことを明らかにした。高度の機密実験中の事故とされており、放射能の海洋汚染が心配されている。(4.8・14日付各紙)

★「世界異常気象データセンター」一日本に設置の意向

地球環境に関する国際会議が相次いで開かれているが、佐藤運輸相は7日、地球温暖化など異常気象対策の取り組みについて、「日本が積極的なリーダーシップをとる必要がある」と強調、世界気象機関(WMO)から設置要請がある「世界異常気象データベースセンター」の受け入れについて、前向きに検討していることを示唆した。5日気象庁が発表した「異常気象白書」の警告に対する対策として、打ち出したもの。(4.7日付朝日)

★お役所「女性」へ、看板ぬりかえ急ピッチ

使いなれた「婦人」という名称を「女性」に改める動きが、お役所の世界で少しずつ広がっている。「赤ちゃんからおばあさんまで幅広く取り込みたい」「イメージもいい」などが、その理由。京都府庁には、都道府県では初めて「女性」の二字を織り込んだ課が近く発足する。「婦人」で統一している東京都でも、先月、知事の私的諮問機関から「時代に即して改正を」との提言を受け、近く本格的な検討に入る。(4.8日付朝日)

★男女ともに長寿世界一

世界保健機関(WHO)は7日、'86~'87年の先進国平均余命調査の結果、日本が男女とも世界一の長寿国になったと発表した。順位は、①日本79.1歳(男75.9歳、女82.1歳)②スイス77.6歳③アイスランド77.4歳④スウェーデン77.1歳の順。(4.8日付朝日)

アンテナ・アンテナ・アンテナ・アンテナ・アンテナ・

★新指導要領の移行措置告示

小学校は'92年度、中学校は'93年度の全面実施を前に、文部省は27日、移行措置を告示した。各教科・領域について先取りできる内容を具体的に盛り込んだもので、とくに道徳と特別活動は小、中ともに、ひと足早く、来春からの本格実施を打ち出している。これに伴い、新要領で事実上、義務化した入学式などでの「日の丸」掲揚、「君が代」斉唱は、移行期間とはいえ来春から各学校で一段と徹底されることになる。

家庭科については、小学校5年の「仕事に役立つ物の製作」、6年の「まつり縫い」などを削除。中学校では、'91年度入学の1年の生徒から新要領に沿って教え、男女同一の取り扱いとする。新導入の「情報基礎」「家庭生活」の二領域は、本格実施（'93年度）以降に教える。（3.28日付朝日）

★文教の府に衝撃

リクルート事件、文部省ルートで東京地検特捜部は28日、高石邦男前文部事務次官を収賄容疑で逮捕したが、高石は、①進学、就職情報誌をリ社が配本するため必要な生徒名簿入手②リ社事業に有利に働く教育課程審議会など文部省の各種会議の委員への就任などに便宜を図った謝礼として、リクルートコスモス株1万株を受けたというもの。就職情報誌を足がかりに、教育事業での拡大をもくろんだり社と、その暴走を黙認し続けてきた高石と文部省の責任を問われることになった。（3.29日付各紙）

文部省の阿部充夫事務次官は12日、記者会見し、加戸守行官房長、斉藤謙淳生涯学習局長、古村澄一初等中等教育局長の三幹部が14日付で辞職する、と発表した。国会開会中の幹部異動は極めて異例。今回の人事は西岡文相の強い意向といわれ「高石事件の“けじめ”の側面もある」と述べた。（4.13日付朝日）

★コンピューターに揺れる教育現場

小、中、高の新学習指導要領で、家庭、技術、理科、数学などの教科でコンピュー

ターの本格導入が決まった。学校という巨大な市場めがけてメーカー間の競争や、教育ソフト作りにも、教科書会社、出版社、ソフトメーカーなど数十社が参入、しのぎを削っている。4年後の実施に向け、設備や教える教師の研修を、大急ぎで準備しているが、教材作りなど問題は山積みというのが実情という。（4.7日付朝日）

★国立大入試一分離・分割が大幅増

国立大学協会が国立95大学の来春入試の実施方式・グループ分けを発表。学部の実員を前、後期に分ける分離・分割方式は新たに東大など29校が移行、計38大学152学部で採用されることになり国立大入試の主流に。（3.26日付各紙）

★修業年限3年の壁破る

今春開校した東京都立国際高校で、帰国生に限って「9月入学」を認めた上、必要単位さえ取得すれば「4月入学」の生徒と一緒に卒業できる方針が、都教育庁から出された。これにより、学年途中の帰国で一年を棒に振る不利益から回避されることになった。文部省でもすでに、3年と定められている全日制高校の修業年限に弾力性を持たす方針を決めている。（4.16日付読売）

★卒業文集に通知表掲載

埼玉県行田市の県立行田高校で、今年の卒業生全員が作文を寄せた卒業記念文集に「提出が遅れた」女性徒2人の通知表を担当教師が作文代わりに載せ、全卒業生に配っていたことが、22日明らかになり、県教委は文集の回収を指示した。教委の指摘があるまで、校長や教師の間では特に問題にもならなかった、という。（3.23日付読売・朝日）

★厳罰校則は逆効果

厳しい校則が問題になっているが、7日教組の国民教育研究所がまとめた調査結果で、校則の厳しい学校の生徒は「人間として大切にされていない」と感じているが

●学校・教育・教師

- 83/10 今教科書問題を問う (¥500)
 83/冬 学校はよみがえり得るか (¥700)
 85/1 “学び・教える”とは (¥530)
 86/6 いじめーその根っこには何が (¥530)
 87/4 先生は悩んでいる (¥530)
 87/6 学校給食で論争しよう (¥530)
 87/7 「制服」着る、着せられる (¥530)
 88/5 学校ー絶望? 希望? (¥550)
 87/夏 女たちの教育改革提言 (¥700)
 88/夏 教育はどこへ (¥700)
 ●子ども
 84/7 少年・少女たち
 86/4 幼い日ー大人は忘れてしまった (¥530)

- 86/5 子どもー大人の勝手な思い込み (¥530)
 86/6 いじめーその根っこには何が? (¥530)
 86/7 性ー小・中・高校生は何を思う (¥530)
 86/夏 子どもたちへー大人になる旅 (¥700)
 ●家庭・家族
 85/5 結婚の風景 (¥530)
 85/6 家族、その人間関係 (¥530)
 85/7 離婚と子どもたち (¥530)
 85/8・9 法律と私たち (¥530)
 87/11 「家族」どう変わる、どう変える (¥530)
 ●くらし・環境
 85/12 人間と土を生かす (¥530)
 86/1 くらしの文化を探る (¥530)
 89/1 くらしの倫理を創る (¥550)

★バックナンバーのご案内★
 ご注文は、最寄りの書店(地方小扱い)または、料金をおそえの上、振替で直接ウイ書房へ。

WE EDITOR'S NOTE

◆今回の「消費税」では、わが社などの免税店は、特典をうけるものと思ってい
 たら、たちまち印刷、製本、郵送料、その他経費もろもろに、3%上乗せして請求がきた。Weは、もう定価を上げられないし、やむなく読者の方々に3%上乗せせざるをえなくなった。購読契約更新に編集部が躍起となる時期と重なり、今回の「消費税」はイタライ、ダブルパンチ。
 (青木)

◆今回は、注文用の葉書を同封しました。これでお申し込みになれば、送料は無料ですので、どうぞご利用下さい。特に、裏面のセツト販売については、割引き価格で、消費税不要。二重にお得になります。
 ◆十冊めの単行本、羽生慎子さんの詩集『絵Ⅲ』がで

ました。心惹かれる絵の前行む詩人のモノローグを編んだ、素敵な詩集でプレゼントに最適。
 (稲色)

◆以前お勧め下さって、Weの読者になった方にお声をかけてみて下さい、まだ継続の手続きが済んでないかも知れません。Weをご存知ない方にはバックナンバーをお送りします。その方の関心事をお教え下さい。
 今二冊の単行本を計画中です。夏、宮坂広作氏の『消費者教育の創造』を、秋には、児玉澄子氏の書きおろしを刊行予定です。ご期待下さい。
 (中野)

♥読者の皆様、はじめまして。今月号からWe編集部のお手伝いをさせていただきます。編集の仕事は、まったくの素人ですし、十六年

間、専業主婦をしていましたので、外へ出て働くことにまだ心身共に馴染んでいません。中学生・小学生・幼児の三人も、とまどっているようです。でも、編集部諸姉を目標に、足元の一步一步を歩んでゆこうと思います。
 (柳田まゆり)

★竹藪の中にうち棄てたり権力者の間をヒラヒラ舞ったり、億という金も軽くなつたもの。額に汗して働いて得た金でないだけに。今の教育も、手足を頭とともに使って理解することがあまりにも乏しくなりました。でも家庭科の教材にはリアリティがあります。この特色を他教科なみ評価で潰すのは惜しいと思いませんか? 論義の深まりに期待。
 次号は「生涯学習社会」はバラ色?」です。(半田)

新しい家庭科—

Vol.8 No3 1989年5月20日発行
 定価567円(本体550円+税17円)送料共
 年間購読料・定価7107円(本体6900円+税207円)
 編集兼発行人/半田たつ子

発行所/(有)ウイ書房

〒182 東京都調布市西つつじヶ丘2-25-14
 ☎03(326)1380 郵便振替 東京6-59867
 第一勧業銀行 調布仙川支店 普預1075292
 印刷所/(有)岩佐印刷所 〒112文京区春日1-6-7

家庭科 NETWORKING 出発！

ネットワーキング

あなたも是非お仲間に

「家庭科新時代」がついそこまで来ているというのに、家庭科の先生の顔色は冴えません。黙って手を束ねていれば、私達が願う家庭科とは全く異なるものが上から降りてきます。現場では、日々新しい問題が生まれ、一校に一人か二人の家庭科の先生は、相談する仲間にも恵まれず、研修の時間もままなりません。いきおい、成果の上がった他の人の実践を真似ることにもなりかねません。

今必要なのは、家庭科を何故男女共に学ぶのか、その理念を再確認し、目の前の生徒に噛み合う授業を創る力を育てることです。自分の問題から出発して、解決の道を探る中で仲間を得、連帯感を強めながら力をつけることを願って「家庭科Networking」が出発します。会員の投稿中心の会報を年10回発行します。年会費…3500円、入会費…500円、下記のチューターが相談に乗ります。詳しいことは、ウイ書房内事務局にお問い合わせ下さい。(☎03・326・1380)

〔チューター〕

- | | |
|-------------------------|---------------------|
| 飯野 こう (小学校家庭科) | 田中 恒子 (家庭科教育、住教育) |
| 石川 尚子 (高校家庭科) | 土川 礼子 (中学校技術・家庭) |
| 井田 恵子 (人権、法律問題) | 寺内 定夫 (感性を育てる教育) |
| 一番ヶ瀬康子 (社会福祉、生活問題) | 寺島 紘子 (高校家庭科) |
| 入江 一恵 (高校家庭科) | 西内みなみ (教科教育としての家庭科) |
| 小沢 牧子 (教育の中の心理学) | 福島 澄香 (高校家庭科) |
| 小沢 有作 (民衆の教育史、差別問題) | 福田三津夫 (小学校家庭科) |
| 奥地 圭子 (不登校のこどもの問題) | 朴木佳緒留 (家庭科教育とその歴史) |
| 香川 敦子 (中学校技術・家庭、生物学) | 牧野カツコ (家庭科教育、家族) |
| 加藤 真代 (コンシューマリスト) | 宮崎 礼子 (家庭科教育、経済) |
| 金森トシエ (女性問題、社会一般) | 村瀬 幸浩 (人間と性の教育) |
| 櫛田 真澄 (中学校技術・家庭) | 村田 泰彦 (教育学、家庭科教育) |
| 桑畑美沙子 (地域と結ぶ家庭科) | 森 幸枝 (高校家庭科) |
| 児玉すみ子 (生徒とのコミュニケーション) | 湯川憲比古 (教育行政、情報化社会論) |
| 駒野 陽子 (中学校教育、女性問題) | 湯沢 静江 (高校家庭科) |
| 酒井はるみ (家庭科教育、家族、フェミニズム) | 善積 京子 (結婚、女性学、家族問題) |
| 佐々木 賢 (学校に魅力を失った生徒の問題) | 吉田 紘子 (家庭科教育、衣生活) |
| 庄司 和晃 (民俗学、全面教育学) | 他 (敬称略) |